

老ピアニスト

の遺言

天野祐嬉

Yuki Amano



**僕は、何のために生きるのか
もう解らない・・・**

昭和を代表する、ピアニスト神山泰徳は、
絶望するその子に、人生の目的を語り始めた

全編に流れるピアノ曲、ベートーベン・ブラームス・ショパンの
美しい調べと共に、生きるとは何か？ を問う

1. [本文](#)

第一章 運命のリサイタル

食卓脇の壁には、ヴァイオリンを象^{かたど}った額縁に入れた写真を掛け、その右隣に、金色の優しさに包まれた色紙を掛けている。

色紙には、達筆な毛筆で『音楽は、神様の贈りものです 村上誠慈君へ』と揮毫されていて、愛嬌の有る八分音符のマークが添えられている。

今日は日曜日。私の仕事も息子の学校も休みなので、ゆったりとした気分で、写真と色紙に挨拶を交わし、朝食の支度を始める事にした。

料理を始めながら、フジ子・ヘミング演奏のピアノ曲 リスト・パガニーニによる大練習曲、ラ・カンパネラをかける事にした。

台所にリサイタルさながら、美しい音色が響き始めた。

窓の隙間からは、そよ風が入り込み、縦縞のレースのカーテンまでが踊りを始めた。

今朝は、息子が好きなスクランブルエッグを作る事にしよう。

ステンレスの調理ボールに豆乳と卵を入れて、お箸をゆっくりかき混ぜた。

油がひかれたフライパンに手慣れた手つきでとき卵を落とすと、卵がジューと跳ねピアノの音色とハーモニーを奏で、卵までが美しく踊っている様に見える。

我が家のスクランブルエッグには、決まって豆乳を入れる、息子にとっては、将来お袋の味と言え、この料理かもしれないな。

簡単なメニューだけど、豆乳を投入するこだわりだけは忘れない事になっている。

他の人とは、一味でも違うようにと、母としての小さなプライドがそうさせているのかも知れない。

色紙を揮毫した先生は、食材にも神様の魂が宿っているので、調理に真心を込める事で美味しくなりますよ、と言ってらっしゃった。

普段なら私は九時には仕事で出かける為、朝は何かと忙しく、慌ただしくてついつい、そんな言葉も忘れて調理をしてしまうけど、そんな時は、やはり味が落ちる気がする。

「母さん、お早う」

息子が眠い目を擦りながら食卓に現れた。

今年、高校三年生になった。身体も心も随分成長し、時折見せる横顔が、ハッとするほど夫に似てきている。

「お早う誠ちゃん、今日は誠ちゃんが好きな、スクランブルエッグだよ、早く顔洗ってらっしゃい」

「知ってたよ、さっきからプンプン臭いしてたから」

短い会話だが、それだけでも親子のコミュニケーションがとれている気分で嬉しい。

食卓のテーブルは四人がけだけど、パンとスクランブルエッグを載せた皿は二皿だけ、箸も二膳、コーヒーを注ぐカップも二つだけ。

私と息子だけの朝食は、何かと味気ない。

「母さんトースト、ほらほら、焦げてるよ」

「あー・・・ホントだご免」

「まったく・・・母さんは、何時もトースト焦がすんだからあ」

「ホントね、ミスってばかりだね、またやっちゃった」

息子が笑みを浮かべている。

何気ない親子の会話だが、こんな会話すら満足に出来ない日々が続いた時がある。

楽しい事もあったけど、悲しく辛い事も色々あった。

息子と食卓を囲みながらピアノ曲を聴いていると、演奏はリストのコンソレーション・慰め第三番に曲が変わり、その音色に引き込まれた。

フジ子・ヘミングの弾くピアノの音色は柔らかく、魔法を掛けたような透き通る音色、悲しい出来事を優しく包んで癒されている様だ。

その響きに私の心は慰められ、涙が頬を濡らしてゆく、その瞬間、過去の出来事が走馬燈の様に思い出され、夫の優しい笑顔が浮かんできた――

2

壁に掛けてある写真は、大学時代の先輩であり私の大切な夫で、村上慎一と言う。

もう随分昔の事になるけど、同じ大学で私はピアノサークルに通い、当時先輩だった彼は、大学の管弦楽団に入部してヴァイオリンを弾いていた。

管弦楽団とピアノサークルのメンバーは、何かと交流会が頻繁で、その時彼とごく自然な形で出会った。

赤い糸で結ばれた運命的な出会いと言えれば格好も良いが、そんな感じは全く想像すら出来ない、ご

くありふれた出会いだった。

私の前に現れた彼は、大学生だというのに、紺色のブレザーにネクタイ姿というものだった。そのネクタイの結び目が妙に大きくて、私は思わず吹き出しそうになった。

「ねえ、あの先輩のネクタイ、馬鹿みたいに大きくない・・・」

「ウフッ・・・ほ〜んと、おむすびみたいに大きな結び方ね」

同僚達も、クスクス笑っていた。

「おむすびってあだ名どう？」同期生の高田智美が言った。

「先輩におむすびは無いでしょう」おなじ同期生の早乙女彩子が言った。

彩子は、声楽で言うアルトと同じ立場になる第二ヴァイオリンを担当していて、管弦楽団一の美人で、何かと人目をひく娘だった。

「じゃさあ、デカーネクってどうかな」私が提案した。

「デカーネク？それ良いんじゃない」彩子が返事した。

それから彼のあだ名は、デカーネク（Dekaneku）となった。

何となく間の抜けた音楽家名の様で、友人達も笑った。まさか、彼が後に夫になるなど、その時想像すら出来なかったもので、笑いもののあだ名にして、後悔先に立たずの命名だった。

「僕は、村上、村上慎一です、一応ヴァイオリニストのつもりなんだけど・・・ヴァイオリンは、正直言って今一だけど、気持ちは込めて演奏しているつもりなんだ」

先輩の話口調は、真面目で優しい人柄の印象を与えた。

ただ、服装はあまり感心できるものでは無くて、紺色のブレザーに、おむすびの様な結び目のネクタイ、ズボンはアイロンなど掛けてないのだろう、折り目も無い縞模様の入ったグレー色のズボンをはいていて、若年寄風だった。

外見にはあまりとらわれないのだろうか？この人は、と思ったが、デカーネクの挨拶は先輩風を吹かせない実直そのもので、随分生真面目な感じがした。

デカーネクがヴァイオリンを弾くと言っても、本人が言う様にそれほど上手では無く、演奏は趣味の粋程度のものだった。

そんな基準だから、大学卒業後の就職は音楽関係では無く、ある大手商社に入社して、真面目な商社マンになった。

私の旧姓は本澤美沙といい、幼い頃からピアノが大好きで、小学校の三年生の時、両親にせがんで、ヤマハのアップライトピアノを買ってもらいピアノ教室に通い続けた。

幼い頃、私自身一番の夢はピアニストだったけど、廻りにあまりに優秀なピアニストが一杯いるので、プロの道は難しいと感じ、高校生の頃、音楽の関係で身を立てられればよしとする気持ちに変わってしまった。

村上先輩とは大学時代、ピアノと管弦楽団の合同練習で頻繁に交流をされていて、グループでお茶を飲んだりしている内に自然に交流が深まり、何となく付き合う様になっていった。

「先輩、先輩のネクタイは何で、そんなに結び目大きいんですか？」

ある日、気になっていた事を率直に質問してみた。

「結び方へんちくりんかな？」

「ええ、ちょっと、変かなーなんて・・・ご免なさい・・・」

私は、言い出しながら（なんて失礼な事言って仕舞ったのだろう）と思い、恥ずかしくなり顔を下に向けた。

「このネクタイね、母親が大学入学祝いにブレザーと一緒に数本買ってきてね、それがさ、普通のネクタイより幅が、ほら、広いんだよ、だから結び目も、どうしても大きくなっちゃって」

「そうですか、お母さんが買ってくれたんですか・・・」

彼は親思いの人で、母親の愛情に感謝する気持ちで、幅広のネクタイをしていた様だ。

彼の父親は、彼がまだ幼い頃、肺結核を患い病死して、彼の母房子が、独りで彼と彼の弟の二人を育ててきたそうだ。その母は、千葉の田舎で弟と二人暮らしをしていた。

そんな、事情を聞いて、変ちくりんと言ってしまった事を後悔した。

二人の初デートは、NHKホールで岩城宏之指揮、NHK交響樂團による、ブラームス交響曲第四番の演奏会だった。

大学生なのに、随分奮発して高いチケットを予約したものだ。もっともチケットは彼の自腹だったので、私の財布は安泰で、その誘いに甘えてしまった。

私に気を遣い、なにもN響まで予約しなくても良かったのにと思っていたら、本当の処は、彼自身ずっと前から最も聴いてみたい演奏会だったそうで、独りで行くには寂しいからデートに誘った事を後で知り、独りにが笑いをした。

コンサートの当日、彼の装いは、紺色の背広上下を着て、ネクタイは何時もと違い、青地にストライプ柄が入っていて普通の大きさの結び目だった。

以前、変ちくりんと言ったことが気になったのかも知れない。

一世一代のおめかしなのかも知れなかった。

私も、お気に入りの綺麗なレースの付いた白いブラウスと、フリル付きのスカートを着て、結婚式にでも出席する様な姿でホールに着いた。

私を見かけた先輩は、ゴホンと咳払いをすると、突然話し出した。

「あ、あのお、美沙さん、今日の君とても素敵です・・・」

「え・・・有り難うございます、先輩も・・・」

「今日の君・・・き・・・」照れ笑いを浮かべながら、彼が言った。

「今日の君何です？」

「うん、良いんだ、兎に角コンサート来れて良かった・・・」

「ええ・・・」

二人とも初めてのデートだったので、緊張して言葉が途切れてばかりだった。

それ以上、話す事無く、座席に着いた。

開演までの二十分位は、二人とも何となく、よそよそしい雰囲気になっていた。でも会場がざわつき始めると、漸くその緊張も解けて、何時もの会話が戻り始めた。

ただ、椅子に座った彼は、まるで座禅でもする様に、ピクリともしないほど身体を硬直させ、両手をひざの上にのせ、手の拳をきつそうに握っていた。

やはり、私との初デートで緊張しているのかしら、と思ったけど、それは私の思い過ごしで、彼の口から出た言葉は、以外なものだった。

「岩城さんのコンサート凄いよね、緊張しまくりだよ・・・」

「何故です？」

「だって、日本でも最高の指揮者、最高の管弦楽団だろ、最高の音楽を僕達に伝えてくれるんだからさ、めっちゃ緊張するよ」

「指揮者と演奏家は、楽譜の中に込められた作曲家の愛情や哀愁を、こんな小さな音符を通して感じとり演奏をするんだ。その時、演奏家達は音符と音符の間に秘められる魂の叫びみたいなものを感じ取る訳だから・・・音符は心、いや愛そのものなんだと思うんだ。そして楽器がその愛の世界を表現する。だからこそ聴く僕達は、その曲から希望や夢や癒しの心とかあ、何んかそんな事を感じとれるわけさ、これって神秘的な事じゃない」

そう言う彼の目は、とても輝いていた。

「僕はね、誕生日が十月だからか、秋が好きなんだ、ブラームスってその秋の人って感じがしてさ、僕は好きなんだなあ・・・モーツァルトは春、ベートーベンは夏、チャイコは冬って感じがするんだよね」

「そう言われれば、そうですね・・・私は、ショパンとリストが一番好きだけど、ブラームスも素敵な曲一杯ありますよね」

本当に彼は、音楽をこよなく愛し、そして生真面目の見本の様な人だった。

ブラームスは、彼が一番愛した音楽家で、交響曲第四番は、彼に言わせれば最もブラームスのロマンチズムと哀愁が結実した大曲で、特に第二楽章のロマンチックなメロディーと第四楽章のシヤコンヌ主題は素晴らしと熱っぽく語っていた。

私も、音楽に対する彼の気持ちを理解しようとして、私まで緊張して音楽を聴くこととなった。彼のロマンチックとも言える話に興味津々だった、そして私自身、妙に彼の論理に納得して音楽を聴いていた。

この日、岩城宏之は、アンコール曲をスコア（楽譜）なしで指揮し、手を使わず身体をタクト代わりに指揮をする離れ業を演じて、聴衆を驚かせた。

「良かったね、最高だった」彼が笑顔で呟いた。

「うん、素敵な演奏でしたね・・・」

彼は、コンサートの最初から最後まで、緊張の姿勢を崩すことが無かった。

デートを楽しんだと言うより、まるで真剣勝負の格闘でも見ていたかの様に、音の余韻に浸りながら、だだじっと座っていた。

「なんだか、とっても幸せな気分です・・・」私が呟いた。

「そう、良かったね、ブラームスは、哀愁があって優しい気分になるんだよ」

私は、彼と一緒にいるという事が「幸せ」と言ったつもりだったけど、彼は素敵な音楽で幸せになったと勘違いしていた、（まあ、いいか・・・）と、話を訂正しなかった。

コンサートが終わっても椅子から立とうともせず、二人手を握り、感動の余韻に酔いしれていた。兎にも角にも、初デートは素晴らしい音楽と共に素敵な一日になった事は確かで、その時のチケットは今でも大切に仕舞ってある。

チケットには、私の走り書きがしてある「今日は嬉しかった、Dekanekuさん」と。

それからというもの、彼の真面目さに、段々ひかれて行き、その初デートから二年後、私が大学を卒業して直ぐに、私達は結婚した。

音楽関係の仕事に従事したいという夢は、専業主婦を選択した事で、当分の間は出来なくなったけど、彼との楽しい毎日を選ぶ事の方が、一番良い選択に思えたので、夢は封印する事となった。

結婚する時、二人の約束は、どんなに忙しくとも月に一度くらいは、コンサートや、ピアノリサイタルに夫婦で行こうという事だった。

彼は商社の営業マンとして一生懸命働いたので、収入もそこそこ良くて、コンサートを楽しむ余裕ぐらいいは、一応出来ていた。

その約束通り、私達は、一ヶ月に一度コンサートをチェックして出かけた。

ショパン、リスト、ベートーベン、ブラームス、モーツァルト、チャイコフスキー、ラフマニノフなど大作曲家達のクラシック音楽を二人で楽しみ、その度に二人共、評論家気分で、その時のコンサート批評を夜遅くまで語り合った。

「今日のピアニスト、随分ロマンチストだったね、あのスローテンポに弾くやり方は、珍しいよ、僕はもう少しアップテンポの方が良いなあ・・・」夫が言った。

「そう、私は感情がこもっていて良かったけど、ショパンが生きてたら、何と言うかな」

「まあ、君の弾き方もよしとしよう・・・ジョルジュ・サンドが何というか解らないけど」

夫は茶目っ気たっぷりにショパンのつもりで言った。

「ははは・・・」二人仲良く、何時も笑い声が絶えなかった。

コンサートやピアノリサイタルは、プロの楽団だけではなく、大学の吹奏楽団定期演奏会や、町の音楽愛好家達の演奏会など色々と出掛けていった。

純粹に音楽を楽しみ、感動し、それが二人にとって大切な時間だった。

新婚生活は、毎日が楽しく何時も二人で居たい衝動に駆られた。彼が仕事に出掛けてしまうのが寂しくて「じゃ行ってくるよ」とドアを開けて仕事先に出て行かれると、急に気持ちが落ち込み、出て行った瞬間に、帰宅する時間が気になった。

何度も何度も時計を見ては、夫が帰る時間をチェックして「ただいま」と夫の声がすると一目さんで、ドアの前に立ち、飛びつくように夫を迎えるのが日課で、夫の帰宅が待ち遠しくて仕方なかった。

夫婦って本当に不思議な絆だと、つくづく感じる日々だった。

青年期までは、親子関係から愛情を学び、兄弟姉妹や友人との間で、愛情を深め、いつの間にか大人になると、其れまで培ってきた愛情を独りの男性に注ぐ、まるで宇宙の始まりビックバンの様に、何も無い世界から、二人が出会い、愛というビックバンの始まり、夫婦の新しい旅が始まる。

その愛から、沢山の感動や喜びが生まれ、心も身体もその喜びと感動に浸る。

夫との新婚生活は、まさにその様な日々だった。

何もかもが新鮮で、何もかもが愛に包まれていた。

3

私達二人は決して上手な演奏とは言えないけど、休日ともなると、夫はヴァイオリンを奏で、私はピアノを弾いた。

結婚して半年した頃だった。

「ねえ、慎一さん、二人で何かこれって言う、演奏を完成したいね」

「そうだね、完璧な演奏にして、将来子供が出来たらさ、ほらお父さんとお母さんの愛が詰まった演奏聴かせてあげる・・・なんて子供に自慢できる様な素敵な演奏が良いね」

「そうよ、本当にそう、それが最高の情操教育だと思うわ」

二人意気投合して、さっそく二人のテーマになる曲を探すことにした。

そして見つけたのが、エルガーの、愛の挨拶だった。

二人でしっかり練習して、ちゃんとした演奏が出来る様にしようと言う話になり、終末は数時間練習をする事になった。

エルガーは、イギリスの近代音楽の父と称され大作曲家の中でも愛妻家で、イギリス紳士の見本の様な人物だったという。エルガーの代表曲・威風堂々第一番は、イベントの入場式には欠かせない大曲になった。そのエルガーは、とても妻思いの人だったそうで、愛の挨拶は、愛妻キャロライン・アリスの愛情に支えられ完成したという。

エルガーがバイオリンを奏で、アリスがピアノを弾き、二人睦まじく、この曲を演奏したのだからと思うと、私達も心が熱くなった。結婚してから時間がとれる時は決まって、この曲を練習する事にしていた。

私達は、何時も仲の良い二人だったけど、演奏となると少し話が違って来る。私は、ピアノ演奏を始めると、気持ちが高揚し、ちょっとした音程のずれが生じるとイライラしてしまう、夫の演奏は決して褒められるレベルで無いため、二人で息を合わせ演奏するのは結構大変で、エルガー夫妻の様に何時も仲睦まじく演奏する事は出来なかった。

「ねー、そこんところ、慎一さんの演奏が、微妙にワンテンポ遅れるのよね・・・」

「そう言う美沙こそ、リズム早いと思うよ」

「私のせいじゃないわよ、慎一さんの微妙な遅れで、そう聞こえるんだって」

「そうかなあー・・・」

「ちゃんと、演奏してよね、ア、ナ、タ」

「うん・・・だけど・・・」夫は納得せず、膨れっ面していた。

まあ、上手く演奏するのは中々難しくて、何時もこんな調子の会話になっていたけど、練習して一年が経過すると、あうんの呼吸が出来てきて、この時間の共有こそが、二人にとって最も大切なもので、かけがえのない夫婦なんだって実感も沸いてくる様になった。

二人の演奏が上手になった年の一九八八年七月七日（七夕）、待望の男の子が誕生した。この年はソウルオリンピックが開催されて世界中の人達がお隣の韓国に注目した年だった。息子が生まれると、生活は大きく変わっていった。

＊

息子の名前は、村上誠慈。

実はこの名前は、夫が、世界的大指揮者小澤征爾の大ファンだったので、名前負けしなければと

、ちよっぴり心配しながら偉大な指揮者小澤征爾の名前をちよっと拝借して当て字をつけた。当て字とは言っても、誠実で、慈愛深い人になってほしいと言う気持ちを名前に込めていて、なかなかの名前だと自画自賛していた。

誠慈が誕生すると、オムツ交換、授乳、離乳食作りと忙しく、私は育児に追われ、夫との演奏も中々出来なくなり、楽器にさわる時間が少なくなった。

そして気がつけば夫と演奏会に出かける事も、あまり無くなってしまった。

でも、演奏会に行けなくても、かけがいのない息子が目の前にいて、夫が帰宅すると、二人で誠慈を抱きかかえる喜びは、ひとしおのもの、その幸せに私は満足だった。

誠慈には、何時も音楽を聴かせたくて、カセットテープや、当時新技術で急速に浸透してきたコンパクトディスク（CD）で出来たシューベルトやブラームスの子守歌を買ってきては、聴かせていた。

「♪ねーむれー・・・ねーむれー、せいじちゃんーん・・・」

毎日、子守歌を歌ったものだった。

誠慈には、音楽家の道を志してもらいたくて、まだ赤ん坊なのに、クラシック音楽ばかり聴かせていた。

育児に追われる毎日は、時にはストレスも溜まったけど、誠慈の寝顔や、笑い顔を見ると、そんなストレスもいつの間にか消えている。

夫と息子と三人の生活は、実に幸せで、大切な時間だった。

しかしその幸せも、日ごとに微妙なずれが生まれ始めていた。

夫は、総合商社に入社して不動産事業部に配属された。多忙な毎日を過ごし、時間に追われる様になっていた。

商社マンと言えば聞こえが良いが、まだ平社員だから上司の鞆持ちで、東京都内の大手建設会社、設計事務所そして東京都庁を行き来する毎日だった。

入社して数年後、東京の六本木を中心とした、ある大規模な都市再開発計画を立案する仕事に関わったため、それからというもの帰宅は毎日夜中になる事が多くなった。

週末でもヴァイオリンの演奏が出来ない日々に、夫は仕事漬けになっていった。

「ねえ、今度の週末は休めるんでしょう？」

「いや、日曜は部長が、都議会議員の接待ゴルフでね、僕もついてこいって言うんだよ」

「え、だってあなたは、ゴルフなんかしないでしょう・・・」

「そう、そうなんだけど、部長の命令は絶対だからさ、お前も早くゴルフ覚えろって」

「ゴルフ場で何するの？・・・球拾い、キャディの勉強」

私は唇を突き出して、少しばかり意地悪い言い方をした。

「そりゃ、色々・・・」

「また演奏も出来そうもないわね・・・残念ね」

「しょうがないよ、日本男児として、日本の未来の大きなプロジェクトに関わった以上は、多少家庭が犠牲になるのは止む終えないよ」

「別にあなたが六本木のプロジェクトに関わる事なんて無かったのに、家庭を犠牲にしてまで、お国の為に頑張るって訳・・・」

私は、ふくれっ面をして、少々きつい言葉を夫に言ってしまった。

「まあ、そう言わないで・・・」

でも、そんな言葉を言われながらも、夫は何時も平静で、優しかった。

夫の方がずっと大人だった、だから、私とは喧嘩にならない、夫は私の不満を吸収する不思議な暖かさを持っていた。

夫と私の性格は、どちらかと言えば正反対で、夫はあまり多くを語らない芸術家タイプで見た目インテリっぽい、反対に私は社交的で活発、夫が一言う間に、いくつもの話をしてしまうし、夫は几帳面だけど、私は結構大胆な性格でそそっかしくて忘れっぽい。

夫婦には似たもの同士って有るけど、内は正反対の夫婦の方かもしれない。

でも、正反対は互いの長所と短所を上手く融合出来て良いとも聞いたことが有る、我が夫婦はその良い面が出ているのだと自負していた。

生真面目な性格の夫には、笑ってしまうエピソードが有る。

夫がまだ新入社員の頃、会社の課長が何人かの仲間を引き連れ、千葉の中山競馬場に行った。課長も同僚も競馬が大好きなので馬券を沢山購入したそうだ。

その際「おい、お前も馬券買えよ」と課長に言われた、処が夫は「僕は賭け事はやらない事に決めていますから・・・」と返事をし、半日競馬場にいたのに、結局馬券を購入せず、その日を過ごしたそうだ。その課長は「お前は何か楽しみで生きてるんだ・・・」と呆れかえられたそうだ。

一時が万事こんな性格で、夫は生真面目すぎて変わり者に見られていたようだ。

真面目な夫は、休日には家庭を一番に考えて行動はしてはくれたものの、六本木の再開発計画は大変な忙しさで、家庭を顧みる時間を許してはくれなかった。

私も、誠慈の育児に全てを掛ける日々が続く、幸い誠慈も大きな病気もせずに、可愛い幼稚園児になっていった。

ただ、夫の仕事の忙しさは年々激しくなり、新婚当時の様に毎日音楽の話をする事も、演奏の練習をする事も、殆ど出来ない生活が続いていた。

誠慈が幼稚園児になった頃には、夫は真夜中に帰宅する事もしばしばで、二人ともストレスが溜まっていった。

それでも、夫の優しさと、息子の笑顔で、何とか幸せな日々を送らせてもらっていた。

夫と演奏した愛の挨拶は、誠慈の誕生日には、必ず演奏する事にしていたので、小学校を卒業するまで、親の演奏を聴くようになり親子の絆を強くする大切な良き一時だった。

誠慈が、小学校に入学してまもなくの事だった。

ある日、私が住む荻窪から電車で二十分位掛かる郊外に出来た大型ショッピングモールに出かける事にした。

そこで買い物としてしていると、大学時代の同僚、彩子にばったりと出会った。

思いもよらない場所での再開に、私は驚いた。

「あぁー、彩子・・・彩子じゃないの」

「あれえー美沙、久しぶり」

「元気？、彩子どうしてたのよ」

「う～ん、まあ・・・」彩子は心なし寂しそうな口調で返答した。

「あれ、この子、誠慈君？」

「そう、誠慈大きくなったでしょう、今ねピカピカの一年生なの」

「そーう、美沙は幸せそうで良いね」意味ありげな言葉を呟いた彩子だった。

「そう言う彩子は、連絡とれ無くなっちゃって、水くさいんだから、何処にいるのよ」

「そうね、めっちゃご無沙汰で・・・」

誠慈が生まれた時お祝いに駆けつけてくれて、それから時より連絡を取り合っていたけど、誠慈が三歳になる頃から彼女と交流が途切れてしまっていた。

彼女の事は、気になって何度か連絡はしたけど、一二度電話で会話した位で、会うことは無かった。私自身育児に追われ、彩子と会う約束も出来なかった。

彩子は、大学時代でも美人で目立っていたが、久しぶりにあった彼女は、さらに大人っぽい美人になっていて、すっかり所帯じみた私と比べると、大違いに感じた。

「今、仕事どうしてるの、結婚は？」

私は、矢継ぎ早に、彼女に質問をした。

彼女は、以前の職場で、妻子有る上司と問題を起こして会社を退社し、その後住居も変わり独り暮らしをしていると言う。

トラブルが有ってから、彼女は誰にも行き先を告げず引っ越していて、ここ数年、年賀状すら配達不能だった。

「美沙の結婚は正解だったようだね、私は、未だに独身・・・将来もそうかも？」

「なんか、訳ありの様だね・・・困っている事有るなら、相談にのるわよ」

「有り難う」

「ねえ、せいじ君、お姉ちゃん覚えてるかな？」

「わかんない」覚えていない誠慈は頭をふった。

「忘れられちゃったか、せいじ君は、いくちゅになりましたか？」

「六歳、小学校のおー、一年生なんだあ」

「そ〜う、小学校になって良かったねえ・・・お姉ちゃんはね、楽器店で働いてるんだ、ヴァイオリンとかギターとか販売してるのよ、子供のヴァイオリンも有るんだよ」

「ヴァイオリン！」

私は思わず大きな声を出し、廻りのお客達が振り向き、恥ずかしくなった。

「ご主人の好きなヴァイオリンの綺麗なショールームが有るんだよ」

「彩子、何処の楽器店なの？」今度は小声で質問した。

「お茶の水の倉野楽器」

「えー、凄いじゃない、そんな大きな楽器店で働いてるんだ、いいなあー」

「美沙は音楽の仕事したかったんだものね、今は専業主婦？」

「そう、専業主婦、音楽の仕事したかったけどねえ」

彩子が勤めている倉野楽器は、半世紀以上、お茶の水で楽器商を営み、首都圏の音楽家なら誰もが知るプロ御用達のお店で、著名な音楽家、ヴァイオニストが時折お店に現れる事で知られていて、私も学生だった頃、何度か行った事があった。

「処で美沙、ピアノ弾いてるの？」

「勿論弾いてるけど・・・と言っても昔のように毎日弾く訳にはいかないのよね、学校のお母さんの集会とかさ子供の事で忙しくて、でも誠慈にも教えたいと思っているの、主人とはねエルガーの愛の挨拶を随分練習したわ、この子の為に夢中でね。今は、誠慈がピアニストにでもなってくれたら良いけどなあと思ってる・・・まあ夢物語だけど」

「あまーいお話ごちそうさま・・・美沙とデカーネク先輩は、本当にベストカップルね、先輩もお元気なんでしょう？」

「デカーネクかあ・・・久しぶりにその言葉聴いたなあ・・・」

ハハハ・・・私も彩子も満面笑みを浮かべた。

「主人は今ね、六本木の再開発プロジェクトで忙しくしてるの、毎日夜中にしか帰らないのよ、休日も仕事になる事が多くてね、母子・・・」そう言いかけて話を止めた、本当は母子家庭の様だと言うつもりだったが、夫に悪い気持ちが浮かんだからだった。

「そうなんだ、男って仕事中心だからね・・・」彩子の言い方は意味深だった。

「そう、仕事漬けの毎日だから、私はちょっと不満」

「何言ってるの、愛する彼も、子供もいる美沙は贅沢な悩みだって」

「そうか、贅沢か、ハハハ」

「今度、倉野楽器に来てみたら良いわよショールームも綺麗にリニューアルしたし、お子さんの音楽教室も色々やってるし、それにね有名なヴァイオニストなんかも来店するの、ほんとビック

りするんだから」

「そう、それは是非行ってみたいなあ、楽しみね」

私達は、二年半ぶりの偶然な出会いで懐かしく、それから数時間お茶を飲みながら、話し込んでしまった。彩子が会社を辞めた理由やら、問題の彼の事や、結婚しない理由やら、色々と彼女は、私に話をしてくれた。

私達は話が尽きなかった。長時間になった大人の会話について行けない誠慈は、しょげ返ってしまっただが、彩子は誠慈の姿を気に向け、ドラえもんのおもちゃを買ってくれた。

「やったー、お姉ちゃん、ありがとう・・・」

子供はげんきんなもので、さっきまでしょげて声も出さなかったくせに、おもちゃを買ってもらった途端、にこにこ顔で、私達の廻りで遊び始めた。

懐かしい再開はとても有意義な時間になった、偶然と思った再開だったが、この再開は、後の私と誠慈の人生に大きな転機をもたらすことになった。

私達の話は尽きなかったけど、気がつくとすでに夕方で、新しいショッピングモールの西のガラスは夕日で赤く染められていた。

「じゃ、それそろ、帰らなくちゃ・・・」

「うん、ホント有り難う、近い内楽器店行くね」

「うん、待ってるから」

私達は、再開を約束してその場を後にした。

5

それから二週間が経ったある土曜日、私と誠慈は、彩子の勤める倉野楽器に行くことにした。

夫も、是非行ってみると話していたのだが、出向く三日前になって、またもや六本木プロジェクトの仕事で急な呼び出しがあり、その日三人で行くことが出来なくなった。

私と誠慈は、電車に乗りJRお茶の水駅で下車した、同じ東京に住んでいても、お茶の水は学生時代に來ただけで、結婚してからは一度も訪れる事がなかった。

このホームは何十年建ったのだろうか、ホームのコンクリート床も階段も、屋根も随分古びれた感じで、一日十万人以上もの人が乗り降りする駅としては、随分小さな駅。

利用者が多すぎて立て替え工事が出来ずに何十年も経過しているという、NHKの旅番組だったろうか？ テレビで説明していた事を、ふと思い出した。

駅の構造物は、昔ながらの古い作りで、総武線と中央線が同じホームの左右に位置し屋根を支える柱は、驚くほど間隔が狭く鉄骨むき出しのまま、黒と黄色の縞模様に頭上注意の文字が書か

れたビニール看板が鉄骨とコンクリートの合間合間に貼られていて、近代的な東京の変わりゆく風景の中で何十年も変わらない、まるで工事現場の中を歩いている様、何とも不可思議な空間に感じられた。

改札口に向かう階段が中央に掛けられているけど、その階段の屋根も低くて、階段の下を歩くと鉄骨に頭をぶつけそうになる。

外国人や現代の青年が、ここを通れば一〇〇%頭をぶつけるに違いないけど、それだけ昔の日本人は背丈が低かった事を物語るし、この駅舎建設時こんなに沢山の人が乗り降りする事など想像すら出来ない時代だったのかもしれない、そう、時間すらゆったりしていた時代の建築物の様に私には感じられた。

駅の改札口を出るとノスタルジックな風景が広がる聖橋が見える、学生の頃この橋を歩いた事を思い出して、急に感傷的になった。聖橋の南には、基督教の神殿ニコライ堂が有り、北には江戸時代の徳川幕府が創建した湯島聖堂と湯島天神が有る。

聖橋は、日本の信仰と基督教の信仰を結ぶ聖なる橋。

美しい放物線を描くアーチの橋。

その聖なる橋の欄干をさわりながら斜め下を見下ろした、そこに神田川がゆっくり、ゆっくり流れている、川の両袖には何年も掛けて育った美しい木々が、パステルで描いた様な穏やかな緑の化粧をして私に語りかけている「ここは都心の桃源郷」と

その瞬間ベートーベンの交響曲第六番・田園の第二楽章小川のほとりの情景変口長調が私の脳裏に浮かんだ。

田園のメロディーの様に、川はゆったりと流れ、小鳥は歌い、人は優しさに包まれる。

何十年とこの風景は変わらない、川の流れも、木々の装いも、昔の人々の心も今の人々心も、聖橋から神田川を見つめ、語らい歩いたであろうこの場所は、神聖なそよ風が流れる場所だった。

一時、その神聖な雰囲気酔いに酔っていたが、お茶の水の駅前から楽器店街に向けて、誠慈と歩き始めると、その気持ちはあっという間にかき消された。

土曜日にも関わらず人がごった返していた。

膝元から素足が見えるジーンズ姿で、金色に染めた髪は雷でも落ちたのと聞いてしまいたくなる程のぼさぼさルックの男達や、まだ十代の若い女の子三人が、目を覆いたくなるほどのミニスカート姿で道幅を占領して歩き、交差する男達が避けて通っている。その後ろには、私のピチピチした肌見てと言わんばかりに、肩から胸元に掛けて殆ど素肌が見える様相で、真っ白く六センチは有るだろう分厚い幅のベルトを通したショートパンツから、おへそがチラチラ見えていて男達が目線が注がれる、摩訶不思議で多種多様な人間が袖を触れ合うように動いている。

昭和初期時代聖橋を渡る女学生が、この風景を見たら何と言うだろうか、今の世の中は不純だと言って嘆くだろうか、それとも開放的で素晴らしいと言うだろうか？そんな事を感じつつ歩いていた。

それにつけても、お茶の水の駅前路地は雑踏と化している。

道路を往来する人の歩く速さは、今の日本の忙しさそのもの、うす汚れた古い看板や、目立てば

よいとばかりに我が物顔を主張する毛羽立つ看板、そして雑然とした雑居ビルが目線に飛び込むと、ロマンチックな気分は一瞬にして消え去り、変わりに聞こえてきた様々な宣伝音と学生達の靴音が私を現実の東京に引き戻した。

昔の哀愁漂う東京と近代文明の結晶の東京が同居する街、それがお茶の水の風景だった。

夫もこの雑然とした東京の風景の中で、苦勞していると思うと、ちょっぴり寂しさが込み上げてきた。

駅から、駿河台の明治大学キャンパスに向かい歩き始めた、目線遠くに随分高い明大の校舎が見えている、立て替え工事をしている様で、明大が大きく変わる象徴のような建物に見える、駿河台下の交差点へ向かう明大通りは、緩やかな下り坂の左右に楽器店が軒を連ねている。

通称、お茶の水楽器店街、その殆どが店頭の入り口付近ギターを販売しているお店が多い、カラフルなエレキギター、フォークギターが何十台も所狭しと飾られてあった。

学生達が歩く街だから、店頭の商品も学生中心なのだと感じた、だがその中で、クラシック音楽に視点を置く楽器店が有った、そう彩子の勤める倉野楽器だった。

「誠ちゃん、着いたわよ」

「ここなの？この前のお姉ちゃんが居る処って」

「お姉ちゃん？そうね、彩子さんにね、ちゃんとお挨拶するんだよ」

彩子と私は同じ歳なのに、彼女は、まだお姉さん扱い、この差はなに？

「なんて言うの？」誠慈が聞いてきた。

「こんにちは、この前は、どうもありがとって・・・ね」

「うん」

細長い階段で二階に上がり、ドアを開け中に入ると、壁という壁はガラスのショーケースが続き、そのケースの中には、ヴァイオリンが美しく並べて飾られていた。

「うわー、凄いね」私が思わず呟いた。

「ママ、ばいおりん、一杯有るね・・・」誠慈も沢山のヴァイオリンに驚いた様子だ。

出て来た店員に、あの一早乙女さん・・・そう尋ねかけた数秒後、彩子が事務室から飛び出してきた。

「いらっしやいませ、来てくれたんだ」彩子は満面笑みを浮かべて、私達を迎えた。

誠慈は、リハーサル通り、「こんにちは、お姉ちゃん、この前はありがとうございました」とはっきりとした口調で彩子に話しかけた。

「誠慈君、待ってたよ・・・嬉しいな」

倉野楽器で彩子は、ヴァイオリンの中堅販売員として活躍していた、倉野楽器では、大人から幼稚園児に至るまで、あらゆるヴァイオリンの販売や修理、メンテナンス全てを行うシステムが出来上がっていた。もちろん、ヴァイオリン教室も様々な年齢層に合わせて開設されていた。

彩子は早速、店内を案内してくれた。

数万円の手頃な価格ヴァイオリンが有ると思うと、オーダーメイドになると数百万円以上する

もの、特別に飾られている年代物のヴァイオリンになると、一千万円と書かれていて目を疑った。まるで宝石商でダイヤモンドでも見ている様に、ヴァイオリンと言えど、ピンからキリまで大きな開きが有った。

夫と一緒に、どんなに喜んだらろうか、と思うと残念な思いが湧いて出ていた。

「ママ見て、ほら赤ちゃんヴァイオリンだよ」

誠慈が指さしたヴァイオリンは陶器で出来ていて、兎やクマの縫いぐるみがヴァイオリンを演奏している小さくて可愛らしいイミテーションだった。

「ほんとね、クマさんと、うさぎさんがヴァイオリンを弾いてるね、可愛いね」

三階に上がると、ヴァイオリンの工房が有り、何人ものヴァイオリン職人がヴァイオリンを丁寧に製造していた。

「随分沢山のヴァイオリン作ってるんですね？」

「そうですね、新しいヴァイオリンも作りますが、修理のご依頼も沢山有るんです」

「この工房でお客様が納得出来るヴァイオリンを作る事が私達の使命ですし、責任ですから」工房のチーフが、優しく微笑みながら、仕事を熱く語ってくれた。

倉田楽器は、商品も制作スタッフも日本一だと、彩子は誇りをもって説明してくれた。

「処で、ねえ美沙、誠慈君に、ヴァイオリン習わせない？」彩子が言ってきた。

私は、彩子の誘いだから断りづらかったけど、ここに来る前に夫と話をして、ヴァイオリン教室よりピアノ教室に通わせる事でまとまっていた。

その大きな理由は、私がピアノを弾くので、これから教室に通いながら家でもピアノの練習が出来る為だ、夫は誠慈にヴァイオリンを教えたい気持ちだったが、現在の仕事の忙しさを考えると無理だろうとの結論で、私と誠慈でピアノに集中した方が良いだろうと、夫自ら言い出した。

ただ、誠慈にピアノを強制するつもりはなかった。

自然にピアノを弾きたくなる事を願っていた、親が子供の将来を案ずる気持ちと、将来を決めて仕舞う事は意味が違うし、ピアニストにする事が簡単では無いと感じていたから、誠慈がピアノを習いたい気持ちが芽生えてからでも遅くは無いと思っていたので、幼稚園時代は、家でピアノを聞かせたり、ピアノの前で歌を歌ったりする程度でピアノ教室には行かなかった。

これは親馬鹿かも知れないが、ピアノを弾くセンスを誠慈は持っているのではと感じてはいた、何故なら、むすんでひらいての音楽をちょっと教えてみたら、意外と簡単に弾きこなして、私自身驚いたから。

とは言っても、その後ピアノを覚えようとはしなかったの、レッスンはしなかった。

「ご免ね、お誘いに答えられなくて」

「うーん、良いのよ、母親の考えが一番なんだから、気にしないで」

教室に通うことは丁重にお断りしたが、三ヶ月後に訪れる夫の誕生日プレゼントのつもりで、

オーダーメイドのヴァイオリンを密かに依頼する事にした、夫の使うヴァイオリンは、学生時代から同じで、多少傷みも有ったので、思いっきり新調する事に決めた。

夫には絶対内緒にする為、誠慈には解らないように、ヒソヒソ話を始めた。

「ねえ小さい文字でも良いけど、ヴァイオリンの何処かに、Happy Birthday to Sinichi って刻印出来るかなあ・・・」

「刻印？」

「うーん大丈夫だとは、思うけどねえ・・・珍しいオーダーするね」

「えへ」私は照れ笑いを浮かべた。

「店長と相談してみるけど・・・まあ何とか出来れば良いけどね」

私は、夫の為に密かに溜めていたへそくりを、この時とばかり使ってヴァイオリンを注文した。

「じゃ、また今度、ヴァイオリン出来たら連絡頂戴ね、クスクス・・・」

「有り難うございました、村上様の奥様、ハハハハ・・・」私達はその場で、大笑いしてしまった。

「ねえ、ママ何がおかしいの？」誠慈のきよとんとした顔を見て彩子と二人また、クスクス笑った。

店舗の出口まで、見送りで彩子が一緒に階段を下りてきた。その時、階段室の壁に貼られている、コンサートのポスターに何気なく目が留まった。

——親子に伝えたい音楽とハーモニーの世界、神山泰徳ピアノリサイタル

——講演とピアノ演奏 神山泰徳 （お子様の視聴可能年齢は小学生以上です）

「ねえ、彩子、このポスターのリサイタル、ここと関係有るの？」

「あー、神山先生の」

「神山先生は内の会社の音楽顧問なの」

「そーう・・・テレビでは、見た事は有るけどリサイタルに行ったことは無いよ」

「先生は、このお店にも何度も来て下さっているの、私の顔は覚えて下さったわ」

「凄いね、彩子」

「でも、ピアニストが何でまた、ヴァイオリンのお店に？」

「美沙は、解らないかも知れないけど、倉野楽器は、ピアノ、木管、金管何でもやってるのよ、それぞれの専門家が音楽顧問になっていてね、一年に二度、大きなコンサートの招待イベントも企画してるのよ」

「そうなんだ」

私は、彩子の置かれている立場が羨ましかった。

私は、このリサイタルの題名が何となく気になった、ポスターを見つめていると、このリサイ

タルに親子で出なさいと、誰かが何処かで、叫んでいる様な気分になった。

「このリサイタル、チケット有るの？」私が聞いた。

「うん、まだ有ると思うよ、私は先生のリサイタル出来るだけ行ってるの、時々スタッフで呼ばれる事も有るし、今回も何か担当するかもね・・・」

「そうなんだ、いいなあー」

「じゃ行く？」彩子が言った。

「行ってみたいなあ、夫と誠ちゃんと私で三枚予約出来るかな？」

「まだ、大丈夫だよ、家族でたまには良いんじゃない・・・行こうよ」

と言う訳で、急遽リサイタルの予約チケットを購入する事に決めた。

今度は、絶対何が何でも夫をリサイタルに連れて行く事に決めた、例え会社で怒られても必ず休ませてと、硬く心に決めて。

その日の夜、夫に神山泰徳リサイタルの事を話し、夫も今度はどんな事情が有っても、親子してリサイタルに行く事を約束してくれた。

6

リサイタルの日は、一点の雲一つ無く抜けるような青空で、頬に爽やかな風が当たり実に気持ちの良い日だった。

誠慈は、私と夫の間にぶら下がるように手を繋ぎ、家族三人手に手をとって、リサイタル会場に赴いた。

会場は東京・上野に有る東京文化会館で、午後一時三十分会場、二時開演だった。

お昼過ぎ、上野駅公園口を下車して小さな横断歩道を渡ると、目の前にコンクリート造りの荘厳な建造物が見えてきた。

東京文化会館は、上野動物園や国立博物館が有る上野公園の玄関口に有る、首都東京の憩いの場所と同時に、文化が息づく美しく気品漂う場所に建っている。

広場を見渡すと、パントマイムの人がなにやら楽しそうな演劇をしていて、若者やカップルがニコニコと笑いながらその劇を見つめている。

「ママ、鳩」誠慈の処に鳩が近づいてきた。

あまり人を怖がらない鳩、誠慈の手に有るお菓子が目当てなのかも。

二羽、四羽、七羽 あっという間に誠慈の近くに鳩が寄って来た。

「うわー、ママ 鳩が凄いよ」

「本当ね、怖がらないわね」

「誠ちゃん、お菓子あげたら駄目よ」

「だめなの？」

「駄目よ」

穏やかな日差しの中、私達は上野の森の神聖な雰囲気酔いに酔っていた。
鳩のウンチだけは、別だったけど。

いよいよ、会場に入る事にした。

すでに会場受付付近には、沢山の親子ずれが開演を楽しみに待っていた。

会場には色々な衣装の親子が笑みを浮かべて立っていた。

華やかなピンクのドレスを装う母と娘、その先には蝶ネクタイを決めている小学生の男の子、みんなピアノを練習しているのだろうと、感心して見ている。

その日彩子は一足早く会場に駆けつけていた。彩子は大きな花束を抱え、繊細な刺繍を施した薄いパープル色のドレスを身につけ、耳には、ダイヤモンドのイヤリング、胸元にはコサージュを付けていて、結婚式の新婦の様に、とても美しかった。

「彩子、今日のドレス素敵じゃない、新婦みたいでかなりグーだよ」

「お褒めにあずかり光栄です、いやね数日前、倉田楽器の専務に、お店の代表で、神山先生に花束を渡すようにって言われちゃって、急遽、こんなスタイルにしたんだ」

彩子は照れ笑いを浮かべた。

「そう、凄いじゃない・・・」私は、彩子が羨ましかった。

そんな彩子と比べたら私達家族のスタイルと来たら、やたら所帯じみていた。

夫は紺系の背広姿、私は、花柄の落ち着いたワンピース姿で、彩子と同年代とは思えない程、大違いだった。

「あ、村上先輩、ご無沙汰してました」

美しい装いの彩子が、夫に数年ぶりで会い、挨拶をしてきた。

夫は、彩子を見るなり、照れくさそうにピョコンと頭を下げ、小声で「どうも、ご無沙汰」と一言だけ言った。

生真面目な夫は、こんな時、すらすらと話をするタイプでも無いので、何を言ったら良いのか解らない感じだった。あまりに美しくなった彩子に驚いたのかも知れないが。

最も夫は、大学時代第一ヴァイオリン、彩子は第二ヴァイオリンを担当していたので、彩子の事は勿論よく知っているが、彩子が綺麗すぎて近寄りがたい存在だったようで、大学時代でもあまり話をしなかった。

四人で会場の中に入ってみると、倉田楽器の計らいで、招待席の直ぐ後ろの席に座る事になった。

「彩子、何かから何まで有り難う」

「とんでも無いよ、こちらこそ・・・ねえ、ご主人ちよつと貫禄出て来たね」彩子は、微笑みながら小声で私に話をしてきた。

確かに大学時代のひよろひよろした細身の主人は、体重が十キロも増えていた。

「早乙女さん、美沙と誠慈に色々気を遣ってくれて、済みません」夫は漸く次の言葉を見つけたのだろうか、突然彩子に話しかけ、彩子もニッコリと微笑んだ。

「誠ちゃん、今日はお利口さんにして、大きな声出したら駄目よ」

私は、誠慈に最低限の音楽会マナーを教えた。

「うん、僕、静かにしてるから」

「そうだよ誠慈、神山先生ってえらいお爺ちゃんが、これからお話とピアノ弾くからね、良く聴いておくんだよ、お父さん、楽しみなんだ、だからシーだよ」

夫も小鼻に人差し指を立て、誠慈に小声で話をした。

隣に座った誠慈にとっても本物のピアニストを見るのは初めての事だけに、誠慈がどんな反応を示すのか、心配と期待が交差して、私はちよっぴりドキドキしていた。

「ねえ、美沙、この演奏会終わったら、私、神山先生にご挨拶するんだけど、良かったら一緒に楽屋に行かない？」

「ほんと、嬉しーい！ 是非、是非ご一緒させて、感謝、感謝」

私は、手ばたきして喜んだ。

思わぬ事になったものだが、この事が、後の我家にとって大きな意味が有った事など、その時は知るよしも無かった。

いよいよ、神山泰徳先生のリサイタルが始った。

割れんばかりの拍手が会場に響き渡り、燕尾服姿の神山泰徳先生がステージに登場してきた。一瞬オーラの様な輝きが先生から差し、神々しく見えた。

先生は、この時七十五歳を過ぎていた。東京音楽学校（後の東京芸術大学）の出身で、ヨーロッパに音楽留学をして、音楽家の道を志し昭和を代表するピアニストとなった、その風貌は白髪混じりで清潔感漂う紳士という雰囲気を持っておられる。

私は今まで、テレビでは何度か見たことがあったが、本人を生で見ることは初めてだったので、その姿に驚きを隠せなかった。七十五歳を過ぎても矍鑠として背筋もピンとして、とても高齢とは感じない様子だったから。

「皆さんこんにちは、神山泰徳です。今日は、とっても感激しております、何時もなら大人ばかりが座る席に沢山の親子の皆さんが来て下さっているからです・・・」

神山先生は、マイクを手に持ち、会場の親子に優しく語り始めた。

「さて、今日のリサイタルは、いつものリサイタルとちよっと違います、今日は、親子で是非聴いて欲しくて、こんな企画をしました。長年私が感じていた日本と西洋の音感覚の違い、ハーモニの素晴らしさを、親子で知って頂くのが今日のリサイタルの目的です、最後まで聴いて下されば、何かお解り頂けると思います、それでは宜しくお願いします」

受付で受け取ったりサイタルのプログラムには、神山泰徳先生のプロフィール、そしてこのリサイタルを開くにあたっての、音楽人生観と子供の音楽教育に対する考え方が挨拶文として記載されていた。

目次は第一部と第二部に別れていて、第一部は日本音階と西欧音階の違いと幼児期に聴かせたい音楽について、第二部はハーモニーの重要性についてがテーマになっていた。

その第一部が始まった。

私達四人は、神山先生が何を話されるのか興味津々だった。

「幼児に聴かせたい子守歌は沢山ありますが、私はその中でもね、ヨーロッパの子守歌がとても健康的で、明るいので良いと思うんです」

「じゃ、どんな子守歌があるか・・・弾いてみましょうね」

先生が、ピアノを弾き始め、シューベルトの子守歌(Wiegenlied)とブラームスの子守歌（ゆりかごの歌）を続けて演奏された。

私達は、会場のほぼ中央の良い客席に座っていたので、神山先生の一挙手一投足が良く見えていた。

先生の指はシワが寄り細長い、お年を召しているので普通なら演奏に不安を覚えるところだが、先生の指の動きは年齢的な衰えなど微塵にも感じられなかった。

実に素晴らしい演奏の一語に尽きた。子守歌を弾き始めた時は、思わず誠慈が眠って仕舞わないかと思うほど、優しい音色が会場に響いていた。

「ねえ、明るくて健康的な子守歌でしょう」

「ところが、日本の子守歌は、どうかと言うと・・・」

そう話されると、日本の子守歌の演奏が始まった。

♪ねんねんころりよ、おころりよ——

♪あの山超えて、里超えて、里のおみやげ何やろか——

日本の子守歌を立て続けに数曲演奏したのだが、今度は、シューベルトやブラームスの子守歌と違い、暗く寂しい演奏に聞こえた。

「日本の子守歌は、何かもの悲しくて、暗いでしょう、何故なのか、それには理由があるんです、難しい用語ですが、ペンタトニックスケールと言って五音音階で出来ているからなんです」

日本の古来からのメロディーが、五音音階で出来ているとは、一オクターヴに五つの音が含ま

れる音階のことで、日本の演歌・民謡にみられるヨナ抜き音階も五音音階の一つになる。

基本的に、五音音階という考え方は西洋音楽の♪ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドの七音音階と対比させたもので、五音音階は、ヨナ抜き音階（四七抜き音階）とも表記され、洋楽の長調、邦楽の陽旋法に当たる音階の楽曲で、主音から四つ目のファと、七つ目のシがない曲で、陽旋法では、レが主音で、♪レ・ミ・ソ・ラ・ド・レとなる。

この五音音階、西洋の人々が聴くと悲しい旋律になると、先生は話された。

そのメロディーが好きな言葉は、あきらめ、絶望、涙なのだ

「だから、日本の子守歌はもの悲しい、だからね、こんな音階を幼児期に聴かせてはならないんです」

「悲しい人間になって頂戴というような、子守歌なんですね」

先生は、どうして日本の子守歌は暗くて悲しいのだろうか、考えてみたそうだ、日本の子守歌が出来たのは、江戸時代とかずっとずっと昔の事で、貧しい農村や漁村に暮らす、まだ十歳位の女の子が江戸の豪商などに奉公に出され、奉公先の赤子をおぶって、故郷の事を思い出しながら、子守歌を歌ったかも知れない、そこには、故郷を思って悲しみながら奉公する姿と、五音音階の哀愁が混ざり合ったのだろうと先生は話された。

日本のみならずアジアの音楽は、この五音音階が多い、昔から日本人が好む音階がこの音階だった。

五音音階は、日本人らしい叙情性や、しとやかな心の世界が旋律に込められている面も有るし、雅楽や童謡などの音楽は、日本人ならではの情緒がそれらの音階に込められている、しかし一方で、悲しみと涙の旋律が何時も付きまどってきた。

私は、日本の子守歌が、理論的に寂しく悲しい事を先生の話で納得がいった。

その後先生は、ある家族のお話を始めた。

「その家族には、三人のお子様居られるのですが、ある時、お母様が私に質問をしてきたんですね」

——私は長男を育てる時、日本の子守歌を毎日聴かせていたのだけど、理由は分からないけれども、何だかとても悲しい気持ちになり、気持ちが沈むので、一年半して、日本の子守歌を聴かせるのを辞めました、どうして日本の子守歌は、もの悲しいのでしょうか？——そんな質問をされた奥様は、五音音階の話聞いて納得したそうだ。

その長男は、一年半してからは、主にモーツァルトの子守歌に変えたそうで

「もっと早く、モーツァルトに切り替えてれば良かったですね・・・と言ったことを覚えてます、モーツァルトの子守歌皆さん知ってるでしょう・・・こんな曲ですよ」

と言われてモーツァルトの子守歌の出だし数小節を演奏された。

「ねんねんころりよからね、モーツアルトの子守歌では随分違いがあるでしょう」

その奥様は、次男には、ブラームスの子守歌を聴かせ、三番目のお嬢ちゃんには、シューベルトの子守歌を聴かせた様で、三人の子供にそれぞれ違うメロディーを聴かせて育てたという。

その音楽が影響したのか？、長男は一面寂しい性格が有り、次男は、彼が来ると廻りがパット明るくなり、みんなが和むユーモラスな性格の持ち主で、三番目の長女は、おっとりした性格が有るという。不思議に幼少時期に聴かせた音楽の雰囲気が、それぞれのお子さんに備わっていると先生は語った。

考えてみたら、大人でも音楽を聴いていると、明るい気持ちや、暗い気持ち、悲しい気持ちになるのだから、幼児期に、寂しい日本の子守歌を毎日聴かせ続けたら、寂しさが心の何処かに蓄積されるのだとふと感じた。

続いて西洋の音楽で、子供達に聴かせたい童謡の話に移った。

神山先生は、最初にドイツ民謡、カッコウを弾き始めた。

♪カッコ、カッコ・・・るるる・・・聞こえる・・・森の中・・・

「ねえ、健康的で明るいでしょう」

それから先生は、メリーさんの羊、静かな湖畔、おお牧場は緑を演奏しながら、ヨーロッパの健康的で明るいメロディーの曲を幼少期に聴かせる事が大切だとおっしゃった。

「童謡の数では日本が世界一ですね、ただ、五音音階で出来た童謡が多いので、やはり寂しい音楽なんですね、まあ日本人だから、しかたがないけど、健康的で明るい西洋の童謡をもっと聴かせたいですね・・・」

第一部の最後は、有名なピアノ曲を数曲披露された。

ベートーベン・バガテル、エリーゼのために

ショパン・ピアノ独奏曲 第六番、小犬のワルツ 変ニ長調

モーツアルト・ピアノソナタ、第十一番イ長調、トルコ行進曲

「会場のお子さん達、どうですか？ 楽しくて明るい曲でしょう」

「はい」子供達の元気な声が、あっちこっちから聞こえた。

だが音楽マナーを聴かされていた誠慈は、じっと口をつむり座っていた。

私は（こんな時は返事しても良いのよ誠ちゃん）と心で呟いていた。

「お母さん達も、何も西洋の難しいクラシック音楽を、お子様に聴かせる事は無いんです。お子さんが理解できる範囲で良いから、明るくてリズムが良くて、楽しい音楽を聴かせてやって下

さい。そんな音楽を聴いて育った子供は、必ず良い子になりますよ」

「学校でもクラシック音楽を聴いて、嫌になってしまう学生が居ますが、それは聴かせ方に問題が有ると思いますよ、難解な音楽を聴かせる事は無いんです、その子が楽しいと思う音楽を聴かせてやって下さい」

先生が、ピアノの椅子から立ち上がり、聴衆の前に深々とお辞儀をして、ステージ袖に向かって歩き出した。

会場は、拍手が鳴り止まなかった。

第一部が、終了した。

——休憩

休憩時間、誠慈と夫は手を繋ぎ、トイレに向かったが、その姿は、とても楽しそうな親子風景だった。先生のお話は小学一年生には少し難しいだろうから、誠慈が嫌がるかと思いきや、その反対だった。

誠慈は、ニコニコ顔で「僕、ピアノちゃんと弾いてみたいな」と言った。

「良いよ、ピアノ習っても」と、夫は誠慈に微笑みを浮かべて返事した。

幼稚園の時から勿論ピアノは家に有るし、何時でもさわれたが、誠慈が本当にピアノが弾きたくなるまでは、強制しない事にしていたから、幼いながらも本人の意志で初めてピアノを弾きたいと言った事が嬉しくて、私は心の中で「よし・・・」と叫んでいた。

誠慈には、先生の伝えたい本質的な事や理論は意味不明だったろうけど、音楽の楽しさは、その直感で理解出来たのだろう。

そして第二部が始まろうとしていた。

再び会場は、拍手の音で埋め尽くされた。

「音楽は、色々なものが一緒に集まって構成されてます。まず、メロディー、皆さんが声を出してお歌になるのが、メロディーですね。それから、リズムがありますね。そしてそれらを支えているハーモニーがあります。その中でも最も重要なのが、ハーモニーだと私は考えております」

「ハーモニーとは、音の和の事ですね、例えば、ドレミと言う音をいっぺんに弾くと音が重なり美しくなる、この和の音がハーモニーなんです、実に人が感動する音はハーモニーなんです」

先生は、ハーモニーの音感覚が解らないと、音楽の素晴らしさが解らないとおっしゃった。ハーモニーこそ、西洋音楽の中心で最も重要な要素なのだ。

「じゃね、ハーモニーがどんな威力を発揮するか、ご説明しましょう」

先生が、ドイツ民謡の蝶々の曲を、メロディーだけで弾いてみた。

♪ソミミ、ファレレ、ドレミファソソソ（ちょうちょ、ちょうちょ、葉の葉にとまれ）

「このメロディーだけで、感動はしませんね、大きく鳴らしたとて、煩いだけです」

先生は、蝶々の曲を、大きく鳴らした。

♪ソミミ！、ファレレ！、ドレミファソソソ！！！！

「ね、煩いだけでしょ・・・お子さん達どうですか？」

「うるさ～い・・・」

「何かへん・・・」会場の子供があっちこっちから返事した。

ハハハ、会場の親子の笑い声が聞こえた。

「ところが、これに、ドレミの単純な音をハーモニーとして繰るんでみると」

今度は、ドレミの単純な和音をメロディーに付け加えて演奏し始めると、音楽に厚みが加わったことが、はっきりと理解出来た。

「今度は、どうですか？」また先生が質問した。

「きれい・・・」また会場の子供が返事した。

ヨーロッパの大作曲家達は、このハーモニーを理論的に理解して作曲をした。

人に感動を伝える音楽には、ハッキリした理論があり、その重要な要素が、ハーモニーであると、先生は力説した。

欧米人は、理屈やで、理論的な思考をする、それに比べ、日本人は、理論よりも情緒に傾き安い民族、その理由に音感覚の違い、つまり五音音階と七音音階の違い、そしてハーモニーという理論を音楽に加えるか否か、ハッキリその音感覚が違うという。

日本人は、カラオケが好きだが、そのカラオケの音楽はメロディーを楽しむ音楽だけど、欧米人の楽しむ音楽は、アルト、テノール、バス、ソプラノの四声の合唱曲を好むのも、この音感覚の違いだと先生は話された。

ヨーロッパの酒場で、誰かが歌い出すと、必ず誰かが必ずハモる、ハーモニーが自然に出来ている、ところが日本の酒場では、たった独りでメロディーを口ずさむ、そんなにも音感覚が違うのだとおっしゃった。

幼いことから、ヨナ抜き音階で育つ日本人と、ハーモニーで育った欧米人の思考作用が大きく違うのは歴然とした事実で有ることを先生のお話で実感した。

「それでは、今度はハーモニーがどんな素晴らしい威力を發揮するか、大作曲家のまねをしてみようと思います、もし大作曲家が蝶々の曲を作曲したらどうなったろうか、勿論これは私の想像ですが、とにかく弾いてみましょう・・・」

「最初はバッハ、バッハは簡単に言えば、音の追っかけごっこをしたんですね、バッハが蝶々を演奏したら・・・」

音の追っかけごっことは、同じメロディーを数小節ずらして弾き始めたり、同じメロディーを早

いテンポと遅いテンポで同時に演奏し音が追いかける様に聞こえる。

先生はバッハのそんな特長を入れて蝶々を演奏したが、本当に蝶々がバッハの作曲したフーガでも聞いているように聞こえたから不思議だった。

つづいてモーツァルト「モーツァルトは音階を操る天才です」

音階を操ると説明された様に、ピアノは軽快なリズムとモーツァルトらしい華やかな旋律のハーモニーで蝶々の音楽が軽やかな曲へと変化した、本当にモーツァルトが演奏している様だった。さすが何十年もこの道で演奏してこられた先生、作曲家の癖を実に良く表現出来るものだと関心していた。

「さて続いてはベートーベン、彼の音楽は厳格で重々しい、曲がったことが大嫌いな人物ですね」先生はまるで交響曲第五番・運命を演奏するように蝶々を演奏した。

私は、思わず微笑んでしまった、ほんとベートーベンだ・・・あの厳格な蝶々など何処でも聞くことは出来ないだろうな——ダン・ダン・ダン・ダンダンダン・・・

ベートーベンのハーモニーは本当に厳格そのものなのだ。

続いてショパン「ショパンは女性的で情緒が甘いです」先生はショパンの演奏を得意とされていたので、さすがにショパン風蝶々は、甘く切ないハーモニーに変わり、ピアノの音が澄みきった湖でも見ているような演奏になった。

私が聞いていて一番好きになった蝶々だった。

最後は、リスト「リストはピアノの神様ですね、演奏技術は実に絢爛豪華で、高度なテクニクを要求します、リストならどんな蝶々になるでしょうね・・・」

リスト風蝶々、本当に絢爛豪華というか、音階の隅々を利用して、弾きこなすハーモニー、先生の指は激しく動き回り凄まじい迫力の蝶々になった。

先生は作曲家の性格や音階、ハーモニーの使い方を実に的確に表現していて、まるで本当にそれぞれの作曲家達が創作した蝶々に聞こえていた。

「凄い！」

こんな蝶々の曲聞いたことが無かった、ハーモニーの違いで同じ曲がこんなにも変化するとは実に感激ものだった。

大拍手が館内に響き渡った。

私は、とても驚き、そして身震いする感動を身体中で感じていた。

会場の全員が、ハーモニーの素晴らしさを実感した瞬間だった。

リサイタルを締めくくる曲は、リスト・愛の夢 第三番変イ長調だった。

先生の奏でるピアノの調べは、何処までも美しく、何処までも清らかだった。

魂のこもった奥深い演奏に私は心酔していた。

ピアノ演奏が終了して、最後のご挨拶があった。

「大自然は沢山の音が素晴らしく調和してるんですね、海の音、川の音、まさに自然はハーモニーです、神秘の音で埋め尽くされている、大作曲家達は、その神秘の世界を旅して、素晴らしい曲を書き上げて行ったのですね、だから私は、音楽は神様が下さった贈りものと思っております、その音楽を心より愛して下さい、人間が一番幸せを感じる世界が、音楽を愛する世界ですから」

また、会場は割れんばかりの拍手が響いていた。

神山先生のお話と演奏が全て終了した。

最後に、彩子が壇上に上がり、神山先生に花束を手渡した。

「見てみて、お姉ちゃんだよ」誠慈が彩子を指さして、嬉しそうに言った。

「見てるよ」夫が誠慈に返事した。

「やっぱり美人は特だね・・・」私が羨ましく言った。

コンサートホールは、拍手が鳴り止まず、客席の親子が独り立ち二人立ち、あつという間に、沢山の親子ずれが立ち上がって、スタンディング-オベーションが続いた。

私と夫も立ち上がり、手が痛くなるほど力強く拍手をした。

誠慈も立ち上がりニコニコ笑い、可愛い手を大きく振りながら、拍手をしていた。

小学一年、初めて聞いたピアノリサイタルだったが、こんな子供さえも感動させる事を見て、私も無性に感激していた。

リサイタルが終了してから、私達は楽屋に案内された。

「ねえ、彩子、先生お疲れでしょう、尋ねて大丈夫なの」

「いつも、尋ねているから大丈夫」

「しかし先生の演奏はBerryExciting、私、とって～も感動しちゃった、すごいわ」

私は、身震いしながら、彩子にそんな事を言った。

先生の控え室に着いた。

トントン・トトト・トンと彩子がドアをノックすると、中から先生の声が聞こえた。

「どうぞ、早乙女君だろう、お入り下さい」

私は、ドア越しで先生が彩子と判断した事に驚いた。

「えっ、何で解るの？」

私は目を見開き、彩子を見ながら小声で呟いた。

何故、彩子だと先生は解ったのだろうか、後で聴いてみると、過去に何度もドアを叩く音を聞いた先生は、彩子のドアの叩き方のリズムを覚えて、その音で彩子と判断していた様だ、そしてその事は彩子だけに限らないらしい、音に敏感な先生だどつくづく実感し舌を巻いた。

「失礼します」彩子と私達家族三人も、控え室に入った。

「先生、お疲れ様でした」彩子が、満面笑みを浮かべ先生にご挨拶をした。

「いつも有り難う、早乙女君、綺麗な花束まで頂いて」

「先生、素晴らしかったですね・・・」

彩子は、最大限の賛美の言葉をならべ先生と話をしていた。

「あの先生、こちらは私の友人で、村上さんご家族なんです」

彩子に紹介された私達は、先生にご挨拶をした。

初対面の私は、かなり緊張して声は裏返り、話が辿々しくなった。

「は、は、初めまして、村上です、あのおーこっちは、夫の慎一で、その子が、えっとお・・・息子の誠慈と言います」私の額から汗が噴き出していた。

「あ、あの、私は美沙と申し上げます」

頭に血が上り敬語も何も有ったものじゃなかった。

彩子は、横でクスクス笑っていた、（笑っている場合じゃないよ彩子助けてよ）と心で呟いていた。

「先生、今日のお話と演奏、とっても素晴らしかったです、私の廻りの親子全員感激してました」彩子がまた先生を賛美していた。

「ありがとう」先生が一言だけ呟いた。

あれだけの演奏をこなした先生は、目元にくまが出来ていて、会場での凛々しいお姿と違い、かなりお疲れの表情に見えた。

「僕は、幾つかな？」

先生が誠慈の頭に手を翳し話された。

誠慈は驚いた顔つきで、目をキョロキョロさせて言った。

「六歳、小学校の一年です」

「そうか、一年生か」先生はニッコリして誠慈を見つめていた。

「僕は、何か楽器を弾いているの？」

「ううん」誠慈が首を横に振り応えた。

その時、彩子が私達家族の説明を始めた。大学が一緒だった事、夫が先輩だった事、夫がヴァイオリンを弾き、私がピアノを弾く事、誠慈の誕生日には、愛の挨拶を演奏する事など、彩子が全部先生に私達の事を伝えた。

「そうですか、愛の挨拶を子供の為に演奏する夫婦、いや実に素晴らしいじゃないですか」私達は、かなり照れくさかった。

「お恥ずかしい限りの演奏です」夫が言った。

「いや、上手下手ではなくて、音に愛情を込めるか否かが問題ですよ、子供には自然とその心が解る様になるからね」

「誠慈君って言ったね、僕は、音楽好きかな？」

「うん、大好き、こんどピアノちゃんと弾いてみたい」誠慈が先生に言った。

「今日の先生の音楽を聴いて、この子はピアノを習いたいと言ったんです」私は感激した声で先生に伝えていた。

私は、誠慈にピアノのレッスンを受けさせたい事を先生に話をしてみると、先生も親子でピアノが弾ける様になる事は素晴らしいと、お褒めて頂いた。

「そう、今日のリサイタルを開いた甲斐が有ったというものだね、嬉しいなあ」

「僕、ピアノ習いたいか・・・」先生が誠慈に尋ねた。

「は〜い」誠慈は元気な声を上げた。

控え室にもアップライトピアノが置いて有ったが、先生は急に立ち上がり、そのピアノに座ると、音を鳴らし始めた。

「僕、ちょっとこちらに着てごらん」

そう言って先生は、ピアノの白鍵のC（ド）をならした。

「僕ね、私が鳴らす音を、あーでも、いー、でも良いから同じ音程で言ってご覧なさい」

♪C（ド）・・・先生がピアノを鳴らす。

「あー」同じ音程で誠慈は声をあげた。

♪D（レ）・・・「あー」「そうそう、良い感じだ」

♪E（ミ）・・・「あー」

「そう、その調子で、ドレミファソラシドと唄ってご覧なさい」

誠慈は、音程を外すことなく、ドレミファソラシドの音階を歌った。

先生には、何も伝えてはいないけど、幼い時から音楽が側に有った誠慈には、ドレミを歌うのは簡単な事だった。

「そう、そう、誠慈君とっても良いよ」

先生は、その後も色々誠慈と音のやりとりをしていた。

先生は、ピアノの音程に合わせて、簡単な歌を歌わせていた、そして、音程の取り方が出来る子供だとピアノは直ぐに上手になるとおっしゃった。

先生がピアノから立ち上がると、今度は誠慈をピアノの椅子に座らせた。

「誠慈君、ちょっとピアノに手を置いてご覧なさい」

先生が、優しく誠慈の手をとり、ゆっくりと指を鍵盤の上に置かせた。

「そうだ、そんな感じで、白鍵に指を置いて・・・」

「誠慈君、お母さんから教えてもらった曲、何か弾けるかな」

「うん、むすんでひらいて」

「じゃ、それ弾いてご覧なさい」

誠慈は、むすんでひらいてだけは、楽譜無く弾けたので、それを演奏した。

先生は何か感じたのか、「うん」と頷くように言った。

「この子は、とても音感覚の良い子ですね、ピアノ教えればきっと上手になる」

先生はお世辞じゃなく、誠慈を褒めて下さった。

昔、テレビの番組で、ピアノを弾けない子供を半年間で上手に弾ける様にする企画が有ったそうで、その時三百人もの子供が応募したそうだ、その際、たった六人の子供を選んだとおっしゃった、その選ぶ方法が、今先生がやった手法だったそうで、音程が良く解る音感覚の有る子供で、ピアノに手が上手に置ける子供を選んだそうである、ピアノが上手な子供の手は先生が見ると解るそうで、誠慈がどうなのか心配だったけど、先生は、誠慈がその音感覚を持っていて手も形が良いと、褒めて下さった。

思わぬ展開になってきて、私の心は弾んでいた。

私は、誠慈に有る程度ピアノを教える事は可能だったけど、将来プロのピアニストを目指すならば、個人レッスンを最初から受けさせた方が良いと思っていた。

五歳になってから、ちょっとだけピアノを弾かせてはいたけど本格的には教えてはいなかった。

まさか、先生にレッスンをお願いするほど、私は神経が凶太くはないけど「先生のお薦めのレッスン教室、ご紹介頂けないでしょうか」と凶々しいとは思いつつ、思いきって話してみた。

「そうね、ピアノの教室ね・・・お母さん、お家は何処ですか？」

「はい、荻窪です」

先生が、嬉しそうに「それは不思議な縁だ・・・」と言った、それには理由が有った。

先生の教え子で、中村優子と言うピアニストが、隣町の中野に住んでいるそうで、ピアノ教室を運営しているとの事だった。JR中央線に乗れば直ぐお隣町になる。

「ご両親が良ければ、中村君をご紹介します」

「先生、是非、お願い申し上げます」夫と二人、頭を下げたお願いした。

「彼女は私の教え子の中でも、実に優秀だから彼女なら良いレッスンが出来るだろう、テクニックは勿論だが、彼女の音楽知識は抜群だからね」

「誠ちゃん、良かったね」

誠慈を立派なピアニストにしてみたい、その為には素晴らしい先生に教えてもらう事が大事だし、その為に少々お金が掛かったとしてもかまわないと、思っていた。

彩子に再会して、神山先生に出会い、そして、誠慈がピアノレッスンを受ける様になるなど随分出来すぎた話で不思議だった。

まるで、決められたレールを走り出すように、誠慈の将来に新たな行く道が開かれていった。その日、神山先生と私達四人、そして、リサイタルのマネジメントをした関係者三人で、夕食を共にする事となった。

初対面にも関わらず、神山先生は気さくに何でも話しかけて下さり、夕ご飯は大いに盛り上がっていた、たった独り子供の誠慈は、大人に混じり大変だっただろうけど、神山先生が終始、誠慈の事を気に掛けて下さり、誠慈は先生がすっかり好きになった様だ。

「それでは、先生有り難うございました」

「また、お会いしましょう、中村さんに電話しておきますね、誠慈君、ピアノ頑張って習うん

だよ」

「は〜い」

先生は、ニッコリして誠慈の頭を撫でた。

第二章 ピアニストの夢

1

あれから私は、神山先生のピアノ曲集のCDを三枚まとめ買いして、家で毎日ピアノ演奏を聴いていた、ショパンやリストの曲目はピアニストだから多いけど、神山先生のCDには、必ずベートーベンのピアノソナタが有る、リサイタルでもベートーベンを弾いておられた、きっと先生はベートーベンを敬愛されているのだと感じていた。

それからCDジャケットの中にある神山先生のプロフィールを見て思わずビックリしてしまった、何と神山先生の誕生日は、誠慈と同じ七月七日だった。

「うあー、先生と誠慈の誕生日、同じだ！」と家中に聞こえる大声で叫んでいた。

とは言え、七十年も違う事に、時代の流れも感じて、またまたビックリしていた。

家の中に神山先生の演奏する、ベートーベンのピアノソナタ第十四番嬰ハ短調、幻想曲風（月光）が流れていた。

視覚でしか感じる事の出来ない月の光が、聴覚で伝わってくるその調べの芸術とは、何と美しいものだろうか・・・その美しさを指の一つ一つで伝える神山先生の高度な演奏に感激し、うっとりとして聞き入っていた。

あのリサイタルから一週間経った日曜日、神山先生に紹介された東京中野にある中村音楽教室に、誠慈と二人で行くことにした。

訪問する前に、中村音楽教室について私なりに色々調べてみたのだけど、中村優子先生は、音大の出身で、若い自分はピアニストとしてリサイタルやコンサートを行っていたが、四十代になり、後輩の指導と、音大の非常勤講師として、ピアノだけではなくクラシック音楽全般の講義を行うようになった様だ、十年前頃に中村音楽教室を創設して、若いピアニストの育成に取り組んでいる様だった。

中村音楽教室が有る東京中野は隣町で、中野サンプラザが有り夫とコンサートに出かけたり、家族で時々ショッピングや遊びに行った場所だったけど、中村音楽教室の事は勉強不足で知らなかった。隣町にこんな凄い先生が居られたなんて、ピアノを愛する私として不覚だった。教室は、JR中野駅を下車し歩いて十五分くらいの閑静な住宅街に有った。

「ここだ、中村音楽教室・・・」

かなり大きな敷地で、煉瓦造りの塀がぐるっと回っている、その煉瓦塀の内側は、綺麗な草花が見事に順序よく列んで咲いていた、鮮やかな紅色のアマリリスが処狭しと咲き、数え切れない程の赤や黄色のバラの花が咲いていて、その美しさに目を奪われていた、音楽教室と言うより、まるで花で囲まれた美術館みたい。

その花園の先にスタジオと思える二階建てで煉瓦造りのハウスが見え、その裏に母屋が別に建っていた。

そのハウスまでの道は、くねくねと曲がりながら煉瓦が並べて埋めてあり、純白で可愛らしくお辞儀しているスズランが煉瓦沿いに植えてあった、その煉瓦の上を誠慈と手をとって歩き始めると可愛いショルティ犬が、尾っぽを振って近づいてきた。

「ママ、犬だ」

「あっ、可愛いね、わんちゃんお名前何て言うの?・・・」

応える筈もない犬に聞いていた。

その犬は、誠慈の廻りでぴよんぴよん飛びはね、誠慈の顔をペロペロなめ始めた。

随分賢そうな犬だ、ワンとも吠えないで。

玄関のチャイムを鳴らした。

ピンポン・・・

「こんにちは、ようこそ」ドアが開き、中から微笑みを浮かべ、優しくそうな笑顔で対応してくれた女性が、中村優子先生だった。

「お待ちしておりました」ニッコリ微笑む先生の笑顔はとても素敵だった。

「どうも、初めまして、村上でございます」

「こんにちは、僕、誠慈です」誠慈も頭をピヨコンと下げてご挨拶した。

「先生、わんちゃん名前は？」誠慈が、突然聞いた。

先生は、またニッコリ微笑み「マリーよ」と言った。

「マリー、良い名前・・・」誠慈が言った。

マリーは誠慈が気に入ったらしく、誠慈の足下に寄り添うように、シッポをパタパタしながら立っていた。

「さ、どうぞこちらへ」

教室の玄関に入ると、直ぐに待合室になっていて、そこに備えてあるテーブルにも、胡蝶蘭が三つ飾られ、壁面には、かなり大きくてロマン派調の絵画が飾られていた。

待合室から先のドアを開けると、二階建てに見えていた建物は、ほぼ全体が吹き抜けの部屋で、煉瓦と木材で造られていて、天井までは、五～六メートルくらいは有る、ミニホールになっていた。

「素敵な教室ですね・・・」ため息混じりに言った。

スリッパに履き替えて、中に通されると、そのホールの中央にグランドピアノ二台が並び、壁際にオーディオとエレクトーンが備えてあり、その隣には手作りの本棚が有って、その本棚の中は、数え切れないほどの楽譜と音楽の参考書やピアノの辞書が有り、まるで図書館の音楽コーナーの様だった。

（何処のピアノだろう）と思い横目でピアノをチラッと見た。

— Bösendorfer

「凄い、ベーゼンドルファーだ」私は思わず呟いてしまった。

世界三大ピアノの一つに数えられる。

ピアノの神様と言われたフランツ・リストの激しい演奏に耐え抜いた事で知られていて歴史あるピアノブランドの中でも、ピアニスト憧れの名器なのだ。

とても高価なピアノで私の様なサラリーマン家庭では、ちょっと手が出ない代物。

私は、その光景に見とれていた。

ホールの奥には、三つの個人レッスン用の部屋が有って、すでに若い講師と生徒のレッスンが始まっていたが、防音がしっかりしているせいか、ピアノ音は微かに聞こえる程度だった。

演奏をするに羨ましい程の環境が準備されていて「この教室かなりお金かかっているな」などと独り言を呟いていた。

「神山先生から、お電話頂いておりました、お子さんは、一年生だそうですね」

「はい」

「神山先生が、お子さんの事、褒めておられましたよ、音感覚がとてもよい子なので、しっかりレッスンして下さいって、おっしゃられて・・・」

「エルガー、ご主人と弾いているんだとか？」

「えっ、神山先生から、それを・・・」私はビックリした声を上げた。

神山先生は、中村先生に私達の話の詳細に伝えていたようだ。

「あんなに熱心にご家族の事話される先生珍しいんですよ、きっと村上さんご家族に何か感じた事がお有りなんでしょうね」

「有り難いです」私は、恐縮してそう言った。

「それにしても素敵ですね、ピアノはベーゼンドルファーですし、ここでピアノ弾けるのが羨ましいです」

私は思わずため息混じりにそう言った。

私自身、こんな教室で習うことが出来ていたら、さぞ良かったろうと感じていた。

「お母さんも、どうぞ遠慮無く弾いて下さって」

「えっ、弾いても良いんですか」嬉しくて声を上げた。

一通りの挨拶が終わり、中村先生は、音楽教室の教育方針、それから個人レッスンのスケジュールとか、レッスン費用の事など、説明して下さった。

大学講師もされる程優秀な先生のレッスンだから、費用がかなり高額なのかと思いきや、それ程でもなくて、ヤマハ音楽教室の個人レッスン料と比較して若干は高いけど、驚くほどの料金では無くて内心ほっとした。

中村音楽教室には、私より若いピアノ講師が二人と事務員一人がいて、生徒は四歳の子供から社会人まで幅広く、誠慈が六十一番目の生徒だそうだ。

この教室からプロのピアニストが七人出て、コンサートなどで活躍しているそうだ。

生徒は、年齢によりレッスンの時間も回数も違うので生徒全員が会うことは、毎年一回秋に開催されるピアノ発表会と、夏休みの合同合宿くらいだそうで、あくまでも個人レッスンが中心で、高校生以上になるとグループレッスンという他の人の技術を聞いて自分を磨く練習方法も取り入れている様だった。小学生は、最初、若い先生からピアノの基礎を学び、年齢と共にレベルが上がると、中村先生の直接指導に移る事になっている。

中村先生は、音楽教室の代表、大学講師、中野区民の音楽指導、大学のピアノサークルの指導など、沢山の顔を持っていた。随分精力的に活動されるスーパーレディという感じを覚えた、ご主人は、クラシック音楽のプロデューサーで大規模なコンサートの企画を手がけていて、お子さんは男の子と女の子の二人いてどちらも音大在学中だとか、中村家は音楽一家の見本の様な家庭だった。

私が目指していた音楽一家の理想的な姿を感じて、羨ましかった。

肝心のレッスンだけど、誠慈は、毎週水曜日の夕方と、土曜日の午後、レッスンを受ける事となった、

「ご自宅で、お母様がピアノをお教えになることは構いませんので、毎日ピアノに触れる事は、

大切なレッスンですから」

私がピアノを弾く事を知り、先生の方からそんな言葉を掛けてきた、氣遣いをされる先生だと、その時感じていた。

「じゃ、誠慈君、これから宜しくね、今日から私が先生よ・・・」

「はい」誠慈が大きく返事をした。

「えっ先生、先生自ら、教えて下さるのですか？」

「特別に」

「えっ、良いんですか・・・」

「私が指導するから料金高くしようかしら」

「・・・」私は、驚いた顔つきになった。

「冗談ですけど・・・」先生が笑いながら言った。

「ハハハ」私も先生も笑った。

中村先生が何故、先生自ら指導すると言われたのか聞いてみると、神山先生から、誠慈のレッスンは、出来るだけ中村先生直々に指導して欲しいと話が有ったそうである。

普通は、若い先生が指導するが、誠慈は特別扱いを受けた、ホントのこと言って何で誠慈が特別扱いを受けるのかなんて、私には解らなかったけど、その後の誠慈のピアノ上達を見て、神山先生の千里眼とも言うべき、誠慈に対する音感覚の良さを、あの時すでに感じておられた様で、神山先生は伊達にお年を召しておられる方では無かったのだ。

こうして誠慈のピアニストの夢が始まった。

その夜、夫は仕事で夜中に帰宅して、誠慈はぐっすり寝てしまっていた。

ベットの中で、私は夫に今日の出来事一部始終を説明した。

「あの教室とっても環境が良くてね、私もあそこで仕事してみたくなっちゃった」

「おいおい、美沙まで、何言い出すんだ・・・」

「言ってみただけよ・・・でも、ホント素敵な教室なんだから」

「誠慈は素晴らしいピアニストになるわよ、絶対」

「だって神山先生、中村先生に誠慈を直々教える様に言ってくれてたから、誠慈は何か持っているよ、きっと」

「ピアニスト目指すのは良いが、けっして甘くは無いぞ」

「解ってるって」

私は、ピアニスト誠慈の誕生について夢中で夫に話をしていた。

このまま頑張っ、有名音大に入学、音大を優等生で卒業、国際ピアノコンクールで入賞、ソロのピアニストとしてデビュー――

私の心の中はそんな将来を描いて小舞っていた。

「親ばかって言われない様にほどほどにな、美沙・・・」

そう言いながら、夫も嬉しそうに微笑みながら、私の一方的な話を聞いていた。

その夜私は、夫の腕枕に抱かれてとても幸せな気分で眠りについた。

2

九月の末、倉野楽器に注文していた、ヴァイオリンが出来上がり、彩子が私の自宅まで届けに来てくれた。夫が三十三歳の誕生日を迎える、十日前だった。

彩子が応接間にヴァイオリンを運び、早速ケースを開けてみた。

オーダーメイドのヴァイオリンだけ有って、重厚感と光沢がとても素敵だった。

「うわー、綺麗なヴァイオリン、当たり前だけど、ピッカピッカだね、ねえねえ、あのサインどこ」

「文字は、ここよ」

彩子は、ヴァイオリンの側面を指さした。

側面分の上部に、金色の綺麗な英語文字が書かれていた。

Happy Birthday to Shinichi

「すてきねえ・・・」

「店長もビックリしてたわよ、ヴァイオリンに刻印するの？へーだって」

「でも、店長が一生懸命刻印していたのよ」

「そう、有りがたいわ」

「なんか、夫がビックリする姿想像すると、ワクワクしちゃう」

私は、本当に嬉しくて仕方なかった。

子供の様に嬉しさ滲ませた私の姿を見ていた彩子は、終始クスクス笑っていた。

「美沙が羨ましいな・・・」彩子が呟いた。

彩子は、過去の問題を今も引きずっていて美人なのに結婚相手はいなかった。

「ご主人は、本当に良い嫁様もらったよね、フフ」また彩子が羨ましい言い方をした。

「彩子、誰か良い人いないの？」

「私は、駄目、駄目」

男女の問題は、美人だから幸せになるなどの方程式は通用しないようだ、彩子を見ているとそう感じる。

女の私から見ても彩子程の美人は中々居ない、ただ美しい事がかえって彼女にマイナスな面を引き起こした事も事実だ、遊び半分で近寄って来た男達は独りや二人では無かった、彼女自身その

事で浮かれていた面も否定は出来ない、そのこと故に彼女自身にとって決して良くない出来事が有った。

生涯唯一夫しか愛したことのない私、何人かの男性遍歴を持つ彼女とは、随分異なる人生だとつくづく感じさせられる。

彩子と私は同年齢で、趣味や思考が似ている面が有る、好きな音楽家や文学も同じで何かと気が合う、但し事異性に対する考えはかなり違う、彩子は大学時代からモテモテだったから色々男性とお付き合いをした、だけど私は、夫だけをひたすら愛し続けて来た、だから他の男性は全く知らない。

私は、生涯独りの夫を愛し平凡でも良いから子供をもうけ家庭を持ち、愛有る家族を作り上げる事が人生で大切な事だと思っている。だけど、彩子は夫婦や家族に趣を置くことが嫌なのだろうか？理由は不明だけど、キャリアウーマンを通そうとする。

「美沙は、ご主人を真から愛してるんだなって感じるね」彩子が微笑んで言った。

「そう見える」

「見えるわよ」

私は、真面目に日頃感じていた事を話し始めた。

「変な風に聞こえるかも知れないけど、男ってこの地球に三十億人もいるのに、なんで、たった一人だけ愛してるんだらうって考えた事が有るんだけど・・・」

「確かに、世の中の半分、男だっていうのに・・・」彩子が返事した。

「それでね、これは勝手な解釈だけどね、私は、村上慎一に愛される為に生まれたのかなって、夫だって私の為に生まれた、神か仏か解らないけど、何か二人が結び合う縁が有るのよきっと、そうでも考えないと、夫婦になる事の神秘は理解出来ないもの」

「まるで、宇宙の真理でも発見した様な話だね」彩子は、笑っていた。

「美沙はそれだけ、幸せもんなのよ、そんな事考えるのは、でも世の中には、夫婦になっても幸せを掴めるとは限らないわよ、縁にも良い縁と悪い縁が有ると思うし」

「そりゃ、順風満帆の夫婦なんて居ないと思う喧嘩だってするし、でも縁が有って結婚してるのは、絶対意味が有るのよ」

「美沙のご主人は真面目だからそう思うのだろうね」

彩子は、昔妻子有る男性を愛してしまった事で、結婚に対するマイナス的感情を持っていた。だから、私の話は彩子にとってあまり聞きたくない言葉だったかもしれなかった。彩子は激しい恋愛と裏腹に悲しい結末を味わった。

彩子にとって人を愛する事は惨めな事のように感じていたのかも知れない。

「でもね新婚の時は良いけど、互いの悪い面見たり喧嘩したりするし、確かアメリカの女教授だったかなあ、人間の恋愛感情は三年で無くなるって研究、あとは妥協と忍耐だって、だから結婚して三四年すると離婚が急増するんだって」彩子が言った。

「それ言うなら尊敬と信頼じゃない、その教授悲観論者じゃないの」

「男の人って、結局自分の為なのよ、女性を愛する事って・・・」

「手厳しいね」

彩子の話を聞いて、虚しさが湧いていた。

「美沙は、幸せだからそう言うけど、結婚して死ぬまでお互い愛し合える夫婦って、そんなに居ないんじゃない」

「それに」

「それに何？」

「美沙はご承知の、ほら、私の父が浮気してお母さんと分かれたでしょう、身勝手よね、子供が居るのに父は別な女と出て行ってさ、結婚当時美男美女の理想のカップルだって、みんなうらやましがった程だって昔父は自慢してたのよ、其れなのに分かれるんだからさ、みんな身勝手よ、子供も居ない、結婚もして居ないならまだ許せるけど、父は・・・」

彩子の唇が震えていた。

大学時代、彩子の両親が離婚する事になり、彩子は精神的に大変で、私は彩子のやけ酒に付き合わされた事を思い出した。

「だからさ、美沙の言う様な理想の夫婦なんて・・・幻想よ・・・」

彩子にとり結婚は理想では無く、幻想に見える様だ、そう言いながらも彩子は何人もの人と交際をしてきた、独りで居る事が出来ない人間の性なのだろうか、だからと言って私は彼女を責める気にはならないけど。

「彩子の言いたい事も解らないでも無いけど、でも愛って相手の嫌な面も包む事が出来るんだって私思うけどな、包むと言うか、補うと言うか、表現は難しいけど」

私は高齢になった老夫婦が公園で手を繋ぎ散歩する姿に憧れの気持ちを持っていた、だから彩子にもその情景を説明していた。

「白髪になるまで夫婦二人手を取り合って生きる事は素晴らしい事よ」

少なくとも私はそう有りたいし、そうすべきだと、彩子に言った。

時より公園でそんな老夫婦の姿を見て、私は羨ましく私もそう有りたいと思っていた。

「ごめんね美沙、ヴァイオリンお届けしてこんな話して・・・」

「何水くさい事言ってるのよ」

「彩子にも、理想の人が何処かで生きて居るんだって」

「そうかな・・・」

「彩子だって結婚はしたいでしょう？」

「それはね」彩子が頷いた。

「じゃ・・・運命の人待ってみたら良いよ」

その日はかなり長時間話をして、彩子の結婚問題は棚上げのまま彼女は帰って行った。

彩子自身、本当の処一番理想の結婚を夢見ているのではと、私は感じた。

3

十日後、夫の誕生日がやってきた。

誕生日が来る前に、歌のプレゼントをするため、誠慈と何度もリハーサルを繰り返し、この日を待っていた。その夜、夫が帰宅してドアを開けた時、私がピアノを弾き、誠慈が歌を歌った。
ハッピーバースディ ツウ ユー、ハッピーバースディ ツウ ユー・・・

「誕生日、おめでとうパパ」

誠慈は思いつき手を叩き、私は、クラッカーをならした。

「美沙、誠慈、ありがとう・・・」夫は驚いて、目頭を熱くしていた。

それからケーキカットをして食事をし、いよいよ秘密だったプレゼントを渡す時になった。

「パパ、はいプレゼント」

ヴァイオリンが入っている大きな化粧箱は、音符ばかりの包装紙に包まれ、紫色のリボンを付けていた。

「なに・・・これママ！」誠慈が知らないプレゼントだったので、ビックリして近所中に聞こえる程の大声を上げた。

「うおー、凄い大きな箱だね、何が入ってるんだ？」夫が驚いた。

「じゃ、箱開けてみて・・・」

夫は、ニコニコしながら、箱の包みをほどいていった。

「すごーい、ヴァイオリンじゃないか・・・」

夫は直ぐさまヴァイオリンを手に取り、顔がしわくちゃになるくらいの笑顔で喜んでくれた。

「あっ、これお姉ちゃんのお店のだ」誠慈がまた大声を上げた。

「これ、かなりしただろう」

「金額は内緒、とにかく良いものよ」

「有り難う美沙、最高に嬉しいよ」

「誠慈、凄いだろう、ママこれ、買ってくれたんだ」

「うーん、凄いよ」

早速、ヴァイオリンを手に取り「うーん、良い音色だ」と言って演奏を始めた。

本当に嬉しくて堪らない笑顔の夫を示唆渋りに見ている。

早速、エルガーの愛の挨拶を夫と二人で演奏してみた。

「ヴァイオリンが良いと、演奏も良く聞こえるな・・・ハハハ」

夫は、それからヴァイオリンをずっと握り、上から横から後ろから眺め廻していた。
刻印の文字も気に入ってくれた様で、その文字を何度も何度も指でなぞっていて、よほど嬉しかったのだろうけど、ヴァイオリンを二時間近く手から離さなかった。

仕事に疲れ、毎日夜の帰宅が多かった夫、昔の様に、ヴァイオリンを弾いたりコンサートに行く事が、ほとんど無くなった。

最近、あまり笑顔を見せる余裕すら無かった。

土曜でも日曜でも、六本木のプロジェクトで呼び出され、楽しみは時より家族と遊びに出かける位のもので、大変な苦勞をしていた。

日本のサラリーマンの縮図というか、その典型的な生き方を選択した夫には、安らぎを得る環境は少なかった。だから、誕生日のお祝いとプレゼントは、夫にとって最高の慰勞であったし、私と誠慈の最大限の感謝の場でもあった。

深夜、誠慈も眠り、夫と二人ベッドの中にいた。

「今日は嬉しかったよ・・・」夫が私に頬を寄せて話し始めた。

「美沙、ご免な・・・」

「何が？」

「仕事ばかりで、誠慈の事は何時も美沙任せだし、夜は遅いし、申し訳ないと思ってる」

「それで、ご免か・・・仕方ないわよ」

「誠慈は、あなたと遊びたがっているのよ、出来るだけ遊んでやって」

「そうだな、父親らしい事しないとな・・・」

サラリーマンの宿命とは言え、夫は完璧な仕事人間になっていた、夫はその事で、家庭の団欒も出来なくなった事が心の負債になっていた様だった。

「誠慈を一流のピアニストにするために、私頑張るから、あなたも仕事頑張ったら良いわよ、これからお金だって掛かるから、ご免なんて言わなくて頑張って、ア・ナ・タ」

「そうだよ、じゃ頑張るか・・・」

「その調子・・・うふふ」

夜、疲れている夫だったが、眠る事も無く、二人して話し込んでいた。

すると突然、夫は私をギュッと抱きしめて「有り難う美沙、愛してる・・・」と思っても掛けない言葉を言ってくれた。

そしてその夜は、神秘の世界を旅するように二人だけの至福の時を過ごした。

まるで、サンサーンス・白鳥のヴァイオリンの音色に身を任せるように、夫の愛は優しかった。

小学校一年から始めたピアノ学習は、毎週二回のレッスンと、夏休みの合同トレーニング、そして私の個人的な練習アドバイスが続いた、バイエル教本、様々な課題曲を毎日続けたけど、誠慈もピアノ練習が嫌だとか滅多に口にしなかった。

中村先生の直接指導は、想像以上に素晴らしくて、小学校五・六年生頃は課題曲を与えられると他の子供と比較して、早いペースで演奏を覚え、ベートーベンのエリーゼのためにや、ショパンの練習曲などを大人顔負けで弾くようになっていた。

中村先生も、誠慈は思っていた以上に音感覚がずば抜けているので、将来はピアニストの道も夢では無いと言って下さった。

ただ、同級生の男の子達からは、「おまえ、ピアノなんて女の子がするんじゃないのか」

「お前は女か、誠子さん」などと言われ、ちょっとした、いじめも有った。

女の子だと馬鹿にされ、学校から家までかけ足で帰宅し、大泣きされた事もあった。

だから学校では先生とごく一部の子供以外、ピアノの話はタブーだった。

それだけでなく、ピアノを弾くので、バレーボールなど、指を使うスポーツは積極的にやらなかったもので、体育授業は、あまり良い成績を貰えなかった。

そんな事で、ピアニストを目指す引き替えに、サッカーだ、野球だと男の子の遊びには加わらず、友達はごく少数で、その面では誠慈も寂しい思いをしていたようだ。

小学校作文作成の時だった。

お題が『僕の夢』で、誠慈にしては珍しくタブーだったピアノの事を書き、夫も私もとても感激し、嬉しい思い出となった。

『ぼくの夢——ぼくの夢が大きくなったらピアニストになることです。

ぼくのお母さんはピアノがじょうずです、ぼくはお母さんが大好きです、だからお母さんの好きなピアノも大好きです。

ぼくが小学校一年生の時、ゆうめいな神山やすのり先生に会いました。その時先生は七十歳すぎの、おじいさんでした。でも、おじいさんなのに、とてもピアノがじょうずでビックリしました。

その時、ぼくは神山先生にピアノがうまくなるよと、ほめられました。

ぼくも神山先生のように、ピアノがうまく弾けたら良いなと思いました。

それからぼくは、神山先生のお弟子さんの中村先生にピアノを教えてもらいました。

今は、中村先生とお母さんがピアノを教えてくれて、だんだんうまくひけるようになったので、これからも練習して、ピアノをもっとじょうずにひいてみたいです。

大きくなってピアニストになって、お父さんとお母さんにピアノのリサイタル聞いてもらいたいです。』

この作文を読んだ私は、涙が止まらない程、感激してしまった。

夜、夫にも作文を見せたら、やっぱり感激して「誠慈をピアニストにさせてやろうな、その為に

も一生懸命働くから」と力強く言ってくれた。

神山先生とは、あの出会いから東京都内で開催されるリサイタルには必ず駆けつけて誠慈と二人して先生の演奏を聴いていた、残念だったのは夫の仕事が益々忙しくなり、三人で同席出来たのはあれから三度だけだった事だ。

先生の演奏が終了すると、また楽屋を尋ね、先生とピアノの話に花を咲かせていた。楽屋に入ると必ず先生は、誠慈にピアノを弾かせ練習の成果を確かめていた。小学校一年の何も解らない時から、中学校一年になるまで、その出来事は続き成長著しい、誠慈の姿を見て、神山先生は、毎回感激されていた。

リサイタルだけでなく、東京の一流ホテルでのディナーパーティーに参加させて頂いたり、東京文化会館近くの中華料理店でお食事したり、オペラを鑑賞したりと、私と誠慈と彩子は先生に随分お世話になって行った。雲の上の先生だった神山先生と身内以上に親しい交流を続ける事となり、私はそんな環境になった事が夢の様だった。

*

誠慈が小学校四年の時、神山先生から連絡が入り先生のご自宅に招待された。初めて先生のご自宅に伺うので、夫も一緒に行く事になり誠慈と私と夫三人して出かけた。先生のご自宅は、横浜市内の小高い丘の閑静な住宅街に有り、都会の中でも緑の自然が残っている場所に有った。

丁度新緑の季節だったので、先生のご自宅の廻りは、鮮やかな緑の草花に囲まれ、横浜港が見渡せてとても素敵な所だった。三階建て鉄筋コンクリート造りのお家で、ピアノをかなり長時間練習される為か、外にはピアノの音が聞こえない造りの住居だった。

「うわー、素敵な扉」

私は、先生のご自宅扉を見て思わずそう叫んでしまった。

まるで西洋の教会か美術館にでも来たような美しい彫刻が一面施され、美しい絵画のステンドグラスが中央にはめられていて、とても重厚感が漂う扉だった。

「本当に素晴らしいね、この扉」夫も感激していた。

「誠慈、これが本物のステンドグラスだよ、綺麗だろ」

「うん、綺麗だよ」

夫は、誠慈に扉がこんなに素晴らしく高価な物なのかを説明していた。

私は、その扉の脇に有るチャイムを鳴らした。

ほんの数分後美しい扉が開き、先生のお声が聞こえてきた。

「いやー、ようこそ、待ってましたよ・・・」

先生は子供の様に満面笑みを浮かべて、私達を迎えて下さった。

「どうぞ、どうぞ」

「誠慈君、良く来たね」

「はい、今日は宜しく申し上げます」

「今日の日を楽しみにしていましたよ・・・ねえ誠慈君」

先生は、誠慈をまるで実の孫の様に見つめ、頭を撫でられた。

先生に案内されて、応接間に通され、フカフカで肌触りがとっても良い革張りのソファに腰を掛けた。

「ちょっとここにいて下さい」そう言うと先生は部屋から出て行かれた。

部屋を見渡すと、沢山のトロフィーや盾、表彰状や感謝状の入った額が列んでいた。

有名な指揮者や楽団と一緒に写された写真が何枚も飾られていて先生の偉大さがその写真一つ見ても解る。

サイドテーブルの上には、陶器製で可愛らしいピアノの置物が有ったので、私は「あっ可愛い」と呟いて、その置物に手を触れてみた、なんとその置物はただの飾りでは無くて、ウイスキーが入っている瓶になっていて、made in Parisと書かれてあった。

『さすが先生、お酒までピアノでしかもパリ製』と心で呟いていた。

先生と初めてお会いしてから、もう三年経ったけど、こうやって先生のお宅にまでお伺いする様な出来事が起こるとは、何だか不思議な夢を見ている様だった。

先生の長女、菜都美さんが、お茶をもって来て下さった。

先生はもう六年前に奥様が他界され、独り身だった事から、長女の菜都美さんがご主人と同居して生活しておられた。菜都美さんにはお子様が居られず、先生と菜都美さんとご主人の三人暮らしをしているそうだ。

「初めまして、神山でございます」ゆっくり会釈をされた。

「はじめまして・・・」

「ようこそ、遠いところ大変でしたでしょう・・・今日は、ごゆっくりと」

菜都美さんは本のつかの間の会話だけを交わして、部屋から出て行かれたが、とても清楚な女性にお見受けした。

そのお茶を飲みながら応接室で、先生が現れるのを待っていたら、奥の部屋から「村上さん、こっちへ来てご覧下さい」と先生が私達を呼んでいた。

呼ばれた部屋に入ってみると、そこはコンクリートで囲まれたスタジオになっていた。先生は、ピアノの椅子に腰掛けて、私達が入ってくるのを待っておられた。セメント色した壁には、よけいな飾りが無い、ほんの少しの絵画やカレンダー一位が有るだけの簡素なスタジオだった。有る意味では無機質の空間と言う感じでもあったし、殺風景だと言ってしまえば、その通り。ただ部屋の中央には、黒塗りの光沢が眩しく、重厚感漂うピアノが置いてある。

STEINWAY & SONS,

偉大なピアニストが選んだピアノは、やはりスタインウェイ製グランドピアノだった。世界の一流コンサートホールの殆どに、このグランドピアノが置かれている。ピアニストが最も愛用する名器。神山先生のスタジオは、そのグランドピアノと会話する部屋の様に見えていた。

正直な気持ち殺風景な部屋だと思っていたので、部屋に対する感動は無かった。でも仕事柄建築に関わる夫は、スタジオに感心して、あたりをジロジロ見渡していた。「素晴らしいお部屋ですね、このコンクリートの仕上げは最高ですね」夫が言ったものだから、少しお世辞ではと勘ぐっていた。セメント色の壁は、コンクリート打ちっ放し工法と言うそうで、夫の説明では、コンクリートの地肌を綺麗に出すのは技術的にかなり優れた建設職人でないと難しいそうで、夫は感心しきりだった。夫は建築物を見る目が違うのかもと思っていたのに、その後私の見方が一八〇度変わる瞬間を迎える事になった。

「先生何か演奏聞かせてください」誠慈がお願いをしてしまった。大演奏家の先生を前にして、そんな事図々しくてとても言えないのに、子供は遠慮をしないと言うか、素直と言うのか、でも先生はニコニコしながら誠慈のリクエストに応じてくださった。「じゃ、ショパンを弾きましょうかね・・・」

先生がショパンの幻想即興曲嬰ハ短調を弾き始められた。その瞬間——私は感動で言葉が出なくなった。その音色は、ピアノのおとぎの国にでも入ったかのように、夢の様な音となって聞こえてきたからだった。とても普通のお家では、再現出来ない美しい音色。ピアノの一音一音がまるで声をかけている様な美しさ、微かな残響が何とも言えない余韻となって聞こえる素敵な部屋だったのだ。

信じられない美しさ、格調高き演奏、何と表現したら良いのだろう、これこそ至高の音色。

私の心がキューとなって、何とも幸せな気分にして頂いた。

部屋の構造、素材、そしてスタインウェイのピアノが、先生の神業といえる指使いで、音はこんなにも違ってくるものなのか・・・私の心は小舞していた。

この部屋が殺風景なのには理由があった。

先生の説明によると、この部屋に入ると、何も無いので一切の雑念を無くしてピアノ演奏に集中出来るそうだ、凡人の私にはそんな境地になれないと思うけれど――

何よりピアノの音の反響、残響を計算して設計しているそうで、備品などを飾らない方が良いとのお話だった。建築の事は解らないけど、先生は何処までも音楽を追究して、このお部屋の構造まで、拘っておられたという。

さすが先生と感心していた。

「誠慈君、ここでエリーゼ、弾いてご覧なさい」

「誠慈君には少し、鍵盤のタッチ、重いかもしれないがね」

まだ大人の指では無い誠慈の指、でも彼は指を精一杯広げて鍵盤を一つ一つ丁寧にタッチしていた。

誠慈は、ベートーベンのエリーゼのためにを弾いた。

「誠慈君、そこは、もっとゆったりとしたテンポで弾いてご覧なさい」

「そうそう、流れる様に・・・」

「そうだ、それで良い」

いつも自宅で聞いている誠慈のピアノとは、かなり違う、やはり環境とピアノが違うのだろうけど、それにしても、誠慈が一回り大きく見えていた。

「小学生で、これだけ美しく弾けるのだから、将来が楽しみだ、何時も前を向いて地道な練習こそ重要な事なんだからね、誠慈君・・・」

先生は、誠慈を褒め、励まして下さった。

「お父さんとお母さんに言いますが、ピアニストになる為に、ピアノだけ特訓させてはいけませんよ、美術館で美しい絵画を鑑賞したり、文豪の小説を読んだり、そして沢山の大自然を見に行き、真美善の世界を学ばせる事こそ大切なんです。

それから人や万物全てを愛し、沢山の友達を作り愛情を育む事ですよ、演奏のテクニックだけなら上手な人は沢山いるが、美しいものを美しいと素直に言え表現できる研ぎ澄まされた心はテクニックでは作れない、芸術と技巧は違う」

「音符を追いかけるだけのピアノ弾きになっては駄目だから、どんなにテクニックが良くても聴衆が感動するとは限らない、音には人の心、魂が宿って感動が深まるものだよ、解りますか」

「はい、解りました」夫と誠慈が同時に返事した。

誠慈の演奏が終わると、急に昔の思い出話をされた、神山先生は、クリスチャンの家庭で育ったそうだ。初めて西洋音楽に触れたのは、ロシアの宣教師が日本に宣教で訪れた時だったそうで、先生がかなり若い時だった様だ。

「そのロシアの宣教師はね、お爺ちゃんて長い髭を生やしていてね、まるでサンタクロースの様だったよ、手はしわくちゃだったなあ、その手に引かれて海を散歩して、その方が、教会でオルガンを弾いて、他の宣教師がヴァイオリンを引いていた、その時の音色の美しさが、幼い私の身体中に染み渡るように聞こえていた、それが音楽に対する目覚めの一步だったんだね」

「オルガン弾いてみたい、そう母に話すと、少し大きくなったある日、ピアノが家に持ち込まれていた。私は身体が震えるほど嬉しかった事を覚えているよ、それから夢中でピアノの練習をしたんだなあ」

その話を聞いていて、私は思った、誠慈が先生と出会った時、丁度先生がロシアの宣教師のお爺ちゃんと出会ったと同じ思い出が先生の心に蘇ったのではないだろうか。

それで誠慈にピアノの話をしたんだきっと――

「私は、幼い時から、お茶の水のニコライ堂に両親に連れられ通っていた、教会の声楽隊が、賛美歌を混声の合唱で歌っていたんだ、だからハーモニーはそんな幼い時から聞かされていた、あれも私には良き音感覚を身につけさせたんだと思っているよ」

「ええ、先生、お茶の水のニコライ堂に通われていたんですか」私はビックリした。先生のリサイタルを知ったお茶の水、そして桃源郷と感じたお茶の水、そこで先生は音楽を聞いて育ったんだ、と思ったら考え深いものを感じていた。

「そう言えば、先生」

「先生は、お誕生日が、七月七日ですね」

「そう、七夕」

「実は、誠慈も同じ誕生日なんです、私ビックリしたんです」

「そう・・・それは奇遇だね、神様が合わせて下さったのだろうね」先生がニッコリと笑みを浮かべた。

やはり誠慈は、先生と出会うべくして出会った、きっと神様がそういう運命を下さったに違いない、と私は思っていた。

先生のご自宅に三時間以上お邪魔して、あまり長居も失礼なので、そろそろ帰る事にした。最後になって、先生のサインをもらうために自宅から色紙を持って来ていたので、先生に書いて頂いた。

「先生、誠慈の為に何か書いて頂けますか？」

先生は嬉しそうに微笑み、サインをして下さった。

『音楽は、神様の贈りものです 村上誠慈君へ』

先生は、毛筆で書いて下さり、最後に八分音符を添えて下さった。

先生の筆使いは、実に達筆なので私は感心ばかりしていた。

「先生、有り難うございました」誠慈が深々とお辞儀をしてお礼を言った。

「大切な宝物になりました、有り難うございます」夫がお礼をすると、先生は穏やかに微笑えられた。

私達は、先生に深々とお辞儀をして、帰宅する事になった。

私達は、先生のご自宅を後にしてから、横浜中華街に立ち寄り、美味しい中華料理を味わって帰宅する事にした。

横浜の港風景は、何とも言えない美しさが漂っていた、この港から西洋の文化、音楽が渡ってきた事を思うと、お茶の水と同じく、ロマンを感じてとても嬉しかった。

*

誠慈が、中村音楽教室に通い続けて、五年が経った。

誠慈も身長がグンと伸びて一四五センチを超え、ピアノにタッチする手も子供の手から青年の手が変わろうとしていて、かなり高度で難解なピアノ練習曲を演奏できる様になってきて小学生で遊びたがる年頃なのに、高度なピアノ曲が弾いてみたい一心で、毎日毎日ピアノ練習が繰り返され、学校から帰ってからも三・四時間くらいは普通に練習をしていた。

日曜ともなると、五時間近く練習を行い、中村先生にも感心される程、熱心に練習を繰り返す様になっていたのも、中村先生も数え切れないほど、特別にレッスンをしてくださった。

中村先生の指導は、懇切丁寧、情感を表す際の身振り手振りが殊の外大きくて、控えの椅子で見ている私は、その姿に微笑することが多々あった。

「誠慈君、じゃ次のフレーズ行くわよ」

「はい」

誠慈は、流れるように美しく演奏した筈なのだが――

「駄目、誠慈君」

「そこは、ピアノツシモでしょう、もっと優しく鍵盤をタッチするの」

もう一度、弾いた。

「まだ、駄目・・・良い、こんな風に弾いてご覧なさい」

今度は、中村先生が演奏してみた、確かに同じピアノツシモでも先生のタッチは、優しい。

「もう一度」

「そう・・・優しく・・・」

「まだ難しい事ですけど、作曲家が何で、ピアノッシモにしたのか考えてみると良いわよ直ぐに解らなくても、段々に何故なのか、解っていくわよ・・・」

「音楽はね、人の感情、つまり嬉しさとか悲しさとか、愛する気持ちとか言葉で表現する内容を、音と言うか音符に置き換えているのよ、つまりは形を変えた言葉なのね、だから、このフレーズは、何故ピアノッシモに作曲家がしたいのか・・・その事を考えながら演奏するの、解る？」

「はい、解ります」誠慈が大きく頷いていた。

それにしても、中村先生は身振り手振り宜しく、身体全体で情感を表す人だと感心していた。

誠慈の練習に何時も付き添う私は、中村先生とも随分話をする機会に恵まれ、時にはあのベーゼンドルファーで演奏させて頂いた。

私は、ベーゼンドルファーの鍵盤をタッチするたびに、身体にゾクゾクする快感が走った、何と言う響きだろう、美しすぎる・・・高音の透明感は最高で、とても良い気分。

私は、大好きなショパンのノクターン第二番変ホ長調を弾いてみた。

「村上さん、素晴らしい演奏よ」

「有り難うございます」

「それだけ弾けるんだから、専業主婦じゃもったいないわね」

先生は私の演奏も褒めて下さり、教室の助手でも出来れば良いのにと声をかけられたりもした、ただ夫にその話をすると、夫は首を傾げ「考えてみる」の一点張りで話は進むことが無かった。夫としては家庭をしっかり守る専業主婦でいてほしい様だった。

5

家族の一夏の楽しい思い出がある。

夏休み、長野県松本市に三人して旅行をした。夫が大好きな小澤征爾が指揮するサイトウ・キネン・オーケストラの演奏が開かれたからだ。

サイトウ・キネン・フェスティバル松本、夏休み最後の八月二十七日だった。

サイトウ・キネン・オーケストラは七夕オケと言われ、一年に一度か二度、小澤征爾の恩師、故斉藤秀雄の門下生達で、国内外で活躍する一級の演奏者が集まり記念演奏をする、その演奏レベルは西洋人までも魅了して高い評価を得ていた。

その年は、JSバッハ没後二百五十年だったので曲目も、宗教音楽家としての集大成ミサ曲口短調で千人規模のアマチュア合唱団も加わる素晴らしい演奏会だった。家族三人であんなに興奮し、

感激した夏休みは後にも先にもあの時だけだった。

夫は憧れの小澤征爾の演奏をじっくりと堪能し、誠慈は最高峰のオーケストラのスケールに感動し、私は音楽は勿論の事だけど、それと共に三人して楽しい旅行が出来たことが最高に嬉しかった。

「このオケ凄い！」誠慈はかなり興奮気味に言ってきた。

「だろう、世界の小澤征爾率いるサイトウキネンだからなあ・・・」夫が返事した。

「ねえ誠ちゃん、誠ちゃんもあんなオケで演奏出来るようになったら良いわね、ラフマニノフのピアノ協奏曲なんか演奏しちやったり」私はニッコリ微笑んで言った。

「母さん、ちょっと期待しすぎ・・・」誠慈は舌をべーとだしてそう言った。

「いやお母さんの言う通り、目指せ世界の村上誠慈だぞ！」

夫もそう言って、誠慈のあまたをグルグルなで回し励ましていた。

「僕、とにかく頑張るよ・・・」

「そうよ、その気持ち」私も誠慈を力強く励ましていた。

その夜、ホテルに宿泊して、三人して松本市の夜空を眺めていた。

東京の夜空は、明るすぎて星があまり見えないけど、松本で輝く星は数え切れない。

美しすぎる程、輝く星々――

「あっ、流れ星」誠慈が流れ星を見て指さした。

「綺麗・・・」私も気づいて呟いた。

「・・・」私は目を瞑り両手を握りしめた。

「母さん、何してるの？」誠慈が聞いた。

「うん・・・願い事よ」

「何を？」

「誠ちゃんが、ピアニストになれるようにってね」

私は真面目に流れ星に向かい願い事をしていた。

東京と違い、夜空は真っ暗闇、そして星は何倍も明るく輝いている。

夜景の美しさで家族みんなロマンチックな気分になっていた。

「この星空見ていると、神山先生が言う神が入るって感じる」私が言った。

「第九の歌詞の様に満天の星々に創造主が住みたもうって感じだな」夫が呟いた。

美しい夜空、輝く星、心に残る澄み切ったバッハのミサ曲の音色、家族が本当に幸せを感じる一時を過ごす事が出来た夏休みだった。

*

同じ年の秋、毎年一度開かれる教室のピアノ発表会が行われた。

年々確実に成長する誠慈を見るのが楽しみだった。私だけでなく先生も生徒達も、そして付き添

う母親達も、誠慈の演奏レベルの高さに驚き、演奏が終了すると、一段と大きな拍手が鳴り響いていた。

「村上さん、誠慈君は凄く上手になりましたね」教室に通うある母親が声をかけてきた。

「有り難うございます」

「誠慈君はピアニスト目指しているのでしょうか？ 何か天性の才能持ってらっしゃるのよね、羨ましいです・・・」

多少お世辞にも聞こえはしたけど、私も満更ではなかった。

小学五年の発表会では、ベートーベンのエリーゼのためにとソナタへ短調を弾いた。

親ばかに聞こえるかもしれないけど、誠慈の演奏は同年代の子供では群を抜いて上手かった。中村先生だけでなく、招待された先生方も誠慈の演奏を褒めて下さった。

このまま上手く成長できれば、将来は浜松国際ピアノコンクールで入賞も夢では無いだろうと言って下さり、私自身かなり嬉しかった。

そして、念願の東京都内で開催するピアノコンクール出場に向け、特訓が続いていた。

*

誠慈が十一歳になった頃、東京芸術音楽コンクールが開催された。

中村先生からの推挙で、いよいよコンクールのピアノ部門に参加する事となった。

このコンクールを皮切りに、ピアニストになるための登竜門とも言える様々なコンクールに入選すること、それが私達の目標だった。

今回のコンクールは、沢山の音楽教室から未来のピアニストめざす優秀な生徒が勢揃いすると話を聞いて、誠慈も無我夢中で練習を行い、中村先生も必ず入選出来ると太鼓判を押して下さった。

予選会は、東京都内の各地で開催され、誠慈は中野地区予選会を一位で通過して、本選に出場する事になった。予選会での成績はダントツ一位で、中村先生も教え子の一人がこんなに優秀だという事が、嬉しかったようで、誠慈を思いっきり抱きしめて喜びをあらわにされた。この予選会一位通過で、中野区ではちょっとした話題の子になった。

息子のレベルがどの程度なのか、不安と期待が入り交じった中で、本選の日を迎えた。

本来中村先生は、本選の審査員に選出されていたけど、教え子が出る場合は公正さを欠くおそれがあるという理由で審査員が出来ないルールがあり、誠慈が出場する為審査員を変わる事になった。

でもその様な立場になった先生は、中村先生だけだったので、後で聞いたけど審査員を外れた事が、むしろ嬉しささえ感じたそう。

それだけ、誠慈は先生にも大いに期待されていた訳だった。

開催場所は、池袋にある東京芸術劇場だった。

池袋駅西口に到着して夫と誠慈と三人で会場に向かった、駅から徒歩で十分もかからない場所に本選会場があった。

彩子はその日仕事で来ることが出来ず、とても残念がっていた。

神山先生にも本選出場の事を電話で連絡し、先生もとても喜んでおられた。

そんな訳で、みんなの期待を一心に受けて誠慈の夢が大きく羽ばたこうとしていた。

東京芸術劇場の玄関ホールに入って私は驚いた。

長いエスカレーターが、ホールの中央に有って巨大な吹き抜け空間の中で、まるで天国行きの階段でも昇るみたいに続いていた。このコンサートホールは、平成二年に竣工したばかりで、ホールの規模に驚いてしまった。大ホールは三階建て二千名も入る大きな会場。

「父さん、すごいねこのエスカレーター」誠慈がニコニコしながら言ってきた。

「ほんと、こんなエスカレーター見たことないなあ、ちょっと怖い感じ・・・」夫が言った。夫は高所恐怖症なので、エスカレーターに乗るのが怖かった様だけど、いざ乗ってみると、怖さより空にでも舞い上がる様な気分で、楽しかったらしい。

エレベーターの列は、未来のピアニスト目指す子供達が、私達と同じ様に、母親と子供が手を繋ぎながら続いている、その子達の賢そうな顔を見て、誠ちゃん大丈夫かな・・・と不安がよぎってしまった。

本選は、小学五六年生の高学年部門、そして中学生部門、高校生部門の三部門に別れていた。

小学生高学年部門で誠慈は、十五番目の演奏者だった。十四番目までの子供達全ての演奏を聴いて本当に高いレベルに驚き、ますます不安な気持ちになり、私の心臓はドキドキだった。

「ねえ、アナタ誠ちゃん大丈夫かしら」

「僕たちが思う以上に誠慈は腹が据わっているから」

そう言いながらも夫の手はきついほど握り閉めていた。平静を装う夫だけど、本音は心配でしょうがないのだろう。

誠慈が壇上に登壇してきた。

第一次予選会通過者は二十七人で課題曲を演奏し、最終選考で七人が選抜される。

課題曲は、ショパン ワルツ第十一番変ト長調

中村先生の特訓がかなり効いて、三分間ほどの時間、軽やかに優しく演奏出来た。

勿論一音も間違えることなく、リズムカルで素敵な演奏だった。

最終選考に残れるかとても不安だったけど、有りがたい事に誠慈は七人の中に選ばれた。

そして、七人がそれぞれの用意した自由曲を演奏する番になった。

誠慈の選んだ自由曲は、モーツァルト ピアノソナタ 第十一番第一楽章。

この曲は、かなり演奏技術が要求され、特に前半の数小節が最も技巧的に難しいけど、誠慈はこの曲を無難に演奏していた。

モーツァルトらしい流れる様なリズム感や情緒性、そして優しさも必要なこの曲だけど、誠慈は実に素敵な演奏を行った。

私は、演奏を終えた途端、「やった」と呟いてしまった。

隣の夫は私の小声を聞いた途端、眉をひそめ静かにと言わんばかりに、小鼻に人差し指を押しつけた。

「ねえアナタ、誠慈きつと入賞出来るわね、かなり良い線よ」

「そうだな、客観的に見ても、かなりなものだよ」

私達の話していた通り、なんと誠慈は小学生部門で第一位となった。

「やった！」私は思わず夫に抱きつき、周りの人に驚かされてしまったけど、恥ずかしさなんて何処へやらで、私は夢の中に居る様だった。

私の人生であんなに興奮して嬉しかった出来事は無かった。

予想はしていたものの堂々一位入賞は、中村先生にとっても本当に感激だった様で、私夫婦が審査員席に駆けつけると、先生は私を抱きしめて涙を流された。

「やったわね村上さん・・・ほんと良かった良かった」

この入賞で、新聞に誠慈の写真が掲載され、学校やPTAそして荻窪の商店街でも、結構有名になり、沢山の人々に祝福された。

その時から私達は、もっと上のコンクール目指して、もっと厳しい練習を始めていった。

誠慈はピアニストの夢に向かって確実に着実に進んでいる事を確信していた。

丁度、この頃、私と誠慈がとても感動したピアニストが日本中で演奏会を開いていた。フジ子・ヘミングと館野泉だった。

フジ子・ヘミングは三十年も日本から離れてドイツなどで苦勞されて、日本に帰国してから急に話題になったピアニストで、リストとショパンの演奏は、今までの演奏家とはひと味違う哀愁と慈愛に満ちた音を奏でる。

館野泉も長い間フィンランドで活動され、日本に帰国されて演奏活動を展開して、シューベルト生誕二百年記念リサイタルを開催した。

館野泉の演奏は、優しく美しい、『北歐のピアノの詩人』と、新聞に批評された。

私と誠慈は、二人の演奏を聞きたくて、東京都内で開くリサイタルを予約して夢中で演奏を聴いた。

誠慈は、神山先生とフジ子・ヘミング、館野泉と言う大きな目標が出来て、益々ピアニストの夢に向かって頑張ろうとしていた。あんな素晴らしいピアニストになる事を目標に頑張りたい、音大入学しソリストとしてデビュー、人々に夢を届けるピアニストになって欲しいと、心から願っていた。

二〇〇〇（平成十一）年、夫が一心不乱に働き投入してきた、六本木のプロジェクトの本格的な建設が始まった。

かなり大規模な商業ビルをキーテナントに複合施設が出来る様だ。

夫はこのプロジェクトと共に心中でもしそうな程、毎日この建設現場に通い詰めていた。

「美沙、やっと始まったよ六本木」

「建設？」

「そう、今まで本当に大変だったからなあ・・・」

「土地買収、テナントの件だって、もめ事は色々有ったしき、二年後楽しみだよ、日本中があのビルで話題になるよ、きっと」

夫は、漸く今までの苦勞が報われる時が訪れると喜んでいた。

大きな期待を持ちながら、仕事に打ち込む日々が続くある日のこと。

夫は、あまりお酒を飲まないのに、悪酔いする事など無い人だったけど、その日の夜、珍しく泥酔して帰宅した。

そんな夫を見たのは、あの時が初めてで、たしか誠慈が、もうすぐ小学校を終了する頃の事だった。

「おーい、帰ったぞ、美沙おーい」

「どうしたのあなた」

「どうしたもこうしたも有るか、夫が帰って何が悪い・・・」

夫はろれつも回らず、私に食って掛かるような口調でとても変だった。

「あなた、随分酔ってるわね・・・」

「うるさい、ばかやろ」

あんな言い方をしたのは結婚して初めてだった、夫はかなり悪酔いしていた。

「おー誠慈、お前起きてたか・・・」

「お父さん、大丈夫」誠慈が恐る恐る言った。

誠慈もまだ起きていたので、父親の変貌ぶりにはかなり驚いていた。

「おー、大丈夫だ、誠慈お前は、お父さんみたいなサラリーマンなんか、なるなよ、お前はピアニストだ、な、な誠慈」

「お父さん・・・」誠慈がぽかんと口を開け、夫を見つめていた。

「よく聞け誠慈・・・俺はな、サラリーマン、な誠慈・・・サラリーマンはただの歯車だ、歯車は壊れれば、そこでお終いだ、換えは幾らでもある、誠慈な、な・・・そんな人生なんかクソ食らえだぞ誠慈、あー解るか誠慈、聞ってるか誠慈・・・」

「う、うん・・・」誠慈も何と返事して良いやら解らない程、夫は支離滅裂だった。

「お前は、ピアニスト・・・だ・・・ピアノ・・・ス・・・ト」

かなりろれつが回らないが、そんな事を誠慈の前で話していた。

誠慈もこんな父親の姿に、啞然とするばかり、誠慈は深刻な顔つきになっていた。

夫は、その後、イビキをかいて寝てしまった。

「父さんどうしたんだろう？」誠慈が夜中心配で話しかけてきた。

「どうしたのかなあ・・・あんなお父さん見たの初めてよ」

「俺はただの歯車だ、って何言ってるんだろう、ピアニスト・・・ピアニストだって」

誠慈は父親の泥水姿にかなりショックを受けていた。

「会社で嫌な事でもあったんでしょ・・・まあ、明日の朝はケロッとして起きてくるわよ、きつと・・・」

私は誠慈のショックを和らげる為に、軽い返答をした。

ただ、そう言う私自身が夫の変貌に内心不安な気持ちで一杯だった。

その夜は、そのままそと寝かせたが、その後何であんなに泥酔していたのかを知る機会が有って、夫の変貌が少し理解出来た。

数年前だった。日本経済は平成の大不況下で混乱し、不動産や建設の企業が深刻な打撃を受けていた。六本木の再開発は日本経済絶頂期に始まり、その後、戦後最大の不況が訪れ、この計画の見直しや、不動産会社との交渉事が大変になっていた。

ある日、夫は担当していた不動産会社の社長と深刻な問題で交渉事を行っていた。

その時、その社長が言ったきつい言葉が発端だった様だ。

夫は、不動産会社の社長に、かなり厳しい交渉事を迫り、解決出来ない場合は、その会社との業務提携は破棄する方針で交渉に臨んでいた様だ。その交渉中相手の社長からかなり厳しい言葉を返されたそうで、相手の社長は、何だとお前、ただの歯車の分際で、俺に指図するのか生意気な、お前ではラチが開かん別な人よこせと部長に伝えろ、と夫は言われたそうだ。

夫は得意先の社長だから、じつと我慢したそうだが、その後その仕事で、夫の会社に多大な損害が出た様だ。そして夫が上司にこっぴどく叱られ、あの夜の出来事に繋がった。夫は「ただの歯車・・・」と言われた事が忘れられず、その後もずっと心に引っかかっていた様で、落ち込む事が有るとその言葉を呟っていた。

その不動産社長は、その後、会社が倒産して自殺してしまった。

そんな夫を見ていた私は、夫に「ただの歯車なんかじゃないよ、あなたは」と夫を励まし続

けた。会社の業績もかなり低迷し、夫も何かと大変だったけど、六本木の建設が始まってからは、段々完成して行くプロジェクトの事が楽しみで仕方がない感じで毎日を過ごしていた。夫の誠心誠意の努力は、素晴らし結果を残そうとしていた。

誠慈のコンクールもあの出来事から、毎年チャレンジをして、その都度入賞出来て中学に進級する頃には、東京都内のピアノ教室でもかなり有名になっていた。

誰が見ても、誠慈は将来有望なピアニストになれると感じていて、みんなが期待し、誠慈もその期待に答える為の努力を続けていた。

もう、誠慈にはピアニストの道しか見えない程、毎日毎日がピアノ練習の日々だった。

中学生になってからは、更に厳しい練習が続き、学校でもピアニストを目指す生徒として知られる様になり、同級生は皆、誠慈がその道を目指して生活している事を理解していた。そんな生活だったので、沢山の友達と交流する事は難しかったけど、音楽が切っ掛けで何人かの友達と親しく交流する様にもなっていった。

同級生の中では、フォークソングを趣味にする斉藤聡君と、ヤマハ音楽教室に通う、松山一枝ちゃんが一番の仲良しになった。

三人に私が加わり、時々家で音楽パーティーを開く様になり、誠慈にとっても其れが、とても楽しい遊びでも有ったようだ。

第三章 悲愴なる日々

二〇〇二（平成十四）年 六月二十二日土曜日。

最悪の、その日を迎えた。

うっとうしい梅雨の雨が、水曜日から三日三晩降り続き、楽しみのはずの週末までが、憂鬱になるほどの豪雨だった。

昼間だというのに薄暗い一日、ガラス窓には雨のしぶきが容赦なく叩き付けていた、窓の外を眺めてみると、木々は元気なく頭をたれ、道は水たまり処か、まるで池でも出来たような雨水溜まりが辺り一面に出来、その雨水溜まりに出来るしぶきの大きさが、雨の強さを語っていた。

この日、夫の母房子が風邪を拗らせ緊急入院したとの連絡を受けて、夫と息子が急遽病院にお見舞いに行く事となった。

病院は、J Rの駅からかなり離れているので、車で病院に行く事になった。

私自信はどうしてもはずせない中学校のp T Aの会合が有り、一緒に行けないので、玄関先で二人を見送る事になった。

「じゃね、母さん、行ってきます」

「二人とも雨が強いから、気をつけてね」

「あなた、運転、大丈夫」

「お父さんは運転上手だから、この位の雨は大丈夫だよ」誠慈が、夫を励ます様な口調で言った

。

「大丈夫、大丈夫、心配しない、じゃ」玄関先で聴いた、夫の最後の言葉だった。

二人が出かけて半日が経った。外は相変わらず雨が降り続き、夕方なのに夜のように薄暗く、憂鬱な気分を助長していた。

夕方四時を回ったが、二人からの連絡が無かった。

P T Aの集会を終えて、帰宅した私は、夕ご飯の準備で台所に立っていた。

その時、コップを洗っていて、洗剤で手が滑りコップはステンレスの流しに落ちて端が欠けた。

「あっ」

ただの物理的な現象だというのに、何だか妙に縁起が悪い気分になったのは、妻としての第六感だった。嫌な予感を覚えた私は、「遅いな、何してんだろう」そう呟き、夫の携帯電話を呼んでみる事にした。

「お掛けになった電話は、電波の届かない処に居られるか、電源が入っておりません」
ガチャ——私は受話器を置いた。

普段なら夕方までには、何時に帰るよ、の一言ぐらい連絡が有るのに、その日は五時半を過ぎても、夫からの電話が無く、不安な気持ちが、また沸々と沸いて出ていた。

「何してるんだろ、何時に帰る位、電話くれても良いのに・・・」

何時になっても電話は無く、携帯を何度も呼び出しているのに、電波が届かないの繰り返しだった。私は、コップが欠けてからというもの、何時になく不安げな気持ちが沸いて出て落ち着かず、ふと気づくと、部屋中をうろうろ歩き回っていた。

そして六時を回った。

リリリーン——

漸く電話が鳴った。私は、とても不安な気持ちで、受話器を取った。

「はい、村上です」

「村上さんですね、奥様ですか」

「はい」

「こちら、千葉の幕張総合病院ですが、只今、ご主人様とお子様が交通事故で病院に搬送されてまして、特にご主人様が重傷でして、かなり危険な状況になっております」

「うそ・・・そんな、嘘でしょう」私は、突然の連絡に動揺していた。

ハッキリ覚えてはいないが、何かの間違いでは無いか、人違いでは無いかと、電話口で病院の職員に強い口調で言っていた。

「お気持ちは、お察し致しますが、村上様で間違いございません・・・」

人違いでも、勘違いでも、悪い冗談でも無かった。

「それで、子供は、子供はどうです・・・」

「お子様は、幸い命には別状有りませんが、ただ右肩と右腕が複雑骨折しておりまして、集中治療室で手術をしております」

二人は、義母の見舞いを終え帰宅途中に、反対車線から乗用車が、対向車線をはみ出し正面衝突をした。

夫の車は、運転席が大破して、夫は、生命の危険があると聴かされた、助手席にいた息子は、車内に閉じこめられ、救急隊の必死の救護で車から救出されたが、息子はかなり重傷の様だった。私の自宅連絡先を調べるのに時間が掛かり、遅くなって連絡が入った様だ。

「直ぐ参ります、場所何処ですか？」

その言葉を話してから、私はどうやって幕張総合病院にたどり着いたか記憶に無いほど、動揺していた。

覚えているのは、病院の待合室についた時、時計の針が八時だった事だけだ。

電車と、タクシーを乗り継いで、一時間以上掛かって到着していた、連絡からもうすぐ二時間になる、もしかすると――

*

「村上です、夫は・・・」

救急病棟の個室に案内された。

看護師が手を翳し「こちらです、残念ながら」と言い、首を横に振った。

個室のドアを、恐る恐る開け、夫の横たわるベッドを見て、私は絶句した。

すでに人工呼吸器は外ずされ、心電図は直線を描き、夫の瞼は閉じられていた。

「三十分前、ご主人様は息をお引き取りになりました」担当医の先生が言った。

夫の変わり果てた姿を見て、ただ泣き崩れるばかりだった。

その時、自分がどうしたのか、病院の人々に、何を話したのか覚えてはいない。

唯一記憶している事は、事故の衝撃で内臓が破裂し出血が止まらず、緊急手術も出来なかった事と、夫の顔は事故の損傷を受けず、まるで寝ている様だった事の二つだけ。

夫と巡り有って十八年、夫は私の手の届かない世界に行ってしまった。

私と夫の幸せな家庭生活は、この瞬間終わった、この惨い一瞬の事故で――

そして悲しみはそれだけに終わらなかつた、この時から誠慈の夢までが崩れ始めていた。

夫の前で亡き崩れている事は出来なかつた。

直ぐさま、息子の集中治療室に赴かねばならなかったからだ。

あまりに突然の出来事で、どう対処すれば良いのか解らず、ただ集中治療室で息子が助かる事だけ、祈っていた。

息子は、四時間に及ぶ緊急手術を行い全身麻酔の為、話をする事が出来なかった。

主治医の説明では、対向車線から容疑者の車が主人の車に突っ込み助手席に座った息子は、折れ曲がったハンドルとフロント機材が右腕に直撃しそのまま救急隊が救助するまで腕が挟まれていたそうだ、その衝撃で右肩から右腕にかけて複雑骨折し、再度の精密検査をしなければハッキリとは解らないが骨髄損傷の疑いも有るとの事だった。

「骨髄損傷」その言葉が妙に気になった。

その夜は、夫の遺体をどうするか、息子の看病はどうするか、親族の連絡、夫の会社への連絡やら、集中治療室と霊安室の間を独り翌朝まで動き回っていた。

明け方、疲れ果てた末、病院の待合室の椅子に腰を掛けた時、今朝方届けられた地元紙の朝刊一面の見出しが目に留まった、昨夜の事故が一面に載っていたからだ。

『———また、酒気帯び運転の悲劇』

二十二日午後五時三十分ごろ、千葉県幕張町の市道で東京都杉並区、会社員村上慎一さん（三十八）の乗用車に、前から来た乗用車が正面衝突し、村上さんが全身を強く打ち約二時間後に死亡、搭乗していた子供一人が重傷を負った。

千葉県警幕張署は二十二日、乗用車を運転していた千葉市緑区、会社員、〇〇容疑者（二十一）を危険運転致死傷及び酒気帯び運転の疑いで逮捕した。

調べによると、〇〇容疑者は、制限速度（四十キロ）を大幅に超過して乗用車を運転、反対車線にはみ出して村上さんの乗用車と衝突、二人を死傷させた、現場は片側一車線のゆるいカーブ。〇〇容疑者は、友人とドライブして帰宅する途中で、「八十キロぐらい出していた」などと供述している、〇〇容疑者からアルコールが検出されていて、酒気帯び運転で取り調べが続いている。』

新聞を読み終わると、また涙が止まらず頬を伝わり流れ出した。

新聞紙が涙でびしょ濡れになる程に———

死を伴うほどの交通事故など想像すら出来なかった。

事故は、他人事にしか感じられなかった。

死とは、何十年も先に年老いて初めて考えるものの様に思っていた。

しかもこの事故は、相手が酒気帯び運転で反対車線に飛び出したという、人生でそんなあり得ない程の確率で事故に遭遇した事を思うと、無念さとやり切れなさが、私の心を覆い涙を止める事が出来なかった。

その日の朝、再び夫の前に佇んだ、あまりに惨く無念な心が私を縛り付け、夫に伝えたい言葉さえ閉ざされたまま、気は重く、張り裂けそうになる心臓の鼓動が脈打つ、悲愴な心は自らの手で、その鼓動を止めてしまいたい衝動に駆られた。

夫と共に死を選びたい、心はそう言い続けていた。

でも、もう一つの私——、母としての私がそこにいた。

もしも、息子までが死んでしまったなら、私は直ぐに追いかけて行く。

ただ、息子が助かった・・・その事だけが、私自身を失い掛ける寸前で止まっていた。

その日は、朝から夜中まで労心焦思していた。

その日夕方、夫は無言のまま、帰宅した。

親族や会社の方々が次々に尋ね、会社の同僚の方達を中心になって葬式を準備して下さった。

私は、夫の葬儀と誠慈の看病と両立が出来ないので、誠慈の看護は、担当医と看護師にお任せするしかなく、三日間は病院に行くことが出来なかった。

だから葬儀中でも、誠慈の様態は気になり、弔問する方々が声をかけても上の空で、自分が何を話したのか全く覚えていない。

夫の母も義弟に付き添われて葬儀に参席していたが、病気の様態が悪く義母も葬儀半ばで、病院に帰らなくてはならなかった。

義母は、自分の病気見舞いに来たばかりに、こんな事になったと言って、泣き崩れ、親戚も義弟も義母を抱きしめるだけで、どうしてやることも出来なかった。

「お母さん、お母さんの所為じゃないから・・・」

私は、義母に寄り添い、そう小声で言った。

義母は、無言で泣くばかりだった。その義母の姿で、私も廻りが全く見えなくなるほど涙を浮かべ、泣き始めてしまった。

「美沙、しっかり」彩子が、私の肩に手を掛けて話しかけた。

私は涙が止まらず、彩子の顔さえ見ることが出来ないほど、泣き崩れた。

「美沙、泣かないで」また彩子の声が聞こえた。

「そうだよ、美沙、しっかりおし」私の母咲子が気丈に声をかけてきた。

「お前は、喪主なんだから、狼狽えた姿をしちや駄目だよ」小声だが叱り口調で言った。

母の気持ちは、解っていた、娘の不幸に母もどれ程悲しい気持ちだったろうか、しかしその母は、喪主の立場に対しては、厳しく私を叱った。

「お前が泣いていたら、慎一さんも浮かばれないよ、慎一さんの親族だって・・・」

喪主として霊前の直ぐ側にいながら、泣き崩れた姿を見せ、弔問者も驚いていただろう。

夫を失った悲しみが、私の心を支配して、私は葬儀中、理性有る態度を最後までとることが出来ず、焼香に訪れた方達に迷惑を掛けてしまった。

涙目の中でお焼香する人々が微かに見えていた、その中に中村先生と神山先生が居られ、私は何と言って良いのか、ご挨拶すら満足に出来なかった。

神山先生まで横浜からわざわざお越し下さったのには本当に頭が下がったけど、その先生に本当に失礼な状態だった事がずっと心に引っかかっていた。

お二方とは、結局その日、会話らしい会話をしないまま、ご挨拶だけでお別れした。

2

葬儀の後片付けも終わらないまま、私は、彩子と母咲子連れだって、誠慈の入院した病院に駆けつけた。

病院が遠いため葬儀準備中は、義弟と叔母が誠慈を見舞い、私は病院に行くことが出来なかった、その事が一番気がかりで、葬儀が終ると直ぐ病院に駆けつけたのだ。

私独り、主治医の先生と面接する事になった。

「先生どうでしょうか？」主治医に質問した。

「右肩と右腕がかなり複雑骨折してますので、長期入院が必要です、三ヶ月近くギブス生活になりますね」

「それと、精密検査で骨髄損傷を確認致しましたが、それは軽度です、ただ外傷後ストレス障害、所謂PTSDが起こる可能性が考えられます」

PTSDとは、トラウマの病名で事故の事が脳裏に再現されて苦しんだりするそうだ。

「PTSD？」

この言葉を聞いた時点では、実感が沸かなかった、医学用語だから実際にどんな事が起こるか想像出来なかったからだ。それ以上に私は誠慈の右手が気になっていた。

「先生、右手はどうでしょうか？」

「現時点での症状ですが、右腕の複雑骨折はリハビリでほぼ快復すると思いますが、中指から薬指にかけて神経断裂などが有る事と骨髄損傷の影響で、指には後遺症が残り正常な人と全く同じにはならない可能性が有ります」

私はその言葉を聞いて、目の前が真っ暗になってしまった。

「えっ先生、あの子はピアニスト目指しているんです・・・」

先生もその言葉を聞いた時、額に手を添え一瞬目を瞑り考え込んでいた。

「うーん・・・」先生は首を傾げたため息の様な声を上げた。

「弾けない訳では有りませんが、プロのレベルは何とも・・・」

私は夫が亡くなった悲しみが癒えない辛さと、誠慈の問題でまた、谷底に突き落とされた。最悪

の言葉だった。

この瞬間、ピアニストの夢が経たれたと感じた。

病室がしんと静まり帰り、気まずい空気が覆っていた。

私の顔がかなり深刻な顔つきになったのだろう、先生が急に話を変えた。

「まだ、息子さんはお若いので、リハビリ次第で可能性が無いわけでは・・・」

先生の言葉は慰めに聞こえた。

指を普通に使えないピアニストなど居るはずもない、この言葉は労りだと感じた。

指はピアニストの命、その指が神経麻痺なら難しい――

私の頬に涙が伝わり流れ出していた。

「お母様、色々とおつらい事でしょうが、ここで挫けたら息子さんも快復出来ません
厳しい様ですが、お母様の介護が息子さんの将来に大切ですから」

「は、はい・・・」ハンカチで涙をぬぐい、気を取り直した。

私は、化粧をし直して、何事も無いような姿で、病室に向かった。

すでに彩子と母房子は病室で誠慈を見舞っていて、心配顔で私を待っていた。

私はドアを開け、何事も無いような顔で三人に有った。

「美沙、先生何んだって？随分時間たったから心配してたよ」母が言った。

「ごめんごめん、レントゲンとか先生詳しく教えてくださってね・・・でも大丈夫だった、ホツとした」

「ギブスとるのに時間掛かるけど、治るって」私は明るく返答した。

「そう、じゃ良かったね」母が安心顔で言った。

誠慈は、父親が亡くなった事を主治医から聞かされていた、誠慈は動かせない身体が震え、涙を流し続けていたようだ。

誠慈の顔は血の気が引いて青白く全く精気を感じないほど寝たてていた、母親として見るに堪えない可哀想な状態だった。

「誠ちゃん気分はどう？」私は努めて明るく声を上げた。

「う・・・」誠慈は微かに聞こえる程の声で呟いた。

「眠れる？」私の質問に答える元気さえ無いように見えた。

「父さん、可哀想・・・」と呟いたので誠慈の顔と見てみると誠慈の枕が濡れていた、父親が居ない寂しさから、誠慈の涙する姿は、それから何日も続いた。

「どうして父さんが死ななくちゃならないの・・・どうしてさ、僕が代わりに死んでいれば良かったのに・・・」

「何言ってるの・・・」私は返す言葉が出ない事ばかりだった。

誠慈の気持ちは痛いほど良く解る、私だって何故夫だけが犠牲にならなくてはならないのか、そ

の理由を探しても答えなど見つからなかった。

誠慈が不憫で堪らない、口惜しい気持ちを親子で味わい続けていた。

私自身涙が出るほど苦しくて悲しくて切なかった、でも息子の前ではそんな心を見せてはならないと私の理性が情を縛り付け気丈に振る舞う別人格の人間になろうとしていた。

「誠ちゃん、先生が三ヶ月は掛かるけど、治るっていうから頑張ろうね」

「嘘・・・」誠慈が呟いた。

私はその言葉を聞いて、心臓の鼓動が急に早くなった。

誠慈は何か感じているのだろうか？そう言ったきり黙ってしまった。

先生も看護師も誰も誠慈の右手の快復に問題があるなどと説明はしていない、なのに誠慈は嘘だと言う、私はその言葉で動揺していた。でもその動揺は顔に出さない様に振る舞っていた、それでも息子は敏感に私の動揺を察していたかも知れない。

「嘘じゃないわよ、先生が治るって言うんだから・・・」その場を繕って言った。

「誠ちゃん、疲れているから休ませてあげた方が良いわね」母が言った。

「誠ちゃん、元気だして」彩子が息子を励ましていた。

「そうね・・・」無理無理笑顔を作って返事をした。

彩子と母は、それから直ぐに帰宅して行った。

私はただじっとして椅子に腰掛け、誠慈の様子を見つめていた。

私の心は内心穏やかにはなれないでいた、夫の死を思い出すと張り裂けそうな気持ちが沸いて出てくる、でも誠慈の前で涙を流す事は私の心が静止させていた。

ギブスを外しても思う様に右手が動かない事を知った誠慈はどうなるのだろう、ピアノが思う様に弾けない事を知った時彼の精神状態はどうなるのかとそんな事を思いめぐらすと湯鬱で堪らなかった。その後病院に泊まり込み毎日誠慈の様態を確認したけど殆ど毎日同じ状態が続いた、誠慈は毎日一言二言話すだけでだだじっと横になっていた。

嘘だろうと言った誠慈は、右手の事をどんな風を感じているのか不安だったが、あえてその事を話題にする事は避けていた、だからピアノの話も出せなかった。

その事が実は誠慈の気持ちを苦しませる事だったとは知らなかった、かなり後になってピアノの話題を避ける母の姿に誠慈は深刻な何かを感じていたと言われたから。

——早く直して、ピアノ弾いてね・・・等と明るく言っていたなら誠慈も安心したのかも知れなかったけど、こんな時私の心は不器用でそんな明るい言葉を掛ける事が出来ないでいたのが、敏感な性格の息子は事の重要さを反対に察知していた様だった。

ほぼ毎日、私が色々声を掛けても、誠慈は呟く位で殆ど何も話さない、自分の怪我の辛さと、父親が亡くなったショックからだろうか、毎日深刻な顔つきをしていた。

*

千葉の病院は自宅から遠いため、私自身が電車を利用して見舞ったり泊まり込んだりの生活が続き大変だった事から、入院してから二十日後、荻窪の総合病院整形外科病棟に移る事になった。

事故の傷害保険が適用された為、誠慈は精神状態を考慮して個室に入院させた、そして私は自宅から通うようになった。

幸い脳と内臓に関しては何の問題も無いと言われ、中学の勉強は出来るだけ遅れないように、病室でリハビリを続けながら学ぶ事にしたので、三ヶ月後には学校に行ける見通しだった。三ヶ月も学校を休校すれば進級もままならない状態だけど、丁度リハビリ期間中夏休みが重なった事も幸いして、学校の先生からはこのまま進級出来るように計らって下さると言われ安心していた。

学校の先生やクラスメイトも尋ねて下さり、誠慈にも漸く笑みがこぼれる様になってきた。入院中、誠慈は左手だけで食事をし、左手だけで鉛筆を持ち文字を書いた。

学校の勉強が遅れないようにと、教科書を持ち込んで自主学習を続ける事になり、色々大変だったけどその学習も何とか続け、時より学校の先生が尋ねて下さり励ましを頂いた。

二ヶ月後、最初の話より少し早くギブスを外す事になった。レントゲンで骨の着き具合が順調だと言う、十四歳という年齢が快復を早めているらしい、ただ、指の神経についてはリハビリ次第と言うことで、ギブスを外してからの状態を見て行くそうだ。

誠慈抜きで、主治医と右手に関して話をした。

「先生、息子の右手が完治する確率はいかほどですか？」と質問すると先生は言った。

「可能性はゼロでは有りませんが、完治の確率は一割位かと・・・」

それは奇跡としか言えない確率だった、誠慈が完全に指を直しピアニストになる確率が十%、確かにゼロでは無いにしても完治しない確率が九十%なら誰が見ても考えても難しい話だった。

ただ、母親としてその奇跡の確率が例え一%だろうとも、奇跡が起こることを信じ続けるべきだと感じていた。

それからは『奇跡よ起こって』と祈る思いで毎日を過ごすことになっていった。

*

「誠慈君、じゃ、右手少し動かしてみようか」荻窪の病院主治医が話しかけた。

誠慈が恐る恐る右手を動かし始めてみたが、怖がって中々動かすことを躊躇っていた。

長い間ギブスをしていた為に右手は固まったままで、動くのを忘れた様に肘が曲がったままだ

った。

「無理」誠慈が病室の天井を見上げて呟いた。

なかなか右手が言うことを聞かない、動かそうとしても思うように動かなかった。

肘を恐る恐る曲げてみたが、怖くてほんの少しまげただけで止めて仕舞った。

手を動かそうとしても、親指と人差し指が少し動く程度で、心配している小指と薬指は微かに動く程度だった。

「誠慈君、怖がらないで大丈夫、動くはずだよ」先生が誠慈を励ました。

リハビリを見つめながら私の心は泣いていた。

こんな状態では、ピアニストなどなろう筈もない。

実に無念だった、事故を起こした犯人に対しても怒りと憎しみなる感情が沸々と沸いた。

初めのリハビリは漸く腕と手が微かに動く程度だったので、誠慈の気持ちはかなり落ち込んでしまった。先生もあまり無理をさせない方が良さだろうと話され、症状は改善されなかった。ギブスが外されて十日経過しても手は思うように動かなかった、いや動かなかったと言うより動かさないと云った方が的確かもしれない、それだけ誠慈は怪我の重要さに心が引き裂かれる思いで居たようだった。

ある日の夕方病室に入った時だった。

私が病室に入ると、すすり泣く声が聞こえてきた——誠慈が泣いてる。

「誠ちゃん・・・どうした」

私は慌てて誠慈の側に駆け寄ったけど、誠慈は、顔を外に向けたまま振り向く事もせず、ただすすり泣いていた。

私の姿を感じてから、すすり泣きは身体を震わすほどの号泣になった。

「どうしたの、ねえ・・・」私が聞いても滂沱な涙は止まらなかった、何事が起きているのか理解できないで私は立ちすくんでいた。

おそらく誠慈は手の快復が思うようでない為にピアニストの夢が絶たれて泣いていると私は直感していた、その思いを心の中に秘めながら誠慈の背中を優しく撫で誠ちゃん頑張っ、と心で呟いていると

「僕は駄目だよ・・・」誠慈がポツリと呟いた。

「何が、何が駄目なの？」

「指・・・もう駄目だ」

やはり誠慈は指が動かない事で深刻な悩みを抱えていた。

「駄目な事ないよ、リハビリ初めたばかりで挫けちゃ駄目よ」

「母さんは、本当は知ってるんだろう指が駄目な事」

私はドキリとして鼓動が高鳴り顔も幾分硬直していた。

「そんな事誰が言ったの？、先生は大丈夫だって、駄目だなんて言っていないわよ・・・なのにど

うして駄目だって決めつけるの」

「聞かなくても解る」

私は話に無理が有るのは承知で快復を強調していた、だけど誠慈は嘘をついていると初めから決めつけている様だった。

「母さん本当の事言ってよ・・・」

「ふー・・・」私は大きなため息をついた。

「本当の事って？」何食わぬ顔して、私は反対に質問した。

「だから、もう右手駄目なんだろう、ピアノが弾けないって・・・」誠慈が急に苛つき食って掛かる様な態度で返事した。

大泣きの後は、ふて腐れた態度、私は驚くと共に誠慈の精神状態がかなり厳しいものになっている事を痛感させられた。

誠慈は優しく思いやりのある子だったので、私に対して食って掛かるような言い方は殆ど見た事が無かったけど、今回の状態は初めて見る息子の変貌だった。

そしてこの変貌はその後も続く事になったため、主治医の先生に状態を報告すると、PTSDの症状つまり躁鬱状態ではないかと言われ、不安な気持ちになった。

そして、その症状に対しては何ら特効薬的なものは無かった、ただ不安な気持ちを助長しないように気を付けるしか手だてが無いけど、その手だてすらどうして良いのか解らなかった。何もせずただ黙って側に居てあげたり、リラックス出来る様に工夫したり出来るだけ独りぼっちにさせない様にしたり、色々試みた。

事故の事を思い出して精神状態が急変したりするトラウマの症状が発症したりする為出来るだけ彼の気分を和らげる様な努力は続けていた。

症状は一進一退で、明るく振る舞う日と鬱の日が繰り返されたけど、段々明るさを取り戻していると感じられた。右手の指さえもっと軽快に動けば良いけど、その点は全く期待はずれで、リハビリを続けても動きは一向に良くなる気配が見えないでいた。

初めてギブスを外した時から見れば、随分良くなるはなったけど、通常の人動きまでいかないのだから、誠慈の落ち込みは理解できるし、私もその事で湯鬱になった。

誠慈のPTSD症状が大変だったので、主治医以外に精神分析医（セラピスト）が誠慈の精神状態を診察する事になった。

事故のトラウマで突然起こるパニックは、一日二日の治療で治るものではなくて、かなり長時間の精神的な安定が必要だと言う、息子の心を慰める為に母親としても介護が一番重要だと言われたけど、その私自身さえ、夫を失った悲しみを何処にぶつけて良いか解らなかった。

正直なところ私自身、夫が居ない寂しさで気分は毎日暗かった、夜独りでベッドに寝ていると寂しくて涙がこぼれ落ち、枕がびっしょり濡れる事は一度や二度では無かった。

それでも誠慈の前では母親として気丈なまでに振る舞い、その悲しさを見せる事は全くと言って良いほど無かった。

夫が居ない寂しさはとても表現できないもので、辛いとか悲しいとか言う次元では言えない、私の心が引き裂かれる様な気持ちだった。

悲しすぎると人間の身体は振れる程の痛みを覚える事を知った、間接の節々が痛み、頭が何時も重々しく、心臓あたりが何時も締め付けられている感覚が有った。

そんな状態でも、病院で誠慈の前に立つ時は、例え作り笑顔で有ったとしても、その姿を通し続けていた。

早く、早くこの不安定で悲しい状態を脱したい気持ちで一杯だった。

それと、そんな精神的な問題だけで苦しんでいるだけでは済まなかった、夫が急死したことで将来の生活保障に赤信号が灯っていた。当面は保険金での生活保障が入ったけど、何年も生活を守れる保証など何も無いし、誠慈の教育費の捻出も必要なことや、あれこれ考えると早く息子の病気が完治して、私自身が働かねばならないと思っていたので、その事でも悩みは尽きなかった。

3

荻窪の病院に神山先生と中村先生そして彩子の三人が一緒にお見舞いに来て下さった。

神山先生はわざわざ横浜から誠慈の為においで下さり本当に有り難かった。

三人は待合室で私が来るのを待っておられた。

誠慈はベットでまだ寝ていたので、起こさずに誠慈抜きで面会室でお会いした。

「神山先生、中村先生、わざわざお越し下さって、本当に恐縮です」

私は深々と頭を下げてお礼をした。

「神山先生、お葬式の際は取り乱しまして、誠に申し訳ございませんでした」

再び深く頭を下げてお詫びした。

「いや、本当に残念な事になりました、さぞお辛かろう」神山先生が返事された。

「村上さん、誠慈君の様態はどうですか？」中村先生が話しかけてきた。

三人の前だから本当の事を話そうと決めた、病状、PTSDや精神状態、ギブスは外れたが指が正常に戻らず大変な事など快復の状況を事細かに説明をした。

「実は、誠慈の右手は後遺症が残り、指が満足に動かないらしいです」

「ええ・・・」中村先生が驚いて声を上げた。

「それじゃ、ピアノは弾けないのかな？」神山先生が心配顔でおっしゃられた。

「病院の先生は、弾けなくは無いと言ってます、ただプロのレベルは難しいだろうと」

「そんな・・・」彩子があっけがかりした口調で言った。
先生方は私の説明を聞いて愕然として声さえ出ない状態だった。
「うーん・・・」神山先生が大きなため息をつかれた。
「ご主人が亡くなられて、奥さんはさぞお辛いでしょうに、誠慈君までがそんな事では、何とも無念な事になったものだね」神山先生のお顔はかなりお辛そうだった。
「ただ、誠慈には右手は快復すると伝えておりますので、この事は内密に」
私はあくまで誠慈に右手が完治する方向で考えようとしていた、もしかすれば奇跡だってあり得るだろうから——有る意味で究極の親御心だったかもしれない。
「解りました」三人と話裏を合わせて、誠慈の病室に入ることにした。

「こんにちは、誠慈君」中村先生が明るく声を掛けた。
「あっ、先生」誠慈も久しぶりに見る先生方の姿に微笑んでいた。
「もうすぐ退院だって、良かったね」彩子が言った。
「先生わざわざ、誠ちゃんの為に来て下さったのよ、有り難いね」
そう言う私の話に誠慈も反応して、先生達に深々と頭を下げてお礼していた。
一時雑談をしていた、病室でお茶を出し、果物を食べて頂き何気ない会話をしていた。
「早く怪我直して、教室で練習しようね、誠慈君」中村先生が優しく言った。
「そうよ、リハビリ頑張らなくちゃね」彩子も続けた。
みんな、何事も無いかの如く明るく振る舞い、ピアノが早く弾けるようにと話をしていたが、誠慈自身はその言葉一つ一つに反応を示さず独りピアノの話題を口にしなかった。私には何かそれが不自然だった。

すると誠慈が突然「ご免なさい」と叫び、布団に頭を押しつけた。
どうしたのだろうと四人して誠慈の態度に驚いていた。
何事が起きたのかとみんなて困惑していると、また誠慈は「僕ピアノ弾けない、ご免なさい」と言った。
そう言った瞬間誠慈の顔が見る見る変わり頬に涙が流れ始めた。
「誠慈君、どうした」神山先生が声を掛けたけど、返事が出来ないほど泣きはじめた。
誠慈は滂沱して全身が震えていた。
「誠ちゃん、どうしたの」私は誠慈の身体を抱きしめたけど、嗚咽が止まらずどうして良いか途方にくれていた。
やはり誠慈は右手の動きが悪く指が思いように曲がらない事で深刻な不安を抱えていた。
病院で独りリハビリを続けても、結果が思わしくない事にショックが有り、気が狂いそうになっていた様だ、またPTSDの症状が出た様にも思えた。
誠慈は、事故の後遺症で躁鬱になっていた、其れを助長するように指が思うように動かず、ピアノが弾けない悩みをずっと抱えていた。この何週間もリハビリを続け悩みの中で苦悶し続けたの

に病院の方にも私にもその悩みを打ち明けないでいたのが、先生達のお見舞いが切っ掛けで、悩みが吹き出してしまった。

「もうピアニストになれない・・・」誠慈は私達の前で嗚咽しながら叫んでいた。

「父さんも死んだ、僕も死ねば良かったんだ、死んだ方がましだ・・・」

「内を言うんだね誠慈君！」神山先生が叱り口調で誠慈の言葉を窘めた。

「そうよ、誠ちゃんの快復をみんな祈ってるのよ」彩子が言った。

誠慈の嗚咽は中々止まらなかった、私達は、誠慈に何を話してあげれば良いか困惑していた。どう言ったら誠慈は元気になるのか、その言葉を探して皆黙ったまま顔を見合わせていた。

「誠ちゃん・・・」私は、ただその言葉だけ言って誠慈を抱きしめた。

私も頬から涙がこぼれ落ち、心が引き裂ける思いで一杯だった。

暫くその状態が続いて、十数分くらいだったか幾分落ち着きを取り戻し、顔色も赤みが差してきた。

すると神山先生が誠慈に向かい言った。

「誠慈君、まさか、死のうなどと・・・」

病室は重々しい空気に包まれ沈黙が続いた。

「・・・」誠慈は目を閉じて黙っていたが、ほんの少し頭を傾げた。

「僕は、何のために生きるのか、もう解らない・・・」誠慈は、悲しい声で返事した。

「やはり」

「全てを投げ出して自殺などしたら・・・それは最悪な選択だよ、何の解決にもならない」神山先生がまた厳しい口調で言った。

私は誠慈がそんなに思い詰めていた事に驚いていた、いや私の前ではむしろそんな気持ちを見せない様にしていたのだろう、母親を心配させない様に。

神山先生がどうして誠慈の心を読むことが出来たのかそれは解らなかったけど、先生の指摘は的を得ていた様だった。

誠慈は、何日も死にたいと思い続けていたらしく、その事を告白した。

「君はまだ若い、まだピアニストになれないと決まった訳じゃないだろう、借りに・・・借りにだがピアニストの夢が絶たれても、若い君にはまだ色々な人生の選択が有る馬鹿な事考えてはいけない」先生は諭すように誠慈に話をしていた。

「でも、先生、僕はピアニストになる為に今までピアノを」

「誠慈君には、私の昔話などなんだがね、聞いてくれるかね」

誠慈は神妙な顔で先生の話の聞き始めた。

神山先生は、音大に進みピアノ演奏が優秀だったため、パリの音楽院に留学をした、日本人は先生独りだけで、ヨーロッパ全土から優秀な学生が音楽の勉強に集まった。

そこでピアノを弾いたのだが、同僚の学生は勿論、先生よりずっと年下の子供が弾くピアノが先生より上手で、先生にはかなりの衝撃だったそうだ。先生は深刻な悩みを抱えてしまいこの先、生きることさえ嫌になった、そして自殺を考え行動を起こしたが、下宿先の家主が見つけた自殺は未遂に終わった。

憔悴しきった先生は途方に暮れたが、音楽院の先生に励まされ音楽院でもう一度気持ちを入れ替えてピアノに向かい最終的には優秀な成績で音楽院を卒業したそうだ。

つくづくその時の自殺未遂を後悔しているそうだ。

「自殺は、あらゆる未来の可能性を失う事なんだよ」

神山先生は、必死に自殺の無謀さ、苦しみの後の新しい道を説いていた。

「いいかね、あの小沢征爾だって、中学二年の時はピアニストになろうとしていた、だが、斉藤秀雄先生や、バーンスタインそしてカラヤンとの出会いで、指揮者の道を選んだ、その選択は今誰もが正しかったと思うだろう、人生には行き先を変える事は幾らでも有るんだよ」

「私と出会った事が、君をピアニストの道に進ませた、それも現実だが事故も現実だ、君は生かされた、生かされた以上は道が変わっても生きて行きなさいと神様が言っておられるんだよ、人生を投げ出したら駄目だ」

最後に一言だけと言い先生がまた話された。

「人は生きてると絶望を味わう時が有るものだ、だが絶望と言う闇を堪え忍ぶ事が出来た時、希望と言う光が差し込むものだ、だから諦めてはいけない、これからどんな道が有るかは解らなくとも神様はきっとその道を教えて下さる、そう信じたら良い」

神山先生の話の話を聞いていると誠慈の顔色がだいぶ良くなり不安げな顔つきが消えていった。

誠慈は先生に向かって大きくお辞儀をした、先生のお話に何か感じていたのだろう。

「そうよ、誠ちゃん頑張ってる」彩子が励ました。

「そう、兎に角プラス思考よ誠慈君ね」中村先生も励まされた。

みんなの励ましで、漸く誠慈は普通の姿に戻っていった。

先生方の励ましは本当に有り難かったけど、ただまだまだ不安定な息子の状態を思い私は心配でたまらなかった。

その後、先生達を病院玄関まで送り、お別れをした。

「村上さん、また誠慈君の状況連絡下さい電話で良いから、まだ心配だからね」神山先生がそうおっしゃられ、帰って行かれた。

中学校のお友達も、何度も見舞いに来てくれた。

ある日、同級生の、斉藤聡君と松山一枝ちゃんが病院に来てくれた時だった。

私は二人が病室に入ると、リンゴを一口サイズに切りみんなに差し出した。

「何時も、お見舞い有り難うね、此は私達からのお礼を込めてね・・・」

私が二人に見舞いのお礼を込めて完熟メロンをご馳走した。

「うわーこのメロン、チョー完熟」聡君が感激して言った。

「ほんと、美味しい」一枝ちゃんも喜んでた。

「誠慈、お母さん優しいね・・・」聡君が言ったものだから、誠慈が微笑んだ。
私も、何だか照れくさくて、後ろに振り向き、ニンマリとしていた。

「これ、クラスのみんなからお見舞い・・・」

一枝ちゃんは、持参した箱を誠慈に手渡した。

誠慈が外箱を開けると、折り紙で作った沢山のピアノが箱の中に詰まっていた。

「うわー、何このピアノ、凄いじゃん」誠慈は驚きの声を上げた。

誠慈が驚いたのも無理がない、箱の中には、金、銀、赤、黒、沢山の折り紙が入っていた。

その折り紙は全て、ピアノの形をしていて、大きなものから小さいものまで、実にユニークな折り紙が数えられない程入っていた。

二人に聞いてみると、誠慈を励ます為に、クラス全員が折り紙を折る事になって、その形が千羽鶴では無く、ピアノになったそうだ。

「誠慈、田所もさ、折ったんだよ、あのぶきっちょがさ・・・」

「そうよ、田所君たら、あの太い指で・・・折り紙折れないってベそかいたの、私も可愛そうになっちゃって、手伝ったのよ」

「そうか、みんな僕の事・・・」

誠慈は感激して、目にうっすらと涙を浮かべていた。

「みんな、お前の事心配してるよ、早く帰って来いよな」

「うん、有り難う、もう少しだから・・・」

「処で誠慈君、腕どう？」一枝ちゃんが聞いた。

「うん・・・あんまり・・・」

「ピアノ弾けそう？」

私は、その言葉を聞いて、心臓が張り裂けそうになるほど、心配になった。

誠慈は、うつむき目を閉じていた。

「わかんない」と呟き、口を真一文字にしていた。

すると一枝ちゃんが「村上君、諦めたら駄目だよ」と強い口調で言った。

「そうだよ誠慈、諦めるなよ」聡君も言った。

同級生では、二人が一番の友達で、聡君は、フォークギターを弾き、フォークソングを歌うのが大好きで、時より誠慈と家で歌っている。

一枝ちゃんも、誠慈と同じくピアノを習っていて、将来は音楽関係の仕事をしたいと言っていて、私とも時々ピアノを弾くことが有った。

二人とも、誠慈にとり気の合う仲良し友達だった。

「有り難う、僕頑張るから」

「そう来なくちゃ、また歌、やろうよ」

「うん」

二人は、精一杯誠慈を励ましてくれた。誠慈も二人の声に感激した様子で、何度も何度も

頭を下げていた。

二人が帰ると、誠慈は、窓ガラスに向かったまま、ただじっとして黙っていた。

励まされても、誠慈が苦しんでいる様に思えて、私は辛かった。

4

退院が近づいた。

いつの間にか外界の風景は、秋の雲が高い青空に広がり、爽やかなそよ風が頬に当たり、時の移り変わりを知らせていた。あの事故から八十日が経過していた。

骨の接合は随分良くなり、リハビリを続けて右腕が段々動くようになった。

ただ相変わらず指の一部は思うように動かず、誠慈は主治医に本当の事を言って欲しいと詰め寄る事が何度か有り、主治医もそれとなく指が完璧に治らない可能性も有ると告げていた。

神山先生の一言が聞いたのだろうか、指の事を話されても以前の様に憔悴する事が少なくなった。少なくはなったけど、でもその不安が消えた訳けではなかった。

入院治療は、ほぼ終わり自宅から通院で大丈夫だと判断され学校に通学も可能になった。

「誠慈君良かったね」看護師が微笑んで退院を祝った。

主治医の先生も玄関先まで見送って下さり、誠慈もにこやかな笑顔を浮かべながら病院の外に出て、タクシーに乗車して自宅へ帰る事にした。

車が走り出して五分も経たない時だった、急に誠慈の身体が震え出し額から冷や汗が流れ始め「止めて・・・」と誠慈が大声をあげた。

「どうしたの？」

「良いから止めて・・・」

車は停車し「大丈夫ですか？」と運転手が聞いてきたが、誠慈はぶるぶる震えて言葉が出なかった。またPTSD？私にまた不安が過ぎった。

兎に角タクシーから下車して道ばたで誠慈の様子を見つめていた。

車両の外に出ると、しゃがみ込み頭を抱えて震えていた。

「誠ちゃん・・・どうしたの？」私の問いかけにも応えられない程、脅えていた。

仕方なくタクシーはその場で会計を済ませ再乗車を諦めた。

数分すると誠慈の震えが収まり、平常心を取り戻したので、また「どうしたの？」と聞いてみた。

すると誠慈は「車が怖い・・・」と呟いた。

「事故に遭いそうで怖い」

結局この時、車に乗車せずその場所から自宅まで歩く羽目になったけど、この出来事もPTSDの症状、フラッシュバックだった。

フラッシュバックという症状は、誠慈が車に乗車すると事故の場面が脳裏を霞め、恐怖心が突如出て来てしまう、この日から一年以上誠慈は車に乗車出来なかった、その事でもこの症状がどれ程酷いものかを教えられた。

車に乗り込もうとすると、心臓がドキドキし始めたり、吐き気やめまいが襲って来て駄目だった、バスにも乗れない、これには本当に困り果てた、何処に出かけるにも歩くしか無かったから。

怪我がほぼ完治したとしても、心の傷は中々癒えなかった。

自宅から学校に登校する様になって、漸く普通の生活が戻ってきたと思いきや、誠慈の精神状態は不安定で、酷い躁鬱状態になったかと思うと、激しいイライラ状態になって教科書を壁に投げ捨てたり、突然喚いたり、何が起こっても不思議でない状態だった。

その状態は毎日起こる訳では無くて、何かの切っ掛けがそう言う行動に走らせていた。

正常な時はごく普通の子供と変わらない、学校でも特に大きな問題は無かった。

むしろ学校にいた方が寂しさを紛らわせ友達と談笑出来て精神は安定している様にも見えていた、時より鬱的な姿で居る時があると先生から報告を受けては居たけど、格別変な態度は見受けられないと言っていた。

ただ独りだけでテレビを見ていて事故のニュースが有ったり、車の騒音が聞こえたりすると、突然気分が動揺し始める。だから、何時どんな時PTSDの症状が起こるか検討が着かない。

夕食を二人で食べているある日もそうだった。

誠慈が急に涙を流し始め、身体が震え、お箸をテーブルにポトリと落としてしまった。

また、ピアノや父親の事を考えている、何度も何度も同じ事が繰り返される為に私自身精神的に参っていたので、その時ばかりは気持ちが押さえきれず、

「誠ちゃん、起きてしまった事は、もう取り返せないだから、もう忘れなさい！」

と激しい口調で誠慈に言ってしまった。

私は、誠慈が極端に心の浮き沈みが起こり、躁鬱病状態だと感じていたので、強い口調でそう言ってしまった。本当はPTSDに一番言ってはいけない言葉と知っているのについ、私自身が我慢できず言ってしまった。

すると誠慈は苛立ち、テーブルの上に有ったコップや、お皿を素手で思いっきり叩き、コップは床に転げ落ち——ガチャーンと音を立てて割れてしまった。

「何するの！」強い口調で誠慈を叱った。

「どうして母さんは、解ってくらないんだ」

誠慈は大声を上げて部屋から飛び出してしまった。

慌てて誠慈を追いかけ彼の肩を掴もうとすると

「僕は、もう駄目なんだ・・・」と言い流れる涙を拭こうともせず泣きじゃくっていた。

私はこの子の未来に対して不安が過ぎりいたたまれない気持ちで一杯だった。

退院してから二ヶ月が経ったけど、誠慈の指は未だに思うようには動かない、ピアノが弾けない訳ではない筈だけど自宅に帰ってから誠慈はピアノの鍵盤に触ろうとはしなかった。中村先生の教室にも行きたくないと言い、練習は何時始めるか不明だった。

自分の右手が少し動き始めても、ピアノの前には一度も行かなかった。
あの事故以来我が家からピアノの音色が消えてしまった。
誠慈がピアノを弾く気力が出るまでずっと我慢していた。
勿論CDで音楽を聞く気持ちすら無くなり、我が家から音楽が消えてしまっていた。

中村先生から、何度と無く様子伺いの電話が入ったけど、ピアノを弾かない誠慈の事で先生も悩まれておられた。
相変わらず誠慈はピアノを弾かず、右手を動かす事もせず、私もピアノの事を話題にする事が怖くて何も語らず時間が過ぎていった。

5

初秋、我が家に突然手紙が届き差出人を見て驚いてしまった、神山先生からだった。
毛筆で書かれた手紙だった。

『前略、誠慈君へ、
退院して、もう直ぐ三ヶ月ですね、お母さんから何度か状況をお聞きしておりますので今の君の様子は有る程度把握しております。
徐々に良くなって来ているとの事、嬉しく思っております。

さて、お見舞いの時、自殺のお話など縁起でもない話題を持ち出し後に後悔しておりました。
ただその後お母さんから誠慈君の様子が大分良くなっていると聞き、安堵しております。
退院してから、ピアノを弾いていないとの事でお母さんも随分心配なされています、誠慈君の気持ちを考えると私自身の心までが苦しくなります。

私自身、誠慈君がピアニストになる事を希望し、夢見ておりました。
しかしその道は容易な道では有りません、願望だけではなれない道で大変な努力と忍耐の毎日です。
誠慈君も自覚されて居ることでしょう、だからあえて伝えねばならないと感じ手紙をしたためました。

もしもこの先、誠慈君の右手が万が一完治せず、ピアノが思うように弾けない場合でも、その事で悲観し絶望を味合う事の無きように願っております。

音楽家はピアニストだけでは無いはずで、作曲家でも指揮者でも色々な道が存在します。ベ

ベートーベンでも初めはピアニストでした、しかし彼は難聴でピアニストの道を諦めました、音楽家として最悪な病気の虜になっても音楽家の執念は絶やさず生きる道を変えなかったのですから、どんな時どんな転機が有るか解りません。

私は今考えます、誠慈君の悩みは君だけの悩みでは無いと、誠慈君のお母さんの悩みであるし、中村先生の悩みであるし、私の悩みです。

皆、君の辛さを思い悩んでいます、独りで悩まないで下さい。

悩みは皆で別けるべきです。

ピアノが思うように弾けなくても、もう一度ピアノを弾いてご覧下さい。

きっと神様が新しい道を悟らせて下さるだろうから。

私がパリ留学時に人生を終わらせる事まで考えた事をお話しましたが、そのパリ音楽院で私の心に希望をもたらして下さった先生が、私にベートーベンの遺書が書かれた伝記本を手渡して下さいました、今でもその本を大切にしまって有ります、この内容を少しだけ書きつづります。

ベートーベンが三十歳を過ぎて耳が聞こえなくなりハイリゲンシュタット村で静養中に書かれたもので、ベートーベンがその頃自殺を考えるほど難聴の事で悩み抜いた様で、弟たちに宛てて書かれた遺書のような手紙です。

——隣りに居る人は遠くの音が聞こえるのに、私には何も聞こえない、誰かが羊飼いの歌を聴いているのに、私にはまたもや聞こえない、其れは何と言う屈辱だろうか、そんな事が有るたび絶望の淵に追いやられ、もう少しで自分の命を絶つ処までいった。

ただ芸術だけが私を引き戻した。

ああ、私がやりたいと思っている事の全てを出し切るまでは、この世を去ることは出来ない。だからこそ惨めな生き方に耐えて来たのだ。——

私がお話する事よりベートーベンの遺書の方が遙かに勇気を貰えるでしょう。

私もこの遺書を見て、ピアニストの夢を諦めないで進みました。

苦しみに耐える事は偉いと言えますが、耐えて居ただけでは変わるものでは有りません、苦しみを乗り越える何かを見つけて行動していかないと中々変われるものでは有りません。

ベートーベンは、乗り超える何かを、音楽という芸術に見出した訳なのです。

誠慈君、どうぞ焦らず諦めず、時間が掛かっても君がやるべき道を探して歩いて下さい。

今までの努力は決して無駄にはなりません、誠慈君の人生は此からなのだから。

私は、誠慈君が再び元気で音楽の道を志す、その時を待っております。

若い誠慈君にこんな事を伝えるのは躊躇いも有るのですが、人生は、生きることに辛く苦しい事の連続なのです、勿論楽しいこと嬉しい事、感動することは沢山有ります、ただ人生は歓喜ばかりでは有りません、むしろ苦しい事の方がどれ程多いか解りません。そう話せば人生を悲観するかも知れませんが、其れが現実世界です、私自身絶望を味わい紆余曲折が何度も押し寄せ、先の見えない出来事は数え切れない程有りました。太平洋戦争の時も、私の大切なピアノが焼けて無

くなったり、色々有りました。

其れでも人生を悲観せず未来には必ず善き事柄が待っていると信じるその一途な気持ちが、打ち拉がれた心を何時も立て直してきたのです。

私自身、ピアニストの道を辞めようと思ったことは一度や二度では無く、沢山悩み続けました。人生とは、自分の思う通りに運ばない、これも私の実感です。

ただそれでも、悩んだ時にベートーベンの遺書の事が思い出され、ベートーベンが言うように芸術が私の心を解放してくれたのです。

聖書には主の訓練を軽んじてはいけない、主は愛する者を訓練し・・・と書かれています、人生の試練は時に神様の訓練なのかと思うことが多々あるのです。

そんな苦しく悲しい試練の最中でも、何時も音楽が共に有り、私は音楽に救われました。

その音楽は神様が想像した音色から出来ている世界ですから、ある時私は神様に救われて来たのだと感じて、其れからは、悲観することを出来るだけ止めて、音楽芸術に陶醉してその歓びの世界を出来るだけ沢山の人に伝える事に力を注ぐ努力をしました。

その気持ちが今日までの私の音楽を形成してきたのです。

私の場合はピアニストとして、その芸術を創造し人々と歓びを分かち合う立場が与えられた訳ですが、ピアニストだけが音楽家では無いことをもう一度強調しておきます、神様が人間に与えて創造した音楽を慈しむ心こそが最も大切な事ですから、音楽とは、純粹に愛と歓びを伝える事、愛と歓びを得る事なのだと信じています。

その愛と歓びを伝える方法の一つがピアノであって、他にも沢山の方法が有るのです。

最後にお願い事が有ります、お母さんに心配を掛けないで、天国のお父さんにも大丈夫だと報告して欲しいのです。

お母さんに元気な誠慈君を見せてあげて頂きたい、これがお願いです。

ではまた再開を楽しみにしております、今度また私の自宅へ遊びにおいで下さい。

神山泰徳 』

「かあさん・・・」そう呟いた瞬間、誠慈の頬に涙が溜まってこぼれ落ちた。

息子が言葉を詰まらせて、嗚咽しはじめた、でももう言葉なんていらなかった。

誠慈の気持ちも私の気持ちもきっと同じだったに違いない、私達は本当に嬉しかった。

私は涙をぬぐうこともせずただ、じっと誠慈を抱きしめていた。

神山先生が、私達の事を案じて手紙をしたためて下さるなど考えられない出来事だった。何と暖かな先生なのだろう。

そして、この日から誠慈の心も随分変わっていった。

何より驚いたのは、翌日には、触る事が無かったピアノの前に座り、ゆっくりだけどピアノを弾

き始めた事だった。

半年以上誠慈はピアノを弾くことが無かったのに、先生の手紙が息子の心を大きく変えてくださった。

その事から数日して、誠慈はピアノに向かい、ショパン・エチュード第一番変イ長調を弾き始めた。

ただ、漸く弾いては見たけれど、やはり右手は満足に動かず、以前のように美しく演奏することが出来なかった。

「ふー・・・」誠慈がため息をついた。

「母さん、やっぱり駄目だね・・・」誠慈はポツリと言った。

確かに思いようにピアノは弾けない、見ていても虚しい気分になるばかりだったけど、それでも、誠慈の気落ちは思った程では無く深刻な雰囲気は消えていた。

何か悟ったかの如く誠慈は落ち着いていた。

「母さん、駄目でも僕がっかりしないよ」

「えっ」誠慈の言葉に思わずついて出た言葉が其れだった。

正直ピアノが弾けない惨めさで誠慈自身気分が落ち込むかも知れないと思っていたけど、がっかりしないの言葉にとても救われた。

「そう、誠ちゃんがそう言ってくれて、母さん安心した」

神山先生の手紙に有ったように、誠慈はピアニストになれなくても別な道を探す気持ちが沸いてきていた様だった。

先生の手紙が誠慈を変えて下さり、私は先生の事を心で思いながらお礼していた。

「これから時間掛かるかも知れないけど、僕ピアノ弾いて行くよ、ピアニストになれなくても、先生が言うように、何か探してみる」

誠慈の口から思わぬ言葉が出た事は、あの事故以来最も嬉しい出来事だった。

このままPTSDの症状が無くなった訳では無く、まだ不安な面は色々残されていたけど、其れでも、この子がピアノを弾き始めたことこそ、奇跡の始まりだと私は感じていた。

近くの公園を歩いていた。シャク、シャク、シャク・・・歩くたびに枯葉を踏む靴音が私の耳にこだまする、夫が亡くなったその晩秋だった。

公園の景色はすっかり深紅と哀愁漂う褐色に染められていた、夫とよく手を繋いでこの公園を歩いた。紅葉樹の通りを少し過ぎると黄色く色づいた銀杏並木が現れる、その銀杏の美しさにじっ

と立ち止まり、ただただ黄色い扇に見とれてしまう、沢山の扇が有るのに、よく見ると全ての形が微妙に違う、人間と同じように——

その並木の小道は煉瓦で敷き詰めた歩道になっていて煉瓦の上をコトコト歩くのが好きだった。毎年この時期には、夫と公園を散歩するのが恒例だった。

夫は、人の目線を気にすることなく私の右手を優しく握りしめ、何時も穏やかにこの道を歩いていた。

その温もりが私を幸せにさせてくれていた。

何時も楽しく手を繋いでいたのに、今私の右手は落ち葉に向いてさびそうに動いている。

私は、人生の無常をかみしめながら、右の拳を握りしめていた。

「僕は秋が好きなんだ・・・」

夫は口癖のようにそう言っていた、ブラームスが大好きでブラームスの音楽は秋の様だと話していた事を思い出していた。

夫と初めてデートして、ブラームス交響曲第四番を聞いて、夫が本当に嬉しそうにしていた、あの笑顔が私の脳裏に浮かんでいた。

まるでこの落ち葉の様に人間もただ散りゆく運命なのだろうか、あんなに生き生きとして新緑を輝かせていた草木は、冬の訪れと共に風に吹かれ何処かに行ってしまう。

人間も同じなのだろうか？

いや人間には永遠に生きてゆく、あの世が有ると信じたい——

落ち葉を踏みしめていると、ふと今朝見た夢を思い出した。

夢の内容はこうだった。

『何処からともなく、ヴァイオリンの音色が聞こえてきた。』

その音がする方向に目を向けると、雪が積もる白くて大きな岩山が見えた。

岩山を見た瞬間に、私はその岩山の頂上にいた。

岩山は、朝焼けの様な光が照らされ美しく輝き、岩山の筈だが、まるで光り輝く黄金のコンサートホールを見ている様だった。

「眩しい、ここは何処だろう」と思った瞬間、若々し姿の夫が、光を背にヴァイオリンを弾いて微笑んでいた。夫の奏でる音楽は、エルガーの愛の挨拶のメロディーの様にも聞こえるが、聴いた事が無い不思議な響きを伴っていて、その音が流れる間中、夫が抱擁する様な感覚になった。

「あなた」と言いかけた瞬間、弦の響きが小さくなり、そのヴァイオリンが、大きな樹木に変わり、辺り一面が緑の草原に変化した。その瞬間、夫は空の上へスーと上がって行った。

私は、夫を追いかけようと、走り出したが、空高く昇る夫は、溶けるように消えてしまった。気がつくと、草原には、いつの間にか沢山の小さな樹木やら草花が茂っていた。

その草花の中で、夫のヴァイオリンから変化した樹木は、小さな樹木に取り囲まれる様にして、沢山の葉を付けて茂っていた。』

不思議な夢だった。

そして私は、穏やかで安らかな気持ちが心全体を包み、とても幸せな気分になっていた。

夫が来たんだ——と感じていた。

お別れを言い、夫は夢に現れたのでは、そんな思いがあった、と同時に夫は、何か伝えなかったのだろうか？、そんな疑問がふと湧いて出ていた。

でも、夢の意味が何なのか解らなかった。

何故にあんな夢を見たのだろうか、公園を散歩しながら考えていた、色々考えては見たものの、やはり解らなかった。

誠慈の躁鬱病は、ゆっくりだけど快復に向かい始めていた。

あれからピアノも時々弾くようになった。ただ相変わらず右手を使う際に音が中断する事が度々有って、誠慈もその度に眉間に皺が寄っていた。

ピアノを弾くと言っても、中村先生の処に通う程本格的な練習を開始したわけでは無かったから、中村先生にとっても申し訳ない思いだったし、先生も残念でならないと話されていた。学校から帰った時や、日曜日にほんの少し弾くくらいだったので演奏は決して褒められる内容ではなかった。それでも、もう駄目だなどの弱音を言う事も無くなったので、私も段々安心するようになっていった。

時折、聡君が訪ねてくれて、以前のように誠慈と楽しく遊ぶようにもなった。

退院して直ぐには、学校の中でもピアノの話は出なかった様で、一枝ちゃんも聡君もピアノの話を誠慈に言わなかったそうだ。

処が一ヶ月くらい経った頃、聡君がギター片手に訪れ、一緒に歌をやろうと言ってきた。

「なあ誠慈、ピアノ弾けるか」

「ピアノ・・・」

「お前、ピアノの事何にも言わないからさ、俺心配になっちゃってさ」

「僕さ、前みたいに上手く弾けないんだ」誠慈は困惑気味に返事していた。

「やっぱり、駄目なのか？」

「松山も、お前がピアノの事言わないから、どうしようって言ってたんだ」
同級生どうしは、母と子という立場と違い、何でも遠慮無く言い合える様だ。
私がピアノの事をあまり話さないのに、聡君は何でも率直に話をしている。

「この右手、直らないかもね」

「じゃ、ピアニスト諦めるのか？」

「わかんない、駄目かもね」

私が切り出せない話を、意図も簡単に聡君は言っていた。

でも、誠慈は、先生からの手紙から随分変わった様だ。聡君の質問にも嫌な顔一つせず返事をしていた。

「お前、ピアニストが夢なのにな、チョーきつい話だな」

「きつい、確かにきつい、でも・・・大丈夫だよ」

「何で、何で大丈夫なんだ」

「上手く言えないなあ、何か、前みたいには落ち込んでないんだ」

「そうか、それなら良いけどな、がんばれよ誠慈」

「うん、有り難う、がんばるよ」

その日二人は、久しぶりにフォークソングを歌い、誠慈もピアノを弾いていた。

中学生の屈託のない、笑顔を久しぶりに見れた日だった。

何だか私も安心する一日になった。

*

誠慈は時より音楽家の本を図書館で借りてきては見るようになっていた。

モーツァルト、ベートーベンなど伝記本や、作曲した曲の説明本とか何冊も借りていて何かに取り憑かれたように読んでいた。

「何読んでるの？」と質問しても、「うん音楽家の事だよ」と返事するくらいで、誠慈が何の目的でそんな本を読んでいるのか説明してはくれなかった。

でもまた音楽の事を学ぼうとする気持ちが沸いている事は確かだったので、私はその行為をただじっと見守っていることにしていた。

肝心のピアニストの夢は、誠慈自身諦めた様にも見えるが、私もその話を切り出す事を避けていた。それに、もしかしたら奇跡的に右手が快復するかも知れないと親心で思っていた面も有ったから様子を見ていた。

年が明けて二月になり神山先生から連絡が入り、神山先生のご自宅に再び訪問する約束をした。二月二十四日、私と誠慈と彩子三人で神山先生のご自宅に何う事になった。

初めてお伺いした時は新緑が美しい季節だった。けれど今回は、真冬なので先生のご自宅に茂っていた青々した葉はすっかり枯れ落ち、寒さに耐えた茶褐色の枝だけが寂しそうに佇んでいた。

その枝を見ていて時の移り変わりの早さを実感していた。

最初来た時とても感動した玄関扉の美しいステンドグラスは、あの時と同じく、慈愛の光を放ちながら私達を迎えていた。

「ご免下さい」

私は、暫くぶりに訪れたご自宅の美しい扉をそーと開けた。

「いやー、良く来てくれました、どうぞ、どうぞ・・・」

神山先生が何時もの優しい笑顔で、迎えて下さった。

先生は誠慈を抱える様にして部屋に入って行かれた。

「誠慈君、暫くぶりだね、元気になったかな？」

先生の優しさには本当に頭が下がる、いつも誠慈に優しくして下さり、本当の祖父と孫の様に先生は接して下さった。

「先生、お手紙有り難うございました」誠慈が先生にお礼をした。

先生もその事が気になって入らしたらしく、ピアノの事を話し始めた。

「その後、ピアノ弾いていると、お母さんからお聞きしましたが、どうですか？」

誠慈はピアノの練習を始めた事、右手が上手く使えない事、ピアニストの夢は諦められないが難しそうな事など、私にも話さない内容を先生に話し出していた。

憧れの先生の前では何でも報告する誠慈を見て私は少しばかり驚いていた、でも正直な誠慈の姿を見て安心もしていた。

先生にお会いする度、先生は「ピアノ弾いてご覧下さい」と優しくお声を掛けて下さり、誠慈がピアノを弾いていた。

でも今回は、先生からは話されなかった。先生が言い出す前に、誠慈から先生にピアノを弾いてみると言ったので、私は驚いていた。

「そう、弾いてみるか・・・じゃ此処へ」

先生のあの黒いスタインウェイ製ピアノの鍵盤を誠慈はタッチし始めた。

演奏曲はショパン・雨だれ 前奏曲変ニ長調だった。

誠慈が演奏する事も驚いたけど、選んだ曲も寂しそうな曲で誠慈の心が繁栄されている様にも感じ、ちょっと寂しさが沸いた。

こんな時に何故、雨だれなんだろう？誠慈は何を言いたいのだろうかと考えてしまった。

やはり右手が思うように動かせず、ぎこちない演奏に聞こえ、先生は目を閉じた黙って誠慈の演奏を聴いていた。

私は誠慈の演奏より、先生がどう思われるかが心配で、ちらちら先生のお顔を眺めていると先生の閉じた目じりから、うっすらと涙が浮かんでいて先生もお辛そうだった。

「誠慈君、頑張ったね」先生が唇を噛みしめながら、そう言われた。

それ以上何も話さなくとも皆感じていた、誠慈はピアニストの道は難しい状態だと。

おそらく誠慈は本当の実情を演奏で伝えたかったのだろう。

そして、誠慈がまた話を始めた。

「先生僕・・・これが精一杯です・・・やっぱり無理な様です」
みんなで顔を見合わせた、誠慈は腹を括っているのだとその時理解した。
「でも音楽で別な道を見つけてみます」キツパリと誠慈は言い切った。
最初その言葉を聞いた先生は多少驚かれておられたご様子だっけど、暫くして微笑まれ
「そうか、誠慈君解ったよ、良く決意したね」とおっしゃられた。

「先生、雨だれは、ショパンが命名した訳じゃないと自伝に書いてますが、ショパンは、もうすぐ雨が上がるその安らぎを音にしたんじゃないかなと・・・そう感じます」
「僕、そんな心の音楽作れたら良いなって思ってます」
先生は、誠慈のそんな説明を聞きながら、とても喜んでおられた。
「そうだね誠慈君、どんなに激しい雨でも何時かは上がる、雨だれの後には柔らかい日差しが輝くから、ショパンは其れを信じていたのだろうね」

*

先生は、もう八十三歳を超えられた、初めてお会いしてから早いもので八年の歳月が経ち、先生も随分老け込まれた様に見える、幾分寡れておられる感じで何となく、お身体が優れないのかと気をもんでいた。
すると先生が突然思わぬ話を始められた。

「私も、もう歳をとってしまった、何時お迎えが来るか解らない年齢です、だからこれからお話す事は、私の遺言のつもりで聞いて下さい」
「先生、遺言などと縁起でも有りませんよ」彩子が言った。
「まあ、そんなつもりで聞いて欲しいと言う事だよ・・・」
先生がそんなご自分の死を前提に話をなさるなんて不思議な気持ちだったけど、確かに年齢を考えると私達にどうしても伝えたい事が有るのだろうと感じて、私達三人は神妙に先生のお話を聞く事となった。

「ねえ誠慈君、人は何の為に生きると思うかね、いや、十四歳の若者にそんな大それた質問はなんだがね、君なら何の為に生きるかだが・・・」
「・・・」誠慈は首を傾げ、返答に窮して何も応えられなかった。
「哲学者や宗教者の様な答えを求めてはいないよ、君が思う答えで良いんだ」
誠慈はどう応えてよいか迷っていた様だったが、一言だけ「夢の実現・・・」と弱々しい口調で呟いた。

「夢の実現か、なるほど素晴らしい答えじゃないか・・・」

先生は、確かに夢は人間にとって必要で大切な事だと、誠慈の応えに相槌を打たれた。

夢や希望の無い人生は虚しいものだとも語られた、どんな小さな夢でも持ち続ける事が大事な事だとおっしゃられた。

先生もピアニストの夢を追いかけ、一つの段階の夢が達成するとまた次の夢を追い求めて今までやって来た事が良かったのだとおっしゃられ、誠慈の返答に笑顔がこぼれていた。

「とても良い答えだよ誠慈君・・・」

すると今度は、誠慈が先生に質問した。

「じゃ先生は何の為に？」

先生は僅かに頬をゆるませ、語り始めた。

「私はね、人生とは神様から与えられた宿題をこなすステージだと思っているんだよ、そしてどんな宿題をやるにしても根本となる事が愛だと思っている」

人間様々な職業や何らかの活動をする、その活動の目的は全て愛の為だと言われ、その活動を通じて神様が願われる何らかの宿題をこなす事が重要な事なのだとおっしゃられた。

音楽家だけじゃなく野球選手でも学校の先生でも、あらゆる職業が愛を基本にして、神様の宿題をやり遂げる事が人生の目的の一つだとおっしゃられた。

先生の場合は、ピアニストという職業を通じて、多くの人と喜びを分かち合い感動を共有する、その事が、先生に課せられた神様の宿題だと常々思っているそうだ、だから、観衆にどの様に喜びを伝えられるか、また観衆からどんな喜びが返ってくるか、何時もその事を課題にしていると話されていた。

「だから、もし私が死の床に有る時、神様がね、お前の宿題はやり終えたのか？満点とれたのか？と質問された時、出来るならばだが、はい宿題は終了致しました・・・と言える人生を送りたいと思って来たんだよ」

誠慈はずっと黙って先生の話聞いていたが、また先生に質問をした。

「じゃ先生、僕のようにピアニスト諦めたものや、父のように会社の歯車の様にして死んじゃった人とかは、神様の宿題は零点なのですか？」

「誠ちゃん、それは・・・」私がとっさに誠慈の言葉に釘をさそうとして呟いた。

私はその質問が少し意地悪い質問の様に感じていたから。

「お母さん、いいんだよ誠慈君の話も最もな事だからね・・・」

そんな質問をされても、先生は穏やかな姿を崩さず、笑みを浮かべていた。

「零点？そんな事はあり得ないよ、人生に無駄は無い」先生は微笑んで返事された。

「そうだな、君のお父さんの様に、突然人生が終わる人を随分見てきました、平成七年の一月十七日だったが、阪神・淡路大震災って大きな地震があったんだよ。君が幼稚園の頃かな？知っているかな？ その地震は、一夜にして六千人以上もの人が死んでしまった、私の知り合いもその中に居たんだがね、優秀な人物だったよ、大学で科学の研究をしていた、彼の研究論文は世界的にも評価されていた、実に惜しい人物を失った、そんな人がどれ程いただろうかね・・・私は、その日、ニコライ堂でこの人達の冥福をお祈りをしたんだよ」

事故や災害で突然人生を終える人の悲しみ、その家族の悲しみがどうして起こるのか、先生も未だに理解は出来ないとっておられ、神の救いが何故及ばないのかも謎なのだと話されていた。

ただ、生きている人間は、生かされている人間だと先生は語られた。

「生前の彼の研究は、彼が死んで終わった訳では無い、彼の研究を引き継いだ多くの大学生達が、彼の意志を受け継ぎ、今も研究は続いている」

「だからね、生かされている以上は、神様の宿題が与えられている、そして宿題が完了しない場合宿題のバトンを渡す人が現れる、或いは宿題を共に出来る人が生まれる、ということなのだと思う」

そう語られて、先生は聖書の話始めた。

「ヨハネ伝の第十二章二十四節のキリストの言葉に、一粒の麦もし地に落ちて死なずば、ただ一つにてあらん、死なば多くの実を結ぶべし、そんなお話が有るんだが、彼はその一粒の麦になった、だから沢山の身を結ぶ生徒が続いたんだよ」

「なるほど・・・」誠慈は感心して先生の話に聞き入っていた。

その時だった、私の脳裏に以前見た夫の夢が去来していた。

夫のヴァイオリンが樹木に変わり、草原で沢山の葉を付け、その樹木の廻りに小さい草花が咲いていた。そうだ、この事だと私は直感した。

あの時、夢の意味を説こうとしたけど結局解らなかった。それが先生のお話を聞いた途端、夢の意味が説けた様な気持ちになった。

夫は一粒の麦と同じで、夫の樹木で沢山の別な草木が生まれたんだと――

（そうだ、そうだ、そうに違いない）と心の中で呟き先生の話聞いていた。

夫は無駄に死んだのでは無いと、その時感じていた、沢山の種を残し死んだのだと。

そんな思いが沸いていた時、先生のお話はなんとあの歯車の事に及んだ。

「誠慈君のお父さんは、ただのサラリーマンで、歯車に過ぎないと思っているのかな、それはお父さんに失礼な事だと思うな、六本木のプロジェクトでお父さんは大切な歯車の一つになったのだと思うよ」

「例えば、ベートーベンの第九交響曲を聞いてご覧なさい、第一楽章のティンパニ、第三楽章のホルン、第四楽章の声楽、みな歯車の一つに過ぎないが、その歯車の一つ一つがベストを尽くして、それこそ偉大なるハーモニーを完成させて、素晴らしい第九の演奏が完成する、と同じように、お父さんはお父さんの宿題があり、歯車の一つとしてベストを尽くしたから、あんな立派なビルが出来たんじゃないのかね、たった一つの歯車だった、では無くて誰にも代え難い貴重な歯車だったんだよ」

先生のお話はまだまだ続いた。

「ハーモニーは、ドの音だけでは出来ない、ド・ミ・ソが寄り添いながらお互いを尊重しながら一つになった時、美しい音色に変わる、同じように人間も皆それぞれの個性が有る、その個性を尊重しつつ、一つになる時、人間社会も幸せになるし、どんな仕事でも完成出来るんだよ、神様は人生にハーモニーを与えて下さった」

「だからね、自分は自分だけの為に存在してるんじゃないよ、自分はより大きな世界の為に存在し、大きな世界は更に大きな世界の為に存在している、これは、宇宙そして大自然の大原則なんだよ、自分なんか居ても居なくてもどうでも良いなんて考えては絶対に駄目だよ、どんな人間も存在する意味と価値をもっている、生かされている存在だと言うことを忘れちゃ駄目だよ」

先生のお話は、先生の人生観や宗教観的な内容だったけど、私達は皆真剣にお話を聞いていた。誠慈もただじっとして、先生のお話を頷くように聞き入っていた。

その姿を見ていて、誠慈の心が段々解放されて行くように私は感じていた。

「処で話が変わりますが、六月に引退コンサートを開く事にしました」

「えっ引退？先生どうされたんですか？」彩子が驚いて聞いた。

何時もなら先生の予定を彩子自身把握しているのに、今回は何も知らなかった様だ、しかもたった四ヶ月しかない急なスケジュールに啞然とした。

彩子の顔が変わり、そんな馬鹿など言わんばかりの顔つきになっていた。

「それで、どちらで演奏なさるんですか？」

「私が何度も演奏してきた、東京文化会館だよ」

東京文化会館と言えば、私達が初めてお会いした、あのホール。

「このコンサートが、私の最後のステージにしようと決めました」

「ええ、先生最後って、まだ十分演奏は可能ではないですか？」

また彩子が驚いて質問した。

「いや、もう歳だからね・・・」

「お歳って、そんな・・・」また彩子が言った。

「先生、引退等お考えにならないで下さい、まだまだです」私が気をもんで言った。

「ははは・・・」先生は困惑顔をしながら笑われていた。

でも先生の決意は固かった様だ。

引退などしないで下さいと三人が頼み込んでも、決めたからの一点張りで先生が何故そんなに頑なに引退を決めたのかが理解出来なかった。

六月に行うコンサートが公の場での最後の演奏となるそうだ。

「其れで、そのコンサートだが、ベートーベンのピアノ協奏曲五番と何曲かソナタを演奏する事にしようと思うのだよ、東西フィルの上野君が手伝ってくれる事になってね」

「誠慈君、だからね、必ず其処に来て下さい、ご招待者としてね」

「有り難うございます先生」誠慈は心から恐縮していた。

何故、先生は誠慈を招待し、ベートーベンの曲を演奏するのかを、お話しされた。

先生にとってベートーベンは特別な存在だという、月光が大学で初めて大衆の前で演奏した曲だった。先生がピアニストとしてデビューする切っ掛けの曲になった。

そして、あのパリでの自殺未遂時、ベートーベンの遺書を読んで勇気づけられ、ピアニストの道を諦めず歩み始められた。その時何度も何度も練習したのが悲愴ソナタだった。

ベートーベンのソナタこそ、先生の心を映し出す鏡の様だとも語られた。

協奏曲第五番は、先生が何度も演奏された曲で、先生が一番好きな曲の一つだった。

先生は、ベートーベンは勿論、ショパンやリストの演奏を得意とされていた。

レコードの録音も多数残されていて、CDの時代になってその名盤が何枚も再販されて沢山のファンが居る。最後に先生が演奏なさる曲は全て思い出の曲で締めくくりたいと、お話しされた。

ベートーベンが自殺を思い留めた最大の理由が芸術の為、その結果が一粒の麦から沢山の実が育つようにベートーベンの芸術が後の音楽家を育てて行った。リストもブラームスもワーグナーも皆ベートーベンの芸術の探求故に彼らも偉大な作曲家になれたと言っても良い、その様な影響を受けた音楽家の一人が神山先生自身だった事等、先生のお話は長時間続いた。

「絶望や失望を味わった人間にこそ不思議な能力や恵みが与えられる事がある、ベートーベンだって聴覚を失いショパンだって病弱だった。だがその絶望の状況で最高の音楽が生まれた、神を呪ったり恨んだりせずに逆境の中に神の愛を見出したのだろうと思う」

神山先生は誠慈が立ち直る為に一心不乱にお話を続けたと言っても良い程だった。

「だからこのリサイタルが、君の宿題を探す切っ掛けにしてもらいたい、悲しい現実を考えていただけでは、何も生まれはしないよ、じっと我慢していても何も変わらない、人生我慢だけじゃ変わらない、何かをつかむために動いてみないと、君の宿題はまだ始まったばかりだからね」

先生の固い決意を聞いていた彩子も私も、そして誠慈も引退される事がとても正直ショックで溜まらなかったけど先生の気持ちは硬く、それ以上私達は何も言うことが出来なかった。

先生のお話が終わると先生は別な部屋に独り入っていかれ、数分後片手に本を握りしめて入って来られた。

その本は紙が変色して、見るからにかなり年期もので表題文字はBEETHOVENと書かれベートーベンの似顔絵がすり切れる様に載っていた。

「誠慈君、この本だが君にプレゼントしよう、かなり古い本ですが、例のベートーベンの遺書が載っている本だよ、日本語では無いので実際に読むのは難しいがね」
何とあのベートーベンの遺書が書いてある先生の宝物だった、先生は留学中にこの本を独学で翻訳されたそうで、本のあちらこちらに日本語のメモ書きが残っていた。

「ええ！」私も誠慈も絶句した。

「先生、これ、あの思い出の・・・」誠慈は驚きの声を上げた。

「これは先生の宝物じゃないですか・・・」私も驚いて言った。

「そうだよ、昔パリ音楽院の先生から渡されたものだが、今度は、私から誠慈君に渡す番だと感じてね」と言われて先生はニッコリと微笑んだ。

「渡すに及んで、誠慈君に言いたいのだが、今度は誠慈君が君自身の宿題を探す番だから、其れを忘れないで、これから精一杯生きて行ってほしい」

「有り難うございます、先生のお気持ち忘れず頑張ります」誠慈がお礼を言った。

誠慈に対する愛情がひしひしと感じられて、私の目頭が熱くなっていた。

先生のお話は、一時間以上にも及んでいた。

今日呼ばれた理由の一つが、あの本を手渡す事だったそうで、先生は私達が訪問するずっと以前から誠慈に本を手渡す気持ちで居られた様だった。

其れにしても先生は、今日でお別れするような感じで色々と話をして下さった。

遺言のつもりで聞いて欲しい等、今までそんな事を口にされなかったのにどうして先生はそんな言葉を言ったのだろうと後からも疑問が残っていた。

玄関を出る時、先生は名残惜しそうに私達を見つめ手を振って下さった。

理由は分からないけど、何か先生と本当にお別れしてしまう様な寂しさが込み上げ、私独り涙が溢れてしまった。

自宅に戻ってからも、何となく先生のご様子が気になっていた。

「ねえ母さん」

「何」

「先生には本当に良くして貰ったけど、何で大切な本まで僕にくれたんだろう」

本を頂いた事は、有り難い事だけど、私も何で其処までされたんだろうと疑問が有った。

「先生は、其れだけ誠ちゃんが大好きなのよ」

「それは嬉しいけど、先生も随分沢山の人と交流して来たから、僕なんかにあんな大切な本をくれるなんて、申し訳無くて・・・、僕は先生に何もしていないよ」

本当に誠慈が言う通りだと感じた、申し訳無い気持ちだった。

「確かに今日の先生は、何時もと違う感じだったよね」

「だろう、何か変だった」

其れにしても、私達の様な不足な者を愛して下さる先生には、本当に頭が下がる思いだ。

「まさか・・・」私が呟いた。

「どうしたの母さん、何？」

「うん、良いの」

「そう」

私は何だか先生がご病気にでもなっているのかと、案じた。ただ、誠慈にそう話せば、色々詮索して気をもむかも知れないので、話を止めた。そして話題を変えた。

「誠ちゃん、お父さんが好きだったブラームスでも聴こうか、なんかブラームス聴きたくなっちゃった」

「うん、神山先生のピアノソナタが良いな」

気持ちを切り替えて、神山先生のCDを聴く事にした。

ブラームス・ピアノソナタ第三番 ヘ短調 を用意した。

「父さんは、この第二楽章が好きだったね」誠慈が思い出深く話し始めた。

「そうね、何度同じ処掛けてたかね」

「何回も掛けるから、もういい加減にしてよって僕が言ったら、父さんが膨れっ面してさ子供みたいだった、可笑しかったな」

「そうそう、お父さん第二楽章だけリピートさせて、何回も何回も聞いて、静かにしろって怒られたっけ」

夫は、ブラームスの柔らかく優しいロマンチックなメロディーの虜だった。

———ねえ美沙、この曲、恋人が銀河鉄道にでも乗ってき、天の川の星でも掴みに行くそんな演奏に聞こえるのが凄いだろう。———夫がそう言っていた。

夫は、第二楽章の場面を夜空を眺めながら聴いていた。

夫が言うように、確かに夜空の風景と、第二楽章の音色は不思議にマッチしていた。

ブラームスは、この曲を作曲する際、ドイツの詩人シュテルナウの『若い恋』という詩を添えている。

———夕暮れに月は輝き

———愛し合う二人の心は結ばれ、抱き合う

夫が言っていた様に、ロマンチックな曲、神山先生の演奏がさらにその深みを奏でている。

「其れにしても、神山先生の演奏は素敵よね」

「そうだね、先生の演奏は、愛情と優しさが溢れて居るんだよね」
私は誠慈にそんな愛情と優しさに溢れる人になってと言った。神山先生のご恩に答えるには、其れが一番だと。

2

二〇〇三年四月二十五日、二千年から着工していた六本木の再開発ビルが漸く完成し、テレビは連日、その話題で持ちきりだった。

この工事には毎日一万人の工事関係者が従事したそう。

I T関連の企業が入ったビル、美術館、テレビ局、ホテル、シネマ、ショップ、ブテック、レストランそしてマンション、なんという規模なのだろう、その開発がテレビで紹介されていた。

こんなにも凄い規模の建設に夫が携わっていたなんて、良く解らなかった。

いや、あまり知ろうとしなかった私が悪かった。

今になって夫があんなに毎晩遅くなっていた理由が分かった気がした。

「日本男児として、日本の未来の大きなプロジェクトに関わった以上は、多少家庭が犠牲になるのは止む終えないよ」夫は昔そんな事を言っていた。私はふくれっ面して文句を言ったけど、今思えば夫に悪い事を言ってしまったと、とても後悔している。

「ねえ母さん、父さんのやった六本木のビル凄い人気だね」

テレビを見ながら誠慈が話してきた。

「そうよね、テレビ、大騒ぎよね」

夫が居たら、どんなに興奮して喜んで居ただろう、この日のために頑張ってたのだから。

「父さんの仕事、やっぱり凄いや、見てよあの人」

テレビを見ている誠慈が夫の代わりをしている様に、興奮していた。

「ねえ、母さん、今度母さんとあそこに行ってみようよ」

「ええ、あそこに」

「そうだよ、父さんが居たら絶対連れて行ってくれるよ、鼻高々にね」

「そうかも知れないね、お父さん誠慈が言うように、夢中で説明しただろうね」

そう言いながら、夫の居ない今がやはり寂しく、湯鬱な気分だった。

人生は本当に解らない、夫の様に真面目に生きて、家族の為に頑張るそんな人が、先に亡くなるなんて、其れが運命だとすれば、人間の運命は非情で、理解しがたいものだと痛感する、何故人は運命に翻弄されるのだろうか？

ただ神山先生とお会いしなかったら、その運命を呪い、夫の死は虚しさだけが残っていたかもしれない。

先生がおっしゃられた様に、夫は、ただの歯車では無く素晴らしい歯車だった事を、ニュースを見ていて実感もする。

夫は夫なりの宿題を精一杯こなして、沢山の人々に何らかの影響を与えて旅立ったんだと。

そう考えると、私と誠慈が神山先生に出会った事は偶然では無く、意味の有る出会いだったのだろう、それは、何かに導かれて出会ったのかも知れないと思う。

宿命や運命が人に定められているのなら、悲しい運命だけでは無く、有り難く人に必要な運命の出会いも有るのでは無いだろうか？

だから、神山先生との出会いは、その有り難い出会いだったに違いない。

「誠ちゃん、今度必ず行くわよ」

「そう、母さん行こうよ」

私は、運命に翻弄され、萎えるのでは無く、その運命の中で道を見つける事を心に決めて再び歩み始めていた。

*

六月下旬、もうすぐ先生の引退コンサートが始まる頃、夫の一年忌となり、誠慈と共にお墓参りに行く事にした。

時が過ぎるのは本当に早いもので、もうあれから一年、誠慈の病気の看病も有ったためか、あっという間にこの期間が過ぎた気がする。

夫との別れが、まだ昨日の事のように感じてならない、この一年は苦しみと涙の一年だった。夫の一年忌に神山先生の引退コンサートが重なるなんて、何だか偶然では無い気がしてきた。

お墓の前に到着し誠慈と二人でお線香を焚き、お花を飾りお墓に水を注いだ。

「あなた、元気ですか？」見えない夫にそう言った。

あの世からの声が聞こえたらどんなに良いか・・・夫の声を聞いてみたい――

誠慈はじっと目を閉じ、両手を合わせお祈りしていた。

誠慈の顔を見てみると、閉じた目から大粒の涙がぽとりぽとりと流れ落ちていた。

本当に信じられない事、悔しくて辛い事、お墓を見ていて、虚しい気持ちになっていた。

でも此が現実、もう時間は取り戻せない誠慈と二人で生きて行くしか道は無いのだから。

「誠ちゃん、お父さんに何て報告したの？」

「うん、ほら、神山先生の手紙・・・お父さん大丈夫だからと報告しなさいって書いてたろう、僕、その事思い出して、先生が言うように、父さん大丈夫だから安心してって言ったんだ」

「そう・・・そうなの・・・」

誠慈もこの一年で随分成長した様だ、病院での躁鬱状態の頃は本当に辛い毎日だったけど、今は大分安定して、鬱的な症状はすっかり見れなくなった、神山先生の助言が大きく彼を変えさせ、一回り心も大きくなった様を感じる。

私もそんな誠慈の姿を亡き夫の墓前で静かに報告をし、夫に感謝をしていた。

3

六月二十九日、日曜日、神山先生の引退コンサートの日になった。

夫と誠慈と三人でこの東京文化会館に初めて来たのが昨日の事に様に思い出される。

あの日は透き通る程の青空だった。まだ誠慈が小学一年で私と夫の間に手を繋ぎ、文化会館の階段をぴょんぴょんと誠慈をぶら下げて昇った。あれからもうすぐ十年になろうとしている、十年一昔とは言うけど随分事情が変わって仕舞ったものだ。

愛する夫は居ない、先生は引退、誠慈は病気、人生とは諸行無常、本当にその事を痛感する。

今日は、誠慈と彩子の三人で招待席の椅子に腰掛けた。

私の隣の席の名札には、中村先生の名前が有った。まだ中村先生はお見えになっておられない、もしかすると楽屋に居られるのかも知れないと思った。

招待席を見ると其処にはテレビに出演す

るような有名なピアニスト、芸能人などが居られた、一般民間人は私達三人くらいなもので、私達は先生に特別に愛された事を実感していた。其れにしても、先生の交友の広さには驚かされる、テレビや雑誌で音楽の評論をする有名人や、クラシック界のスターが来賓席に何人も座っていた。

有名人を直ぐ側で見るなんて過去に経験した事が無かった私は、招待席や館内を物珍しそうにジロジロ見つめていると、中村先生が小走りに入ってこられた。

「あっ、先生こちらですよ」私が手を振りながら先生に声を掛けた。

「こんにちは・・・」あの優しい顔がさらに優しくなられた。

中村先生はやはり楽屋で、神山先生とお話をしておられたそうだ、私の感も満更ではない。

「誠慈君、良く来たね元気そうね、良かった」

中村先生が誠慈を見つめ微笑んでおっしゃった。

「こんにちは先生・・・あの一、色々済みません」

音楽教室に通わないでいた誠慈は、ここの処先生と会う機会が少なかったので、何となく気まず

そうに、ご挨拶をした。

「何言ってるの、元気が一番だから、何より何より・・・」

「ねえ、誠慈君、神山先生今楽屋でお話してたら、誠慈君来てるかなあって言っておられたわよ、先生は誠慈君が大好きなのね」

誠慈は照れ笑いを浮かべた。

席に座りながら中村先生に近況を報告し、先日神山先生から本をプレゼントされた事をお話して、神山先生が今日の事を気にさせている理由をお伝えした。

「なるほど、そうだったの、さすがは先生だわね」中村先生が感心していた

。

*

いよいよ先生の最後となるコンサートが始まった、第一部プログラムは、先生だけのソロ演奏になる。

館内の照明が消えて、ステージだけが輝きを増した、その時ステージ袖にスポットライトが当たり、先生がゆっくりと歩いて入られた。

神山先生が登場すると、館内に大きな拍手が鳴り響き、何人ものお客が立ち上がった。

演奏前にお客が立ち上がるのは珍しい事、最後のコンサートと言うことでたまたま立ち上がった方が居たのだろうけど、それだけ先生の演奏を愛している証に感じられた。

大拍手が鳴り止み、先生はゆっくりと椅子に腰を掛けられた。

私も会場のお客も、息をのんで最初のピアノタッチを見つめた。

ショパン 幻想即興曲嬰ハ短調

夜想曲変ホ長調 二曲続けてショパンの曲を演奏された。

静けさの中で、澄み切ったピアノ音が木霊する、ショパンのロマンチズムと先生の優しさが融合して館内に愛の調べが響く、私達の心は幸せな気持ちに包まれた。

続いては、ベートーベンのピアノソナタ、再び静けさを表現する曲から入られた。

ピアノソナタ第十四番月光だった。何故この曲を演奏するか私は知っている、先生のデビュー曲なのだから。

そして第一部最後の演奏曲は、ベートーベン、ピアノソナタ第八番悲愴だった。

お辛い時に必死で練習し先生がピアニストとして生きる決意をされた思い出の曲だったとおっしゃられていた曲だ。

第一部で先生がお選びになった四曲は、何処か寂しい曲ばかりで、どうしても涙が出て来て止められ無かった。

先生の演奏は、晩年のアルトゥール・ルービンシュタインに似ている、音符を奏でる正確さ緻

密さは蓄積された修練の賜で抜群のテクニックを持っておられる、でもそれだけじゃなくて、人生の紆余曲折を歩まれた人間としての深みが、演奏に深い情緒性と音に深みを与えている。

どんなに頑張っても私には到底出せない音色を奏でる先生の演奏は本当に魅力がある。八十代のピアニストが此処まで素晴らしく演奏出来るのだから脱帽もの、でも何でこんなに素晴らしい演奏が出来るのに、今日で最後なのだろうか？とても気になって仕方がなかった。

第一部は終了した。

十五分休憩後、ステージがざわつき始めた。東西フィルメンバーが、入場してきたからだ。第二部は、東西フィルハーモニー管弦楽団と競演するベートーベン・ピアノ協奏曲第五番。この曲は、後の人が、皇帝と名付ける程格調高いピアノ協奏曲で、その言葉の如く数あるピアノ協奏曲の中でも最高傑作の一つと言われている。ピアニストにとっては憧れの協奏曲だけど、演奏が高度なテクニックを要求されるため、中々演奏を聴くことが出来ない大曲でもある。

いよいよ、先生最後の演奏が始まる。東西フィルのメンバーが神妙な顔つきで先生の登場を待っていた。ザーと言う、雨が降るような拍手が鳴り響いた。先生が再び登場され、先生の指がピアノの上にそっとのった。

東西フィル、指揮者上野達彦の腕が上がり、弦楽器、管楽器、打楽器が一斉にその雄大なメロディーを奏で、その直後ピアノが独奏し気高き物語の始まりを告げていた。雄大で荘厳な第一楽章、伝統的な協奏曲スタイルは、オーケストラが提示部を演奏してからピアノ演奏になるけど、皇帝は、恒例の協奏曲に反していきなりピアノ独奏で始まる。神山先生の見事なピアノタッチが、悠然と鳴り響き、まさに気高き王が登場するかの演奏だ。東西フィルの演奏と神山先生のピアノは実に素晴らしハーモニーとなって、その格調高き響きが文化会館全体を包んでいた。

第二楽章になると、曲のイメージは大きく変化して、穏やかでロマンチックな旋律へと変わる。神山先生のロマンチックな演奏は、第一楽章の男性的で雄大な演奏から一転して優しく穏やかで女性的な演奏に変わった。

——何て情の深い演奏なんだろう、楽章の最初から最後まで愛が貫く様に。楽章の後半部、フルートとピアノが重なり合うようにして演奏する姿は、まるで愛を語り合う夫婦の様に、美しい旋律。

そうだ皇帝の様な勇敢な人物が美しい愛する人と愛を語り合う場面なのかも知れない。ゆっくりゆっくり、一音一音丁寧にタッチして行く先生の演奏を聞いていると自然に涙が溢れ、

私の頬が濡れていった。

第三楽章は、再び雄大な演奏に変わり、メロディーはエンディングに向かって更に雄大な音を奏でて行く、ピアノの音色も勇ましく力強く、皇帝の名の如く偉大な音を増していった。先生の演奏は激しさを伴って響いていた。

ベートーベンが貴重な歯車の一つに使ったティンパニが最後にピアノと共に伴奏する中、ピアノが静まり行く部分は、何故か人生を終演させていく姿に重ね合わせの気持ちになった。

このピアノ協奏曲は、独りの勇敢な人物の人生を歌い上げた曲なのかも知れない、もしかするとベートーベン自身の人生を表現しているのかも。

ピアノと管弦楽団は最高に崇高なハーモニーを奏で、完璧とも言える演奏で終了した。

「ブラボー、ブラボー」

館内に歓喜の声が響き渡り、割れんばかりの拍手も鳴り止まなかった。

先生は最後まで最高の演奏をし続けられた。

かなり大変な演奏だったにも関わらず、先生は生涯続けてきた全てを出し切るそんな基準で演奏なされていた。

最後のステージ演奏は終焉となった――

館内の全ての人々が総立ちとなり、リクエストを期待して拍手は何分も続いていた。

今までなら必ずリクエストにお答えなされておられたのに、最後はリクエスト曲を演奏される事無く終了された、先生も精魂全て注ぎ込んで、リクエストの曲も弾けないほど、かなりお疲れなのだろうと私は思っていた。

会場の拍手が鳴り止まない時、先生はステージの中央に再び登場され、マイクを持ちご挨拶をされた、

上野指揮者と東西フィルのメンバーに賛辞を贈り、来賓の方と会場のお客にお礼をされて、最後のスピーチをされた。

「私の最後のコンサートにお出で頂き、誠に有り難うございました、今日で私は引退致しますが、皆様の心にお届けした音楽に引退はございません、此からも永遠に音楽を愛して下さい、本当に本当に、有り難うございました」

芸能人の女の子が二人壇上に上がり先生に花束を手渡すと、再び館内に拍手が鳴り響いた。

「さようなら・・・」

先生のスピーチは、ほんの数分だった、そして会場に向かい深々とお辞儀をされステージから去って行かれた。

私も、彩子も誠慈も、中村先生も皆、泣いていた。

「先生有り難うございました・・・」皆そんな気持ちで、泣きながら拍手をしていた。

*

その後、中村先生も含め四人して、楽屋に急ぎ向かってみた。

処が楽屋の中に先生の姿は無かった、演奏終了して僅か二十分なのに先生が居られないなんて不思議な事だった。たった二十分も楽屋に居られないなど普通は考えられない事なので、お気分でも悪くなされたのかと気をもんでいた。

楽屋には数人の関係者と菜都美さんだけが居られ、私達以外に楽屋に来られたファンの方達に先生に代わり菜都美さんが、ご挨拶をしておられた。

「あいにく先生はお疲れの為、すでに帰宅致しました、済みません」

そんな言葉が聞こえた。

やはり先生は精魂尽き果てるまで演奏され、帰宅されたんだと私は思っていた。

でも、何だか変だと私は感じた。先生がそんな行動をされるなんて、不可解だった。

考えられない出来事と思っていた。

すると、菜都美さんが、私達の姿を見るなり近寄って来られ、「ちょっといいですか？」と声を掛けて来られた。

私達は、誰も居ない隣の部屋に通された。

先生は、私達が楽屋に必ず来ると言っておられたそうで、菜都美さんは私達が来るのを待っておられた様だった。

「皆様、実は父から皆様にだけ特別お話しして下さいと言われたので、こちらに」

私達四人、別な個室で菜都美さんから信じられない言葉を聞いた。

突然、特別なお話なんて言われて、私はとても不安になった。

何だろう、心臓の鼓動が高鳴り、とても不安な気分になった。

「実は・・・」

実は何だろう、お嬢様のお顔が幾分悲しげになった。

「父は今し方入院の為、病院に向かいました」

「ええ・・・」四人全員絶句した。

「入院ってそんな、先ほどまであれほどの演奏されたのに、どうして・・・」中村先生が驚きの声を上げた。

「先生具合悪くなったのですか？」彩子が聞いた。

「いいえ」菜都美さんが首を横に振った。

「此も全て父のスケジュール通りなんです」

「スケジュール？」

私達は、何事が起こっているのか理解出来ず、戸惑うばかりだった。

そして、お嬢様から信じられないお話を聞いた。

先生は、半年前程体調が思わしくなく、突然下血して病院で診察を受けたそうだ。診察の結果は、大腸癌、しかも進行性で悪性、大腸だけでなく他の臓器にも癌の転移が見られたと言う、その際、先生は主治医に全てを打ち明けて欲しいと懇願した様で、主治医が癌の状態を説明したそうだ。

主治医の判断では、緊急手術が必要で、大腸を大きく切除すべきだと言う、ただ他にも転移があるので、その全てを摘出する必要が有るが、かなり難しい手術になると説明された。

その際先生は、手術した場合の生存率や延命期間まで事細かに聞いたそうで、例え手術が成功しても余命は余りなくあと数年の命で、手術しなければここ一年で大変な事態になるので一日も早く手術をすべきだと、主治医は言った様だ。

ところが先生は、やるべき事が残されていると言い、その後に手術をしたいと強く主治医に言った。

先に手術を受けて居れば延命する可能性が高い、しかしそうなれば二度と演奏は出来ないし、私達が二月自宅に尋ねた頃にはすでに病院で生活をしていたはずで、間違いなくピアノを弾くことさえ難し状況になっていた。

それ故先生はあえて寿命が短くなったとしても、最後の演奏を行って人生を全うしたいと主治医に話された様だ。

癌と宣告されてから、先生は東西フィルメンバーと急ぎコンサートのスケジュール調整に動かされたそうで、全ては内密に事が運んだ。

先生が癌だと言うことを知っていたのは、東西フィルの上野指揮者と先生のご家族だけだった。先生の具合が悪い事を誰にも解らない内に全てを準備されたそうで、彩子も解らない程に急いでお決めになったという訳だった。

いずれにしても先生の余命が、ほんの少しだと言う事がとても衝撃だった。先日遺言等と不思議な言葉をおっしゃられた意味がハッキリと理解できた。先生はすでにご自分の死を覚悟された故に、あの本もプレゼントして下さったし、このコンサートも企画されたのだ、先生は人生の最後に神様の宿題を大急ぎで仕上げる事を決めたのだと感じた。

何と手術は四日後に予定されていると言う、「全て予定通り」と菜都美さんが言われた様に、ギリギリまで先生は無理をされていた。東西フィルとのリハーサル時も、何度か体調を崩されたとか、それでもリハーサルは続けられたそうで、本番で全てを出し切る為に万全の練習を積んで居られたそうである。

先生は、このお話を菜都美さんに託して入院された。楽屋にお客が来ると、先生の具合の悪さが解る事や、全てに対応して病院に行けなくなるので、先生は誰にも迷惑掛けない為に、演奏終了直後静かに会館を出られた様だった。文化会館を出られる際、先生はお見舞いには急ぎ来ないで下さいとだけ言われたそうで、私達が

動揺しない様にと気遣いされた。

4

先生が入院され、四日後に無事大腸摘出手術をされた。
とても心配だったけど、先生からの伝言を守り、直ぐに病院へ駆けつけなかった。
手術後十日程経ってから、彩子と私と誠慈三人で、お見舞いに出向いてみた。
随分時間が経ってからのお見舞いだったので、先生の言いつけとは言え何だか後ろめたい気分だった。

病室に入ってみると、先生は静かに寝ておられ、丁度その日は、菜都美さんが看病に来ておられて、私達が尋ねた事を先生に伝えて下さった。

「お父さん、村土さんと早乙女さん見えられましたわ」
菜都美さんが静かにお声をかけられた。

先生は、うっすらと目を開け私達を見ると、にっこり微笑み、お顔を揺らされた。

先生は、まだ手術した患部に痛みが有り横になったままでお話をされた。

「いや、よく来てくれました、有り難う」

先生の腕には三種類の点滴と背中に麻酔薬が投与されていて、酸素マスクも直ぐ脇に準備され病気の重さを痛感する雰囲気があり、とても痛々しそうだった。

半月前に素晴らしい演奏をされたとは思えない程、先生のお顔は寝れてお疲れの症状だった。私も彩子も言葉が出にくい雰囲気、病室は静まりかえっていた。

「誠慈君、わざわざお見舞い有り難うね」先生が誠慈を見つめゆっくりと話をされた。

「先生、この前のコンサート、素晴らしかったです」誠慈がお礼しながら言った。

「私もあのコンサートやって良かったよ」

「そうですね、やって良かったですね」また誠慈が返事した。

「君の将来に何かプラスになれば、私も満足だよ」

誠慈は、先生に深々と頭を下げ、このご恩は一生忘れませんと話していた。

誠慈は、先生に此から色々研究して何か目標立てて頑張ると約束していた。

「先生」

「何だね誠慈君」

「神様、先生の宿題満点って言っているでしょうね・・・」

「どうかね・・・満点なら良いが」

「いや、絶対満点ですよ、先生は凄い」

「嬉しいな、誠慈君にそう言ってもらって」

「いや、僕が言っているじゃなくて、神様ですよ・・・」

ハハハ・・・二人は笑いあっていた。

うう・・・先生が顔を顰めた。

「先生どうされました？」私が驚いて聞いた。

「いや、笑うと患部が動いて痛い・・・」先生は苦笑いを浮かべた。

「誠ちゃん、先生笑わせたら駄目よ」私が冗談ぽく言った。

ハハハ・・・みんなで笑った。

あんなに嬉しそうに話をする誠慈を見たのは何年ぶりだろう、誠慈と先生はまるで祖父と孫が楽しく歓談している様に見えた、先生には孫が四人いるそうだが、九州や米国に移住していて、何年も合うことがなかったとおっしゃった。

だから、誠慈を孫の様に可愛がって下さったのだろう。

誠慈もきっと先生に恩返しのつもりで、精一杯の笑顔でお話をしたのだろう。

大腸摘出手術の経過は良かった。ただ、すでに癌の転移は進んで居る様で予断は許せない。ご高齢の為、体力もかなり使い果たし身体を動かすのも漸く出来る状態で、私達と会話をしていても、殆ど身体は動かさないで居られた。

三十分位、病室に居ただけでも先生はかなりお辛そうだった。

「其れでは先生また参ります」

「どうも有り難う」先生はベットで全く動くことなく私達を見送った。

私達は深々と頭を下げてご挨拶をして病室を後にした。

先生のご様態が決して良くないので私達も心配だった。

あんな状態で快復出来るのだろうか？兎に角心配でたまらない、先生には一日でも長生きして欲しいので、その日から毎日先生の事が気になって仕方がなかった。

其れから、また半月後、再びお見舞いに出かけてみた。

入院されてほぼ一ヶ月、先生のお身体も大分良くなっておられるだろうと信じつつ病室に入ったけど、残念ながらその思いは直ぐに打ち消されてしまった。

やはりご高齢の為に、かなり体力が無くなって、すっかりやせ細っておられ、まるで別人を見ている様なお姿だった。

寝たきりの状態から漸く歩き始めたばかりで、その動きは本当に大変そうだった。

ピアニストとして矍鑠としてステージに立たれたお姿の影すら見る事が出来ない程、寡れたお顔で、しかも患部がまだ痛いので猫背の様にして、ゆっくりゆっくり歩かれておられ、そのお姿を見ていて私は目頭が熱くなってしまった。

抗ガン剤を投与されているのだろうか？先生の髪の毛は全て白髪となり、幾分抜けている感じもした。

私は（先生頑張って下さい）と心の中で呟きながら先生をじっと見つめた。

退院はいつ頃可能かと質問してみると、当面は無理だとの返事が返ってきた。

「癌治療を行うのでね、退院はかなり先の様だね」先生が、か細いお声でそう言われた。

先生は寿命を縮めてでもあのコンサートに全てを投入されたので、その反動とも言えるほど、身体がボロボロになってしまっていた。

でも、病気を隠してまでコンサートを開かれた先生のご判断は正しかったのだろう、もし先に手術していたら、あのコンサートはやはり無理だったと思うから。

其れから、毎月二回お見舞いに伺った。

病状を看護師に尋ねてみたけど、個人情報保護の観点で詳しい説明は身内以外には出来ないと言うので、先生の病状は詳しく解らなかつた。

ただ、様態は決して良いわけでは無いことは確かで、この先、先生がどの位生きていけるのかは不明だった、手術が遅かった事で、あと一年大丈夫だろうか？と言う感じで見ている。菜都美さんの話を聞けば、大腸癌は摘出した為問題無いが他の内臓に癌が転移していてその癌を死滅させるため癌治療をしているそうで、その治療で痛みが伴うそうだ。

先生は我慢強く、痛くて顔を顰めても「痛い」とは滅多に言わないそうで、そのお姿を見ている菜都美さんの方がお辛くなる程だという。

身体全体に生じる激痛そして頭痛と吐き気が先生を悩ませ続けていた。

やはり手術が遅くなった事で、癌は進んで仕舞っていた、ハッキリ言えばやはり手遅れだった。

放射線治療を行った事で、様々な副作用にも悩まされて居られた。

何より体力が回復しない、先生の体重は激減してすっかりやせ細られておられた。

つくづく引退コンサートをされて良かったと感じる、あのまま手術していたとしたら、おそらくピアノは弾けなかったに違いない。先生の判断は正しかったと思うけど、先生の具合と天秤に掛ける訳にはいかない事を思うと複雑な心境になる。

私達は頻繁にお見舞いに出かけたけど、伺う度に先生のご様子が悪くなる感じで、とても心配でならなかつた。

ある日、急に私の母が家に来た。

「誠ちゃん、元気」

「誠慈は元気だけど、どうしたのお母さん、随分突然ね」

母は埼玉県に住んでいて、私が実家に行くことが有っても、母が訪ねてくるのはまれだった。

「今日はね、縁談の事で来たのよ」

「縁談？・・・いくら何でもそれは」

母が未亡人になった私の事で、縁談話を持ってきたと勘違いして、私は膨れっ面をした。

「馬鹿だね、母親だからって、そんな急な縁談持ってくる訳ないだろう」

母は笑っていた。

「なんだ、じゃ誰の縁談なの」

「いやね、彩子さんになんだよ」

「彩子に？」驚いた声を上げた。

「彩子さん、お付き合いしてる人いるかね？」

「居ないと思うよ、男嫌いみたいだし」

「そう、それじゃ話だけでも・・・」

私は、彩子が何故独身のキャリアウーマンなのかを母に話をした。

結婚なんてとてもしないだろう、ましてお見合いなんかする訳がないだろうと言った。

「でも、此ばかりは縁のものだからね」母は話を聞いても、決めつけられない方がよいよとばかり、私に縁談話を勧めて欲しいと言ってきた。

お相手の人は、東京都内の大手銀行に勤めていて、母の同級生菅原美智子さんの息子さんだった。

母の話では、とても真面目な好青年なのに、三十過ぎてもまだ独身らしく、同級生のお母さんも気をもんでいるとの事だった。

「年齢もほぼ同じだし、真面目な良い方なの、なんで結婚しないか不思議な程よ」

風呂敷に包んだお相手の写真を見せて貰ったけど、確かに真面目そうで、眼鏡を掛けたインテリという感じだった。

「母さんからの頼みだと言って、お見合いしてくれる様に、話してくれない」

「まあ」

私は、駄目元で話をする事にした。

その日、電話で彩子に事情を話し、お見合いの件を思い切って切り出した。

「ね、母さんのお願い聞いてくれない・・・」

電話口で困っている雰囲気だったけど、彩子は意外な返事をしてきた。

「美沙、美沙のお母さんには、色々お世話になっているから、ここはお母さんの顔を立てて、お見合いするよ」

彩子は、誠慈の入院夫の葬儀など、この間母と何かと交流をしてきた、大学時代から彩子は母を知っていて、彩子から見ても母親がもう一人いる様な感じだったのかも知れない。

「ホント！、あー良かった、此で母も安心するわ」

「ちょっと、まだお見合いだけするのよ、結婚する話じゃないから・・・」

「解ってるって、でも写真見る限り良い男よ」

「そんな・・・ハハハ」彩子は電話口で大笑いしていた。

「お母さん、彩子OKだって」

「まあ、それは良かった、美智子さんに直ぐ連絡しなくちゃね」

其れから、二週間後、彩子はお見合いをした。

私と、母と彩子、先方のお母さんと息子さんの五人で紀尾井町のホテルニューオータニで食事をする事になった。

彩子のお相手は、菅原信治さんと言い、写真よりも、もっと清潔感が有り真面目そうな人だった。初めの一時間だけ、みんなで食事をして、その後彩子と菅原さん二人だけにして、その場を離れた。

人はやはり運命の出会いが有るのだろう、其れからあんなに男の人は駄目だとか言っていた彩子が、菅原さんとは自然にお付き合いをする様になっていった。

*

「ねえ、彩子、その後彼とはどうなの」

その年の晩秋、彩子にどうしてるか聞いてみた。

「うん、結婚前提にお付き合いしてる」

「ええ、結婚前提に？」

人は変われば変わるものだ、あんなに結婚は駄目だとか何とか言っていた彩子の口から結婚の話が出るのだから。

彩子は何故結婚する気持ちになったのか不思議だった私は、色々と聞き出した。

お相手が気に入った事は勿論なのだが、私の夫の死と神山先生のお話が一因だったようだ。

人は何のために生まれたのか？、彩子は私の夫の死がかなりショックで、考えさせられたと言う。そして神山先生が言っていた、人生の宿題についても考えていたそうだ。

男の人は、仕事を通じて人生の宿題を行う事が出来るだろうし、家族の為に頑張る事も宿題の一つかも知れない、でも女性は仕事を人生の宿題にするのは、いささか無理があると言った。

「乳房や子宮が有るって事はさ、やっぱり子供生むのが宿題なのかなって思ったのよ、第一、乳房や子宮って自分の為には有る訳じゃないものね、みんな子供のためだもの」
女性は、子供を身ごもり育てる様に、そんな身体になっていると、思ったそうさ。
しかも子供を生まない母乳は出来ないなんて神秘的だと言った。

「そうよ、私も誠慈を生んだ時に、おっぱいが出たのに感動したもの」
昔辞書で読んだけど、授乳の際分泌されるホルモンには母親をリラックスさせる効果があって、育児に対しても前向きな気分を感じさせるそうで、私も誠慈におっぱいをあげていると、不思議と落ち着いた事を思い出していた。

「神山先生が言う、人生の宿題。女はさ、子供を育てる事がやっぱり一番なんだって、何かそう思っていたのよ、そしたらお見合い話でしょう・・・不思議な気持ちだったんだ」
「だから見合いする気になったんだ」
「愛って独りじゃ生まれえないしね」彩子は神妙な顔つきになった。
「ほんとそうよ」

彩子は、昔は結婚しても上手くやれるか自信が無かったと言う、相手の短所が許せなくなったり、心から信じる事が出来なかったりと、何時も心に不安があったそうさ。

「疑心暗鬼なのよ」
「疑心暗鬼？」

相手が、また別な女性を愛するんじゃないか、自分を嫌いになるんじゃないかとか、色々不安がよぎる。

「恋は盲目で痘痕もえくぼに見えるって言うじゃない、でも結婚すると、痘痕はやっぱり痘痕、色々幻滅する事が起こるって、私そう思っていたのよ」

確かに、夫婦になると、恋愛している時に見えなかった相手の短所が良く見えてくる、彩子はその事がとても不安だった様だ。

その心の中は、愛されたい気持ちばかりだったと言う、でも今は違うそうさ。

「でもね、愛されたいと思っていると何時までも不安なの、でも私から愛する努力しようって、そう思う事にしたんだ」

「愛する努力ね・・・」その言葉を聞いて、少しばかり寂しさが沸いた、私には、その愛する夫が居ない。

人は生まれたかぎり、夫婦になり子供をもうけ、生涯を送る事が人生の大きな目的だって、あらためて感じたそうさ。其処には努力が必要だと感じたと言う。

「じゃ、菅原さんは、その努力の対象って訳か？」

「ハハハ、努力の対象って訳じゃないけど、彼は、信じる事が出来る人だから」

菅原さんは、三十超すまで結婚前提にお付き合いした事が無かったと言う、だから美しい彩子を心から愛してくれているそうで、その一途さがとても気に入ったそうさ。

「美沙、美沙が以前言ったわよね、運命の人まったら良いつて」

「言った言った、じゃその運命の人だと言うことか・・・」

「そう、私お見合いしたその日に、何かそう感じたのね、第六感ってやつかな」

「へえー、凄い話」

彩子は、人生で一番信頼できる男性に巡り会えた様だ、菅原さんには疑心暗鬼になる心が沸かないと言う、漸く彩子にも素敵な春が訪れた様だ。

「美沙のお母さんには、それとなくお話をしてあるわ」

彩子は、来春に結婚する気持ちになっていた。

私も、友人として彩子の幸せを、心から願っていた。

6

先生が入院されて半年、年末の大晦日が近づいてきた。

年末に誠慈と彩子と私が、お見舞いに伺って見たものの、先生のご様子は快復される処か、お会いする度に見るからにお辛そうなお様子で、寝たり起きたりを繰り返す生活だった。

痛みも毎日起こるそうで、さすがの先生も弱音をはかれた様だ。

先生は、すっかりお痩せになってしまい、かなり病気が悪化している感じだった。

其れでも私達がお伺いすると、具合の悪さを見せない様に振る舞われる。

終始にこやかに、どこそこが痛いだとか、気分が悪いだとか一切お話をされない。

丁度年末なので、日本はベートーベンの第九交響曲の話題が、病室のテレビから映し出されていた、先生とその話題に関して話をしていた時、先生は第九を病室で聞いてみたいとおっしゃられた。

最も病室に第九のCDが有る訳も無く、そのお話はその場の話題だけに終わる処だった。

処が、彩子が気転を聞かせ、病院の近くにあるCDショップにCDを買いに出かける事となり、急遽病室で第九を聞く事になった。

先生はとても恐縮しておられたけど、私達に出来る恩返しのつもりでCDを聞く準備をしたが、その事が私達にとっても、思い出深い出来事になった。

「先生、少し古い演奏ですがカラヤンの第九買って参りました」

「カラヤン・・・それは嬉しいねえ」

「先生がそう言うかと思いましたが、エヘヘ・・・」彩子は先生の年齢を考えて、最近の指揮者版ではなくて、わざわざ往年の名演奏を選んできたのだった。

「久しぶりに第九が聞けるね、有り難う」

先生のお喜びは殊の外で、満面笑みを浮かべておられた。

先生は、第九が作曲された経緯を良くご存じで私達に詳しく説明をして下さった。

当時、声楽を交響曲に取り入れる事は画期的と言うより、かなり異質な作曲だったそうで、賛否

両論有ったらしい。現代で言うならビートルズが突如現れて音楽界の常識を覆した様な、驚きが有ったのだろう。そう言えばベートーベンとビートルズはジャンルが違うのに良く比較される、ロックンロールにハーモニーを加えた斬新さと心を揺さぶる音楽の魅力が似ているのかも知れない。

第九交響曲はシラーの歌詞を取り入れて作曲する事をベートーベンは二十代から構想を温めていたという、三十代になって難聴となり様々な試練が彼を襲う、でもその試練こそが苦悩から歓喜に至るベートーベン自身の芸術の集大成として完成させた訳で、その意味ではその芸術の追究こそがベートーベンに与えられた神様からの宿題だったし、人生最後に仕上げた神様からの宿題だったに違いない、神山先生が大急ぎで引退コンサートをしたように、人生の全てを掛けて神に与えられた、究極の宿題を完成させたのだと、先生のお話を聞きながら感じていた。

だから、ベートーベンの第九は神と共に歓喜に至る内容だったのだ。

「誠慈君、第九の歌詞見てご覧なさい」

CDを聞く前に、先生は第九交響曲の四楽章歓喜の歌の詩が書かれた説明書を開いて見せておられた。

『おお、友よ！このような調べではない！

そんな調べより、もっと心地よく歌い始めよう、喜びに満ちて。

——途中省略——

抱かれよ、数多〔あまた〕の者よ！

この口づけを全世界へ！

兄弟達よ！星空の彼方に

愛する父（神）がおられるはずだ。

地にひれ伏さぬのか？数多の者よ。

創造主を感じるか？世界よ。

星空の彼方に求めよ！

星々の彼方に彼の御方（神）がおられるはずだ。

「ベートーベンは、神様を賛美する曲を完成させたかったんだね」先生がおっしゃった。

「そうだったんですか」誠慈も先生の説明を聞いて納得していた。

「それじゃ、内容が解った処で、聞いて見ようかね・・・」

第九の演奏が始まった。

先生と共に第九演奏の余韻に浸って、みんな幸せな気分になっていた。

第九の演奏が終了してまもなく、誠慈が先生に話を始めた。

「先生、僕」

「何だね？」

「僕、出来れば作曲家になって神様の宿題をやってみたいと思ってます」

「そうか・・・作曲家ねえ」先生はとても嬉しそうだった。

「それは素晴らしい選択だと思うよ、そうとなれば勉強することは山ほど有るよ・・・沢山勉強してね、誠慈君の曲聞いてみたいな」

「だから、先生もずっと長生きして下さい」

誠慈は涙目になって先生にそうお話をした。

「そうだね、長生きしなくてはいけないね」

「作曲家にはピアノを弾けることは絶対条件だから、君の今までの練習は無駄ではなかっただろう・・・」

「そうですね、無駄な事なんて無いんですね」

誠慈は、先生にそう言うとニッコリ微笑んでいた。

「でも、何で作曲家になろうと思ったんだね」

「実は僕、先生のお手紙頂いてから、モーツァルトやベートーベンの作曲の魅力とか勉強してみたんです、それで、曲を創る事の素晴らしさを感じて」

「そう、そうだったのか」

「今日も、先生のお話を聞いていて、益々その気持ちが強くなりました」

「うん、本当に頑張ってほしいな・・・」

そうおっしゃって先生は、とても安心したご様子で誠慈を見つめておられた。

ベートーベンが神様から与えられた宿題は、神山先生初め沢山の音楽家が音楽という芸術を通じて引き継ぎ、その宿題を完成させる為の人生を歩んでいるのだと、そしてその宿題は愛と歓びと言う糸で結ばれている。

その宿題を今度は、誠慈が引き継ごうとしているのだと、その日感じて感慨深い思いに浸っていた。

その日は、先生のご様態を心配しながらも、皆幸せな気持ちで帰宅した。

先生は誠慈を見るなり、満面笑みを浮かべられて、こっちに来なさいと、誠慈をベットの直ぐ側の椅子に座らせて、お話を始められた。

「誠慈君、君は作曲家になりたい夢を抱いたと言ったね、夢を追い求める事は、素晴らしい事だ、その夢を追って本当に頑張っしてほしいな・・・君なら出来る、きっと・・・ただ、一つだけ言っておきたいことが有るんだがね・・・」

「先生、何でしょうか？」

「うん、夢とは人間にとってとても大切な事だ、夢、希望を持つ事が人間らしい生き方、つまり神様から人間だけに与えられた特別な心です。私がいつも言う言葉で言えば、自分自身と周りの人に幸せを生み出す為の神様の宿題が夢という形になるのだと、私は思っているんだよ、だから、夢は夢で終わらせてはいけない、宿題だとね・・・」

「だだ、誠慈君・・・人生は夢が必ず実現出来るとは限らない、むしろ実現出来ない事が多いかもしれない、長い人生の中では、その夢の方向が変わることだって有るんだよ、そんな悲観的な事と思うかもしれないが、これは私の実感なんだよ」

「でもね、たとえ夢が実現出来なくとも、あるいは方向が変わったとしても、神様の宿題は同じだと思って生きないといけないよ、君はまだ若いから、人生、どんな変化が訪れるか解らないだろう・・・いや・・・変化が有って当たり前だと思う、解るかな」

「はい、先生解ります、もしも作曲家の夢が駄目でも、新しい夢を持って先生は思っているんですね・・・」

「うん・・・」先生は大きく頷かれた。

「ところで・・・もう、お迎えが近いようだ・・・」

「先生、そんな」誠慈も私も先生の弱気な気持ちを聞いて言葉を詰まらせた。

でも先生は意外なお話を始められた。

「人はね何時か死ぬ、でもね、死は怖くないのだよ、死ぬと言うことは、神様の近くに帰る事と思っているからね」

「神様の近く？ですか・・・」誠慈が頭を傾げ微笑んだ。

「そうだよ、人は魂となってね神様の懐に帰る」

「魂？」また誠慈が頭を傾げた。

先生はクリスチャンだから本当にその事を信じている様だった、むしろ私も先生のお話は空想とは思っていないけど、凡人の私にはまだまだ理解出来ない世界だった。

「兎に角、私の身体は何時の日か無くなるだろうけど、私の魂は永遠に生きている、丁度音楽が何百年たったとしても消滅しないようにね」

先生はあの世が有る事を信じておられた、だから死は怖くはないと、ただ現実の世界でピアノを弾き、沢山の人と交流する事が出来なくなる寂しさが有るとおっしゃられた。

「誠慈君の将来を見届ける事が出来なくなるのは、残念だがね・・・」
「でもそれが現実、神様から与えられた現実を甘受しなくてはならない」
先生は、人生の最後、誠慈に何かを託される様にお話をして下さった。

「じゃ、解ったかな誠慈君」
「はい、ありがとうございます先生」
「良かった、私もこれで安堵したよ、兎に角どんなことが有っても人を愛し夢を追い求める気持ち忘れないことだよ」
「はい・・・」
先生は、か細い両腕を誠慈の頭に乗せて髪の毛を優しくなで回していた。
二人の魂は、本当の祖父と孫になったのかもしれない。

8

——二〇〇四年二月三日、先生のご様態が急変した。

「村上さんですか」
「あ、菜都美さん、どうされました」
「父が危篤で・・・」
「ええ」私は絶句した。

私は誠慈と二人して、急遽病院に駆けつけた。
病室に着くと、菜都美さん夫婦が、深刻な顔で待っておられた。
すでに彩子と中村先生は病院に着いておられ、とても心配な顔つきで私達を迎えた。
先生のお子様やご親戚の方音楽事務所の方が、危篤の知らせを受けて駆けつけていたので、待合室はざわついていた。

「菜都美さん、先生は？」私が聞いた。
「昨夜から急に容態が可笑しくなり、今朝は一時心肺停止しました」
「えっ心肺停止」
「ええ、でもまた快復して、それからはずっと治療室の中で・・・」
「其れにしても、急な」私が呟いた。

私は、七日前にお見舞いに来ていた、その時はまだ、お話が出来ていたし食事も摂られて、誠慈とも会話をしていた、ただ何時もより顔色が悪くて、お話も長くは出来なかったのもので、癌治療でお疲れになっておられるのと思っていた。

まさか、こんなに早く危篤状態になるなど、考えられなかった。

菜都美さんの話でも、数日前までは何時もと同じ様な状態で、食事も少量だけど摂られ、声も掛けられていたそうで、昨夜急に高熱が出ると、身体中に汗をかかれ、魘されていたそうだった。こんなに急にご様態が悪化するなど考えられなかったと言う。

その後、先生の居られる集中治療室に向かった。

面会謝絶の掲示が有って中には入れなかった。

ドアの前で、看護師の説明を聞いたけど、人工呼吸と救急治療をされて、かなり危険な状況に有るとの話だけで、其れ以上は不明だった。

それから二時間、私達は待合室で様子を伺っていると、目に涙を浮かべた菜都美さんが出てこられた。

午後三時二十五分、菜都美さんは先生がお亡くなりになった事を告げた。

享年八十六歳だった。

偉大なピアニストがこの世とお別れをした。

「先生・・・先生・・・先生・・・」

私も、誠慈も、彩子も、中村先生も、菜都美さんも、みな泣いた。大声で泣いた。

先生とお別れする事が寂しくて、悲しくて、切なくて、涙を止める事が出来なくて、ずっと泣いていた。

私の脳裏に先生のピアノが聞こえてくる、優しいあの月光の音が聞こえてくる。

私の家族を愛して下さった、優しい先生の声が聞こえてくる、暖かい先生のあの姿が浮かんでくる、でももう言葉は交わせない、辛い辛い時間だった。

私は、辛くて悲しくて何時までも何時までも泣いていた。

*

葬儀は二日後、お茶の水のニコライ堂で執り行われた。

私と誠慈そして彩子、中村先生、四人一緒に先生の葬儀に参列するため、お茶の水に有るニコライ堂に向かった。

お茶の水駅を下車して、起伏のある道を歩くと、近代的なビルの中に、西洋造りの建物が見えてきた。

「母さん、ニコライ堂だよ」誠慈が教会を指さして言った。

「うん着いたね」

歴史を感じさせる、美しい教会、ニコライ堂。

正式な名称は、東京復活大聖堂と言うそうで、ロシア人修道司祭、聖ニコライの依頼によりロシアの建築家が一八九一年に完成させた神殿だそうだ。

すでに葬儀を待つ沢山の人が、教会の内と外に溢れていた。

先生を天国にお見送りしようと、行列が出来て、街路樹が茂る歩道にまで人が並んでいる。

私達もその列に並び、ゆっくりゆっくり教会に向かい歩いた。

教会はドアが開かれていて、つま先立ちをして館内をのぞき込む様に見てみると、遠くに先生の棺が見えて来た。

教会の中に入った私の目に飛び込んだ風景は、美しいステンドグラスと、静かに何かを語りかける様に灯す金色のロウソクだった。

静かに、優しく灯るロウソク、先生の死を悲しむように、ゆらりゆらりと小さな灯火が揺れている。そのロウソクを見つめていると私の目に涙が溢れてきた。

まるで悲しい涙が流れる様に、ロウまでが涙の形になって溶け出している様だった。

棺が置かれた教会の中央は、吹き抜けのドームになっていた。

先生の棺を見守る様に、ステンドグラスに描かれたキリストが優しく先生の前に佇んでいる。荘厳で美しい神殿で先生は安らかに眠っておられる。

高い天井に詰められた窓ガラスから、キラキラと木漏れ日が差し込み、先生の棺を照らしている、まるでキリストの御手が先生を優しく撫でるように。

そして私はまた泣き崩れた。

ハンカチで口元を押さえても、嗚咽は止まらなかった。

先生の棺に近づけば近づくほど、涙は流れ、すすり泣きが止まらなかった。

白い花を一輪手に取り、先生の棺の周りにそっと置いた。

眠るように優しい先生のお顔が見えていた。

何も言えなかった、悲しすぎて。

何も見えなかった、涙でかすんで。

先生さようなら、そしてありがとうございました。私は心の中でそう言った。

教会に、先生のピアノ演奏が流れていた。

ショパン作、ピアノソナタ第二番第三楽章、葬送行進曲だった。

美しい教会に、先生の慈愛深いピアノの音色が流れていた。

それから先生が聞いてきた賛美歌が、信者の合唱隊により歌われた。
天使が降りてくる様な、美しいハーモニー、先生が幼い頃感動した聖歌隊の調べ。
私も、その美しい賛美歌を聴きながら、心が癒されていった。
先生の魂もきっと癒されているに違いないと感じていた。
ロシア人の司祭がキリスト教の儀式を行い、葬儀は終了した。

「誠ちゃん、本当にお別れだね」
誠慈は、だだしんみりした様子で、先生の棺を見つめていた。
誠慈が目を閉じ、棺に向かいゆっくりお辞儀をし最後のお別れを告げた。
「ありがとうございました」

夫が他界して、まだ二年だというのに、今度は先生まで天国に行ってしまった。
辛い毎日だった、私と誠慈の拠り所だった先生が今は居ない、悲しくて苦しくて、寂しくてどうしようもない気持ちで佇んでいると、声が聞こえた。

「あの一村上さん」
声が背中越しに聞こえたので、私が振り向くと、菜都美さんがおられた。
「菜都美さん・・・」
私は、言葉が出なかった。ハンカチを口元に付け涙目で菜都美さんを見ていた。
菜都美さんは、右の手に封筒を持っておられ、私に差し出した。
「村上さん、これは、お父さんから村上さんに渡して欲しいと生前預かった手紙です」
「先生からお手紙」
先生は、私だけでなく、彩子と中村先生にも、それぞれお手紙を書いておられた。
私は驚くやら、嬉しいやら、その手紙を受け取ると直ぐに封を切って読み始めた。

『美沙さん、誠慈君、色々有り難う御座いました。
長い間、交流が出来たこと、嬉しい限りです。
お二人が、この手紙を読んでいる時、もう私は別の世界に行っている事でしょう。
言葉を伝える事が出来ないのです、この手紙をしたためました。』

もう少し時間が許されれば、誠慈君の曲を聞きたかったのですが、其れは叶わぬ夢になりました。

誠慈君を初めて見た時、私は、私の幼い姿と重なり合わせておりました。
あの時の感情は、実に不思議なもので、人の出会いの神秘を感じさせて頂きました。
後日、美沙さんから誠慈君の誕生日が同じ日だと聞かされて、其れもまた驚いて降りました。
やはり神様が、村上家と合わせて下さったのだと、私は感じておりました。

村上さんご御一家との交流は、お会いする度、何か特別な気持ちが沸き、誠慈君を素晴らしいピアニストに育てなくてはならないと言った感情が沸いたものです。

残念な事に、誠慈君も右手があんな事になり、口惜しさは消えるものでは有りません。

ただ、其れを乗り越えた誠慈君は、本当に立派な事です。

美沙さん、誠慈君の事と大切なご主人を亡くされた事で、さぞお辛かったろうと思います、そんなお辛い日々を送りながら、美沙さんもよく耐えて、頑張られました。

本当に偉い事と、関心しております。

でも、悲しみはいつまでも続く事は無いのです、音の余韻が静かに消えゆく様に、悲しみもまた、静かに消えて行くものです。

神様は、天国からその姿を見つめておられます、悲しみを持つ者に、神様は微笑みを浮かべて下さりますから、そう信じて生きて行って下さい。

何時の日か、誠慈君が作曲した音楽で、人々を癒してあげて下さい。

誰も聞いた事が無い、美しい音色を創作して、沢山の人々に喜びをあげて下さい。

勿論此は、私の願いですが、誠慈君に託された神様の宿題なのだろうと思います。

とは言え、あまり深刻に考えず、自然体で、心の命ずるままに行動して下さい。

前にも言いましたように、例えまた挫折する様な事が有ったとしても、御心のままに

決して焦らず、諦めず、投げ出さず、日々努力し勉強し、逞しく生きて行って下さい。

本当に、長い間お世話になりました、そして本当に有り難う御座いました。

私の身体は、土に帰りますが、魂は生き続けます、此からは、目には見えない世界から、応援しております。

親子二人何時までも仲良く、楽しく過ごして下さい。

短い手紙で恐縮ですが、これが私からの最後のお便りになります。

呉々も、お身体ご自愛して下さい。さようなら、美沙さん、誠慈君。

神山泰徳 』

手紙を読み終わった時、誠慈が教会の床に伏せるように俯せになり、嗚咽し始めた。

「先生・・・」誠慈は身体を震わせて泣いていた。

その後、先生と最後のお別れをして、私達はニコライ堂を離れていった。

二〇〇四年二月五日、偉大なるピアニスト、神山泰徳先生。

——天に召された日となる。

神山先生が天に召されてから、私も誠慈も何か心の拠り所を失った空虚感を抱いていた。夫も神山先生も居ない人生は、とても辛く虚しいものだった。誠慈も、先生と約束はしたものの、やはり寂しさが込み上げて、音楽の勉強が手に着かない日々を送っていた。

「ねえ、誠ちゃん、先生が天国で見てるわよ、頑張らなくちゃね」

「うん・・・」返事はするが、実際誠慈は重い腰を中々上げようとしなかった。

私は、自分の心と裏腹に誠慈には勉強をするように励まし続けた。

悲しい時間は、数ヶ月続き、厳しい冬の季節と重なり有って、何か心にぽっかりと穴が開いた様な、力も元気も出ない日々を送っていた。

何時の日か、冬は過ぎて、桜が咲く美しい春がやって来ていた。

寂しい心は、春の訪れ故なのか、桜や草花が競い合って咲く協奏曲故なのか段々と癒されて、漸くその悲しみも薄れ始めて、誠慈も音楽の勉強を少しずつ再開する様になって行った。

「これ以上、先生を悲しませる訳にいかないね」

誠慈の心に漸く光が差し始めていた。

あれは、そんな日々を送る二〇〇四年四月末。

既に桜の花は散り、小枝の先には透き通る美しい新葉がポツリポツリと増え始めた、穏やかな季節を迎えていた。

そんな時、私達の心にも新たな命の芽吹きを感じさせる電話が入った。

「ねえ、美沙、館野泉のピアノリサイタルが有るのよ」

その電話は彩子からだった。

「館野泉さん・・・このところリサイタル無かったけど、久しぶりだね」

「其れがね、館野泉、脳梗塞で倒れて半身麻痺で右手が使えず、左手だけでピアノ弾くんだって」

「ええー、半身不随、左手、ほんとお？」

彩子は、リサイタルのチラシに載った詳しい話を伝えてくれた。

アクシデントは、二〇〇二年フィンランドで館野泉四十周年記念リサイタルを開催中に起こった。

演奏が終りに近づいた時、段々右手が利かなくなり、演奏が終了した直後、床に崩れ落ちた。診断は脳溢血だった。右半身不随。

ピアニストとしての人生が終演してしまった、闘病生活は二年も続いたそうだ。

丁度、夫が亡くなった時期と重なり、私はそのアクシデントを全く知らなかった。
夫の事や誠慈の看病で我が家に音楽が消えていた時期、館野泉もまた、闘病生活をしていた。
誠慈が右手を駄目にした時、館野泉もまた右手が使えなくなったそうだ。
処が半身不随のピアニストが、再起するリサイタルを開くと言うから驚いた。
しかも左手だけで演奏するそうなので、まるで誠慈に見させる為に、神様が開いて下さるリサイタルだと感じていた。

「詳しい事は、ホームページでも説明しているから、とにかく誠慈君にね」
「そうだね・・・誠慈が何と言うかだけど・・・ま、とにかく連絡ありがとう彩子、詳しく調べてみるから、じゃあね、感謝」

誠慈にリサイタルの事を話してみた。
「どう、誠ちゃん行って見ようよ」
「母さん、リサイタル行くのは良いけどね、僕は左手のピアニストにはなれないよ」
「そんな事、解ってるわよ」
私は、誠慈に左手のピアニストになって欲しい気持ちは全く無かった。
第一、館野泉とはキャリアが違いすぎる。ただ、このリサイタルで、誠慈に何かを掴んで欲しい一心だった。
「解った、母さんの為に行くよ」
「何言ってるの、あなたの為よ」
「僕の為？、やっぱり母さんの為だと思うけどなあ・・・ははは」
互いが何か寂しい気持ちを持っていたからか、そんな言葉を投げかけ有っていた。

私は、誠慈と二人で、館野泉ピアノリサイタルの会場に向かった。
左手だけのピアノリサイタル——
リサイタル会場は不思議な静けさが漂っていた。
両手では素晴らしい演奏をして来た館野泉、昔何度か演奏会を聞いた、優しさが伝わる素晴らしい演奏をされる、純粹にピアノ曲の美しさを教えてくれる演奏だった。
でも、それは健康な時の事で、右手が使えないなら、演奏は大変なはず。
シューベルトや北歐の音楽家をこよなく愛してきた館野泉が、左手だけでどんな演奏をするのだろう、そして何よりも気がかりな事は、誠慈がどんな気持ちになるかだった。

会場の証明が落とされ、舞台のピアノが照らされた、不思議な静けさから、拍手の音が鳴り始めた、私は沢山のリサイタルを見てきたけど、この拍手と静けさは、感じたことの無い雰囲気だった、私と同じで聴衆は、期待と不安が混然となり、あの不思議な空間を作り上げていた。

館野泉が登場してきた、ゆっくりと片足を引きずるように歩いている。

その姿を見た瞬間、私の目頭が熱くなり、私は一瞬目を閉じた。

(どんなに苦勞して、今日を迎えたのだろうか、辛かっただろう・・・) 私はそう思うと涙を堪える事が出来なかった。

誠慈の顔をそっと見ると、誠慈も深刻な顔つきになって、黙っていた。

左手を鍵盤にそっと添えて、右手は、右膝の上に乗せたまま、演奏を始められた。

ブラームス作、バッハ・シャコンヌ・左手のためのピアノ編曲

スクリャービン作、左手のための二つの小品 作品九 前奏曲・夜想曲

——信じられない。

左手だけなのに普通に両手で弾いているとしか聞こえない。

スクリャービンの二つの小品を聞いていると、また涙が溢れていた。

(館野さん、此所まで来るのに言いようがない苦しさがあっただろうに・・・)

左手から伝わる慰めの音から希望と言う音がハーモニーとなって聞こえている様だ。

誠慈は、館野泉の演奏を、ただただ、じっと見つめていた。何も語らずに。

本当に、右手が使えないハンデを感じさせない演奏だった。

不安と期待の混じり合ったりサイタルは、驚きと感動に変わっていった。

私は、左手だけのピアノ演奏を初めて聞いて、衝撃を覚えていた。

何故、こんな素晴らし演奏が出来るのだろうか？

普通ピアニストが見つめる楽譜は、上の段が右手の演奏、下の段が左手の演奏と分けられているので、館野泉は下の段しか演奏が出来ない事になる。それでは右手が弾くピアノの生命とも言える高音部の美しい音を演奏出来ないのでは、曲にはならないだろう、でも館野泉は、その高音部を左手だけで美しく奏でる。

ピアノの鍵盤のほぼ中央から右が主に右手で弾き、左が左手で弾くのが基本だから、鍵盤右側の部分を左手で何でも弾きこなすのは難しい、と言うより普通は無理な事なのだ。

普通なら伴奏と旋律を右手と左手がそれぞれ担当する。

つまり、右の手が高度なピアノタッチの演奏を担当し、左手が低音部を弾いている事が多いのだけど、館野泉は、高音部も低音部も、左手だけで弾きこなしている。

四十年もの歳月ピアノを弾き続けて来た技術が優れている事と、左手が右手の代わりを務める程、自由にピアノをタッチ出来るからだろうけれど、それは奇跡としか言えない。

下半身不随の身体だと言うのに、左手は右手の代わりまでして、素早く対処してピアノにタッチする、しかも完璧なピアノタッチで、音を外すことが無い、お見事としか言えない。

演奏した曲は、戦争で右手を失ったピアニストの為に作曲された曲や、左手だけで弾きこなせ

る様に楽譜が工夫されているものだとしても、普通のピアニストでも演奏が難しい高度なテクニックが必要な曲ばかりだった。

演奏の全てが奇跡と言えた。そして演奏は終了した。
館内に大きな拍手が鳴り響き、館野泉自身感激している様だった。

誠慈はどうなのだろう？ とても心配で堪らない気持ちだった。
誠慈は、目を瞑りながら拍手をしていた、そして何も語らなかった。

会場を後にして、駅までの道を二人で歩いていた。
何時までも誠慈は黙ったまま歩いているので、しびれを切らした私が呟いた。

「誠ちゃん、どうだった」

「うん、凄かった」そう呟いただけで、それ以上何も語ろうとしなかった。

誠慈は、返事も話もしようとしなかった、ただ黙って何か思い込んだ仕草で歩いていた。

（誠ちゃんたら、なに黙ってるんだろう）私は少し心配だったけど、黙り込んだ誠慈に声を掛けにくかった。

もう、夜も更け帰宅したのは夜中だったので、誠慈とは殆ど会話せず、自宅に着きそのまま二人とも休んでしまった。

私は、誠慈の態度が気になり、中々寝付けず、あれこれと思いを巡らせていた。

翌朝、いつの間にか寝ていた私が起き出したのは、すでに八時を過ぎていた。
その日は日曜だったので、誠慈に声をかけず、朝の食事を用意していた。
すると、誠慈が現れて「お早う母さん」と明るい表情で挨拶をしてきた。
私は、昨日の誠慈の態度が気になっていたけど、朝はまるで人が違うように明るい表情だったので少しばかりホッとしていた。

「昨日は黙っていて、ご免なさい」

「そうよ、とっても心配したのよ、母さん眠れなかったわよ」

「ご免」

昨日のリサイタルの後の姿を見て心配だった私に、誠慈は思いもよらない話を始めた。
あのリサイタルは、誠慈の心を大きく動揺させていた様だ、だから帰り道では何を言って良いのか解らなく、どう応えたら良いか整理出来なかったと言う。

「僕さ、昨日はホントの処、震えるほど感動してたんだ、でも何か言えなかった」

「そうだったの」私の心はホッとした。

「館野泉さん、偉いね・・・普通ならピアノ人生お終いだよ」

「そう偉い人ね」

「でもさ、パンフレットに、ほら書いてたよね、ピアノが好きだから右手が使えない事が苦痛じ

やないって・・・そんな事、普通言えないよ」

「そうよね、言えないし、やれないわ、ただ、館野さんは、四十年以上もピアニストとして頑張ったからだよね」

「でも」

「でも、でも何？」私が聞き返した。

「僕は、あの人の姿見て、諦めたら駄目なんだって、よくよく解った気がする」

誠慈は、館野泉の再起する執念とも言うべき、努力と忍耐に感動していた。

「館野泉さんは、右手使えないけど、僕は少し使えるから、ピアノ頑張って弾くよ」

「えっ、ピアニストになるって事？」

「そうじゃないよ、それは無理だとしても、演奏は続けるって事さ」

「そう言う事ね」

「僕さ、頑張るよ・・・神山先生と約束した作曲家の道、諦めないで頑張る」

「そうよ、その気持ちよ」

「よーし、やるぞー！」誠慈は両手を高く翳し、大声でそう叫んだ。

私は、何だかとっても嬉しかった。

(そうよ、頑張れ誠ちゃん)

「頑張れ、頑張れ、頑張れ」私は、大粒の涙を流して誠慈を励ました。

誠慈は、館野泉リサイタルを見てから、人が変わったかの様に音楽の勉強を熱心に始めた。そして中村先生の処にも足を運ぶ様になって行った。

神山先生との約束を果たしたい一心で、誠慈は一生懸命勉強を続けた。

もう、誠慈の姿に不安は無くなった。

此から一回りも二回りも大きくなる誠慈を見たいと私は思っている。

*

「美沙さん、あと二十分後に生徒さんが来るので、レッスン準備お願いね」

「はい、テキストとバイエル教本用意しましたので」

私は、神山先生が遺言の様に話された、ハーモニーの素晴らしさと、西洋音階の素晴らしさを教える仕事、音楽教室の先生を始めた。

そう、私が通う音楽教室は、中村音楽教室。中村先生の助手となり働き始めた。

中村先生が考えたプログラムに基づく子供の音楽を教える仕事だが、それは神山先生の教えを相

続したもので、神山先生の意志を継ぐ内容だった。

子供達の成長が目に見えて解るので、とてもやり甲斐のある仕事、私が長年望んで来た仕事、私自身漸く生きる希望と自信が湧いてきた。

私が担当する子供達は、小学校低学年でまだ可愛い子供ばかり、この子供達を未来のピアニストにさせる為に私は、頑張ろうと思っている。

誠慈と同じで、神山先生との約束を果たすため、人生の宿題が定まった。

そしてもう独り、人生の友彩子は、この九月花嫁となる。

ニコライ堂で受け取った神山先生の手紙には、早く結婚して、可愛い赤ちゃんを産むようにと書いてあったそうだ。先生はそんな事まで、気遣っておられた。

運命の出会いを果たし、理想のカップル目指して、彩子の旅も始まった。

あんなに結婚に否定的だった彼女は、心から愛する永遠の相手を見つけることが出来て変わった。

愛は全てを溶かす、彩子の姿には、その言葉がぴったりだった。

10

お部屋に流れるフジ子・ヘミング演奏曲が、ラフマニノフ・パガニーニの主題による狂詩曲 第十八変奏に変わった。

何てセンチメンタルで優しい曲だろう、生きる希望と勇気が湧いて出てくる。

——素敵な演奏

フジ子・ヘミングも聴覚を悪くして苦勞を味わった、だからこそ彼女の演奏には、心に染みいる温もりの音が潜んでいるのだと思う。

彼女だって神様の宿題を一生懸命歩んで来たから花が咲いたんだ。

「私の人生、最後に良いことが有った。ピアノを辞めなかった私に神様がくれたご褒美じゃない」彼女がそう言っていたけど、今の私は、彼女の言葉が染みいるように良く解る。

「ねえ母さん、パンもう一枚焼いてよ、絶対焦がさないでよ、頼むから・・・」

またパンの焼き加減で注意された。

「イチゴジャム付ける？」

「いいよ、自分で付けるから」

「そう・・・」

平凡な親子の会話だけど、この平凡な会話を続ける事がどんなに大切か痛感した毎日だった。

そんな平凡な親子生活も、あとどの位続けられるだろうか、彼も段々成人に近づいて、いつの日か私の元から旅立ってしまうのだろうか。

来年は誠慈も大学受験、音大を目指して猛勉強中。

結局、誠慈の右手が完治しピアニストになる奇跡は起こらなかった。

残念だけどピアニストの夢は消えてしまった。

ピアニストの夢は絶たれても、作曲家になる新たな夢に向かいチャレンジを始めている。

親心で言うなら、切なく悲しい面も有るけど、でも彼の人生は此からだから、彼の新たな人生にエールを贈ろう。

彼は、神山先生と約束した神様の宿題を果たすために、今努力している。

だからピアノの練習は無駄にはならなかった、そう思う事になっている。

指が完治する奇跡は起こらなかったけど、神山先生の暖かい励ましで、彼は音楽家の夢を捨てずに歩み始めた。

私は、その事こそが奇跡だと、今は感じている。

コーヒーを飲みながら、今朝見た夢を思い出していた。

小高い丘の上から、広く大きな草原を見ていた。

まだ辺りは暗く、美しい星空が私の視界に広がっていた。

スーと流れ星が草原に落ちると、その流れ星の落ちた場所が、金色に輝き初め、みるみる間にコンサートホールに変わっていった。

それは、とても美しいコンサートホールだった。

数え切れない程の演奏家達が、白い燕尾服姿でピアノを囲む様に演奏している。

ピアノは純白に輝き、美しい音色を奏でている。

ピアノを演奏している方は後ろ姿しか見えず解らない、ピアノをタッチする指は、まだ艶やかな指先で、純白な燕尾服姿の若い男の人が演奏をしている。

誰だろう、と思った瞬間、その方が誰なのか見ずとも感じた、若い神山先生だと。

その楽団のコンサートマスターが、独奏を始めた。

その人も誰なのか見ずとも解った。ヴァイオリニストは愛する夫だと。

沢山の演奏家が、神山先生のピアノに合わせて協奏曲を演奏している。

そして夫の奏でるヴァイオリンの音色が美しく響いている。

美しく、穏やかな音色が私の心に木霊する。

私は、何か暖かいものに包まれて、今度は私の魂の深淵から、その音色に呼応するかの様に、言葉が沸いてきた。

まるで乾いた土地に泉が沸き出すかの様に、言葉が沸き出した。

真心から生きなさい

生かされている日々を

真心から生きなさい

愛されている日々を

その魂を揺さぶる言葉に、頷きながら演奏に酔いしれていると、いつの間にか夜が明け始め東雲より朝日が差し込んで、コンサートホールは眩しく輝き始めた。

演奏する全ての人々が、にこやかに微笑んでいた。

その顔は、朝日に照らされて神々しく光り輝いている。

キラキラ、キラキラ、その人々は輝いている。

(完)

参考文献

高木東六『父母・幼児のための音楽教室』（愛心教育研究所）

千葉優子『ドレミを選んだ日本人』（音楽之友社）

平野昭『ベートーヴェン』（新潮文庫）

三宅幸夫『ブラームス』（新潮文庫）

櫻井知子『第九歓喜のカンタービレ』（ネット武蔵野）

飯尾洋一『クラシックBOOK』（三笠書房）

小澤征爾『ボクの音楽武者修行』（新潮文庫）

原明美・江森浩『ピアノおもしろ雑学辞典』（ヤマハ）

オロール・サブロー＝セガン

『トラウマを乗り越えるためのセルフヘルプ・ガイド』（河出書房新社）

フジコ・ヘミング『魂の音色を奏でるピアニスト』（河出書房新社）

館野泉『左手のコンチェルト』（佼成出版社）

ジャン・ファシナ『若いピアニストへの手紙』（音楽之友社）

老ピアニストの遺言

<http://p.booklog.jp/book/46326>

著者：天野祐嬉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/y-amano/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46326>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46326>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.